

5 自然科学の分析・調査

A 五丁歩遺跡出土縄文土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1) はじめに

生産地である窯跡が残っていない縄文土器は須恵器のように產地を推定することはできない。しかし、別の面から蛍光X線分析のデータは活用される。すなわち、従来の考古学研究では形式による分類から、土器の伝播・流通が推察されてきた。これが蛍光X線分析でも裏付けられるかどうかである。このような観点から、全国的に縄文土器、弥生土器、土師器の蛍光X線分析が進められている。

五丁歩遺跡から出土した縄文土器は形式からみて在地型と関東型に分けられる。果たして、蛍光X線分析の結果はこのように分類できるかどうか、分析した結果について報告する。

2) 分析方法

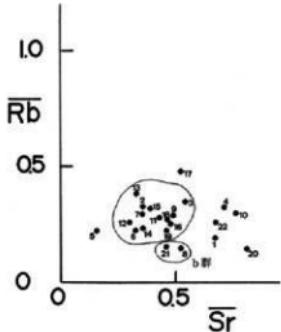
縄文土器試料の処理方法は須恵器の場合と同じである。土器表面を研磨してから粉碎した。粉末試料は塗化ビニール製リングを枠にして、約10トンの圧力を加えてプレスレ、コインの綫剤試料を作成し、蛍光X線分析を行った。分析元素はK、Ca、Fe、Rb、Sr、の5元素である。分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1の分析値を使って標準化した値で表示された。

3) 分析結果

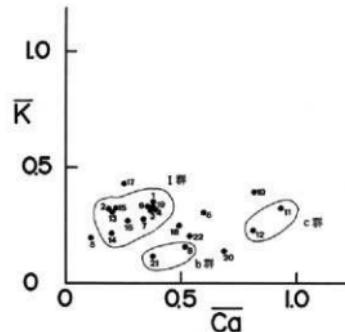
表84には分析値を示す。この中から、Rb、Sr、の生データを使って作成したRb-Sr分布図を第94図に、また、K、Caの分析値を使って作成したK-Ca分布図を第95図に示す。すべての土器はRb、Kの値が0.5以下で少ないが、Ca、Sr量はかなりばらついており、このままではどのように解釈してよいのかよくわからない。そこで、上記の4因子を使いクラスター分析を行い、これらの縄文土器が分類できるかどうかを調べることにした。クラスター分析は多數の土器を分析データから分類したり、また、異質の胎土をもつ土器を他の集団から抜き出す上に役に立つ。第96図にはクラスター分析の結果を示す。横軸には試料番号を類似したものから順に並べてある。綫軸にはK、Ca、Rb、Srの4因子を使って最短距離法で計算した類似度を示してある。そして、土器試料は類似したものから順に枝に結び付けられていくが、異質の胎土のところで大きなギャップが生じる。ただ、どの程度の大きさのギャップが生じたところで区切るかについてはこの方法では特に判断をしてくれない。したがって、研究者の方で任意に区切って分類してみて、この区切り方が妥当であるかどうかを何か他の方法で確かめてみる必要がある。ここでは、Rb-Sr分布図、K-Ca分布図上で確かめることにした。

まず、第96図より、No10はどの枝にも結び付かず、また、類似度においても他のサンプルとは大きなギャップがあるので、他の土器とは異質の胎土をもつと考えられる。逆に、No2～7までの9点の土器は一本の枝にまとめており、類似した胎土をもつ土器と考えられる。そこで、これらをI群とした。他のものについては群の形成は困難であるが、No1とNo4は互いに類似しており、また、No8とNo18、No11とNo12もそれぞれ類似した胎土をもつとみられる。そこで、これらをそれぞれ、a、b、c群としてみた。この分類結果も表84に示してある。このような分類が妥当かどうかは第94図のRb-Sr分布図、第95図のK-Ca分布図で確かめられる。第94、95図より、この分類がほぼ妥当であることがわかる。残りの縄文土

器については分類はできない。この結果、五丁歩遺跡の縄文土器は胎土からみてまとまりはよくないが、それでも全体の半数近い9点の土器がI群を形成、同じ地域で作られたと推定された。また、a、b、c群の各2点の土器も同じ所で作られた土器と推定される。この結果を形式分類の結果と比較してみると、a群の2点とc群の2点はそれぞれ、在地型縄文土器、関東系勝坂型縄文土器に対応し、胎土分析の分類結果と形式分類の分類結果が一致したが、I群と分類された土器は在地型縄文土器のみならず、関東系勝坂型縄文土器、関東系阿玉台型縄文土器、関東系新巻型縄文土器にも含まれており、また、b群と分類された土器も関東系勝坂型縄文土器と関東系新巻型縄文土器に分かれており、一般的には胎土分析の結果は必ずしも、形式分類には対応しないことがわかった。とくに、I群と分類された土器は全形式の縄文土器中に含まれており、この結果を重視すると、全形式の縄文土器が在地産ということになる。それにもかか



第94図 五丁歩遺跡出土土器Rb-Sr分布図



第95図 五丁歩遺跡出土土器K-Ca分布図

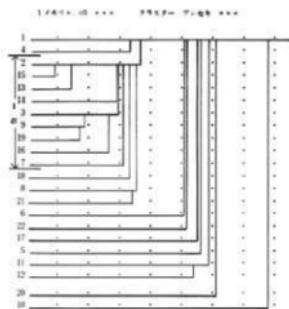
	資料番号	実測番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	分類
在地	1	669	0.347	0.379	3.55	0.188	0.669	a
	2	1245	0.320	0.189	1.49	0.344	0.364	I群
	3	470	0.319	0.367	2.59	0.450	0.543	I群
	4	1243	0.319	0.387	2.77	0.344	0.707	a
	5	299	0.198	0.111	3.71	0.234	0.162	
関東勝坂系	6	229	0.308	0.569	5.70	0.229	0.332	
	7	127	0.280	0.339	3.12	0.302	0.357	I群
	8	1324	0.158	0.515	4.90	0.153	0.522	b
	9	765	0.329	0.364	3.79	0.288	0.493	I群
	10	1260	0.395	0.819	5.30	0.295	0.762	
	11	764	0.334	0.927	4.68	0.280	0.429	c
	12	1261	0.231	0.808	5.95	0.257	0.299	c
関東阿玉台系	13	424	0.314	0.195	4.11	0.377	0.326	I群
	14	948	0.218	0.201	4.30	0.235	0.360	I群
	15	1325	0.315	0.206	3.28	0.322	0.392	I群
	16	1326	0.266	0.270	2.84	0.255	0.477	I群
	17	974	0.434	0.249	3.35	0.482	0.520	
新巻類系	18	1151	0.251	0.490	2.37	0.268	0.474	
	19		0.339	0.373	3.96	0.226	0.461	I群
	20	1259	0.137	0.692	3.62	0.147	0.805	
	21	1145	0.122	0.380	4.45	0.164	0.461	b
	22	966	0.214	0.540	4.17	0.261	0.672	

表84 五丁歩遺跡出土土器の分析値

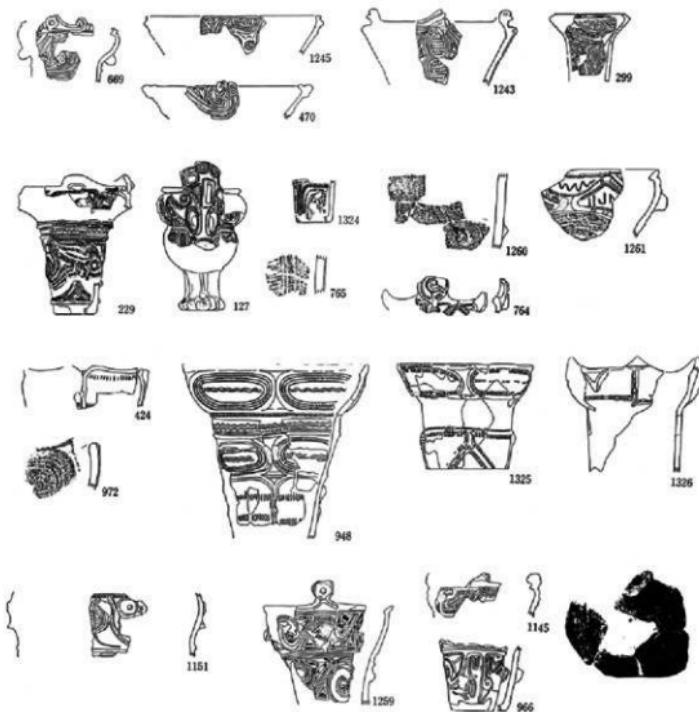
5 自然科学の分析・調査

わらず、第94、95図よりみてわかるように、Sr、Ca因子で大きくばらつくのは地元内の何ヶ所かで別々に作られた土器であることを示す。このようなことは蛍光X線分類からみた縄文土器の特徴であり、弥生土器や土師器とは異なる。あるいは、完全に定住生活に入った時代の土器と、そうでない時代の土器の胎土の特徴といえるのかもしれない。

いざれにしても、これだけのデータから縄文土器胎土について結論を下すのは危険であるが、同時に、縄文土器の土器形式から伝播・流通を論じることは他の土器と同様に危険であることを示している。



第96図 クラスター分析 (K、Ca、Rb、Sr因子使用)



第97図 分析に使用した土器

B 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1989年 11月 30日

新潟県教育委員会

1989年6月28日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はB線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料のB線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料のB線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、MODernと表示し、 $\pm 14\%$ を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK-14383	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	3940 ± 110
	No. 1 1 H 1号住	1990 B. C.
GaK-14384	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	4150 ± 180
	No. 2 2 H 2号住	2200 B. C.
GaK-14385	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	Could not be dated
	No. 3 3 H 3号住	Recovered carbon; less than 0.1gr
GaK-14386	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	4500 ± 120
	No. 4 3 H 4号住	2550 B. C.
GaK-14387	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	4020 ± 90
	No. 5 5号住B地点	2070 B. C.
GaK-14388	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	5130 ± 90
	No. 6 6号住B地点 D-24	3180 B. C.
GaK-14389	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	4330 ± 100
	No. 7 D-13 F P-3	2380 B. C.
GaK-14390	Charcoal from 五丁歩遺跡 新潟県	5240 ± 140
	No. 8 D-14 F P-1	3290 B. C.

以上

木 越 邦 康

C 五丁歩遺跡の出土物自然科学分析報告

貴、新潟県教育委員会般より御依頼のありました、「五丁歩遺跡の出土物自然科学分析」が終了致しましたので、その結果を下記の通り御報告申し上げます。

はじめに

五丁歩遺跡は、魚野川流域の山地斜面に位置する遺跡で、縄文時代の集落址などが検出されている。今回調査では、クロボク・ロームを対象に遺跡が営まれていた当時およびその前後の時期における植生を明らかにすることを目的として、花粉分析を行った。また、風倒木内より採取された土壌についても同分析を行い、その樹種に関する情報を得ることを試みた。

1) 試料

分析試料は、調査区内の20-Cグリッド（ローム層中心）・18-Cグリッド（クロボク層中心）の断面および風倒木内（23D風-2東壁）から採取された土壌である。各地点の土層の記載および試料採取層位を第98~100図に示す。

2) 分析方法

湿重20gの試料について、HF処理→重液分離（ZnBr₂：比重2.2）→アセトトリル処理→KOH処理の順に物理・科学処理を行い、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、光学顕微鏡下で観察しながら種類（Taxa）の同定・計数を行う。

3) 結果

計数結果を一覧表として表85に示した。次に各地点ごとに化石の産状について述べる。

(1) 18-Cグリッド地点

P6・7・13・17試料では、産出する化石数が極めて少なかった。また、僅かに産出した化石の保存状態は悪く、化石の種類の同定を行う上で重要な花粉外膜が変質していた。

黒褐色土のP1~P3試料では、産出する花粉・胞子化石は比較的多かったものの、その半数以上は種類同定が不能な化石であり、残りの化石もかろうじて同定できるものであった。その種類は、木本花粉14種類と草本花粉8種類である。木本花粉のスギ属・ハンノキ属・コナラ属と草本花粉のイネ科・ヨモギ属が多産する。

(2) 20-Cグリッド地点

P-1~P-9のロームの試料では、産出する花粉・胞子化石数が極めて少なく、P-1、P-5、P-6ではヨモギ属・ヤク亜科が僅かに検出されたにすぎない。その化石は保存状態の良くない、かなり変質したものであった。

(3) 23D風-2（風倒木）

①~③の3点の試料では、20-Cグリッド地点と同様に産出する化石数が極めて少なく、保存状態も良くなかった。

4) 考察

母植物で大量に生産された花粉・胞子は、大部分が地表に落下し、雨水などにより再移動した後、最終的に堆積物あるいは土壌中に取り込まれる。取り込まれた花粉は堆積中にいろいろな変質作用（酸化・土壌微生物など）の影響を受ける。酸素の供給の少ない湿地や池沼に堆積した花粉・胞子は、花粉の内容物や内

膜は分解するものの外膜だけは分解せずに化石として保存される。逆に乾燥した土壤中に堆積した花粉は土壤微生物や化学的な酸化分解などの影響により、そのほとんどが分解する。そのため、古生態学的研究を目的として行われる花粉分析では、花粉・胞子が化石として残っている確率の高い湿地や池などの堆積物を対象とする場合が多く、逆に台地や山地の埋没土壤を対象とする場合は少ないのである。ただし、台地や山地の埋没土壤にも花粉・胞子化石が分解されずに残っている場合もある。神保(1936)は八甲田山の山地斜面の腐植土壤とその近隣の高層湿原の泥炭堆積物について花粉分析を行い、両調査地点の結果を比較し傾向が類似することから植生変遷を推定している。また、浦部(1975)は岩手山麓の埋没火山灰土壤について2地点で花粉分析を行っているが、埋没土壤では土壤動物などによる上下の擾乱の影響を受けているとの理由から、埋没土壤表層の花粉組成に関する議論に止めている。このように埋没土では、擾乱などの影響を受けている可能性が高く、得られた花粉化石群集が必ずしもその土壤生成時の植生を反映しているとは言えない。また、花粉・胞子は、酸化に対する抵抗性の強さが植物の種類によって異なることが知られている(一般に落葉樹より針葉樹の方が酸化・腐敗に対して抵抗が強い)。このことは、酸化の影響を強く受けている土壤中では、分解・消失をまぬがれた花粉・胞子化石の組成が本来の組成を反映していないおそれがあることを示し、検出された花粉・胞子化石の種類・量を統計学的に取り扱って古植生を推定する一手法としての花粉分析では、最も大きな問題の一つといえる。埋没土壤の花粉分析については、この他にも多くの問題があり、解決されるべき問題はいまだに少なくないのである。

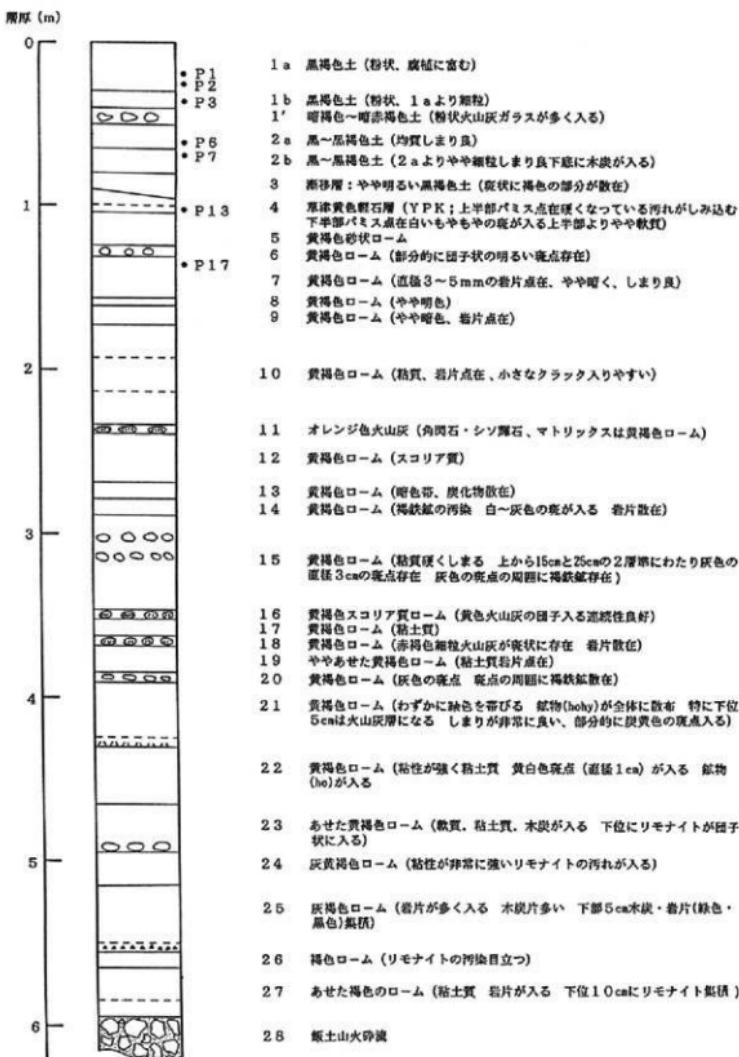
今回の試料も火山灰を母材とする風成の土壤であり、その試料から産出した花粉・胞子化石もまた、酸化や土壤微生物などによる変質作用の影響、擾乱の影響などを受けた可能性が高い。すなわち、各試料では経年変化により分解・消失した種類が多いことや、上下の層位からの擾乱によって再堆積した化石が含まれていることが推定される。18-Cグリッドの上位の黒ボク土とみられる黒褐色土壤の1a、1b層では、概ね同様な植生が成立していたことや、産出した種類が当時の台地上の植生を構成していたことは推定されるが、両層は現表土と考えられる。また、化石がわずかしか検出されなかった他の試料については、植生を推定することはできない。今後は、本遺跡周辺地域の植生を把握するために、花粉・胞子化石の良好な保存が期待される魚野川流域の低湿地や、周辺の山間の湿原などにおいて花粉分析を行い、その結果を参考にして本地域の植生について改めて検討することが必要であろう。

引用文献

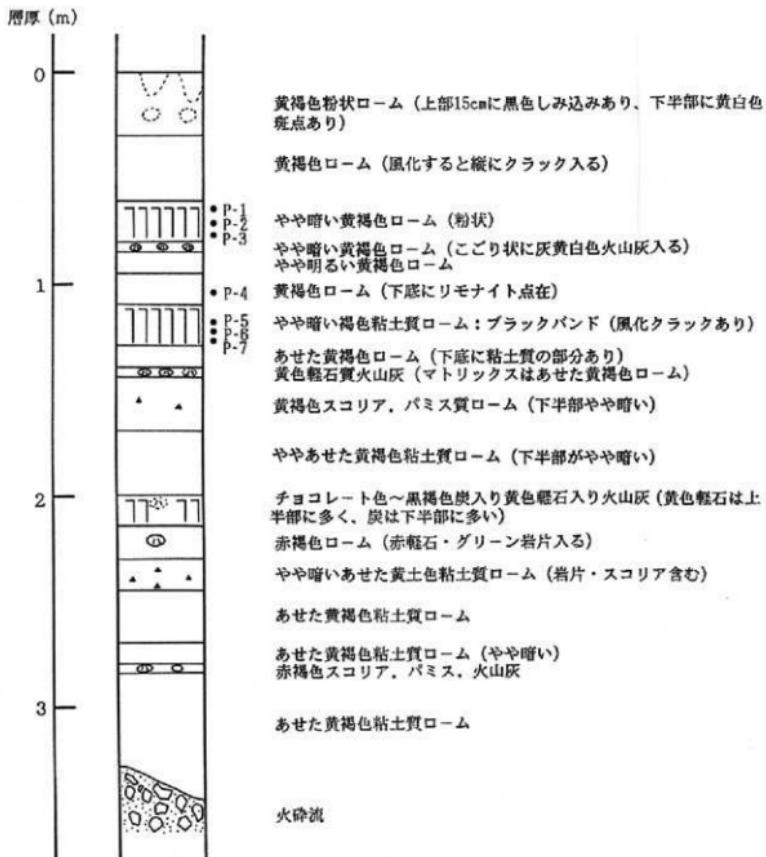
- 神保忠男 (1936) 八甲田山の泥炭及び腐植土の花粉分析、生態学研究、vol.2, No.1, p.17-20.
浦部速明 (1975) 岩手山麓の埋没火山灰土壤の花粉分析的研究、ペドロジスト、第19巻、第1号、p.2-

表85 五丁歩道跡試料における花粉分析結果

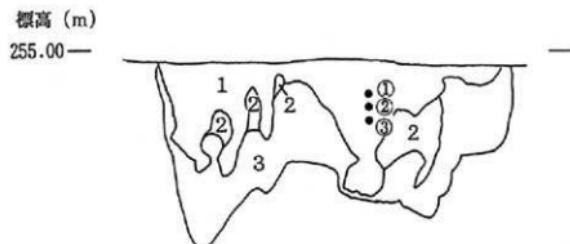
種類 (Taxa)	地点 試験番号	18-C ₃₇ F						20-C ₃₇ F						23D風-2 (東風)						
		P1	P2	P3	P6	P7	P13	P17	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	①	②	③
木本花粉																				
セミ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ツガ属	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
スギ属																				
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
クマシデ属-アサガホ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ハンノキ属	3	6	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ブナ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属	17	12	12	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
タリ属	2	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
ニレ属-ケヤキ属	-	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
トチノキ属	3	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ツバジ科	-	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
イボタノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																				
イネ科	19	10	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	2	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタケ属-ウツギガホカリ属	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウガ属	4	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨセギ属	5	8	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
キク属	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ属	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	66	110	87	23	9	2	3	2	1	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	2
シダ類孢子	23	17	20	6	2	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
合計	42	34	33	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
木本花粉	33	29	20	1	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1
草本花粉	66	110	87	23	9	2	3	2	1	0	0	0	0	0	0	2	1	1	2	3
不明花粉	23	17	20	6	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
シダ類孢子	164	190	160	33	11	5	3	3	1	1	1	1	1	1	2	3	1	2	1	4
総花粉	164	190	160	33	11	5	3	3	1	1	1	1	1	1	2	3	1	2	1	4



第98図 五丁歩遺跡18Cグリッドにおける模式土層断面柱状図および花粉分析試料の採取層位



第99図 五丁歩道跡20Cグリッドにおける模式土層断面柱状図および花粉分析試料の採取層位

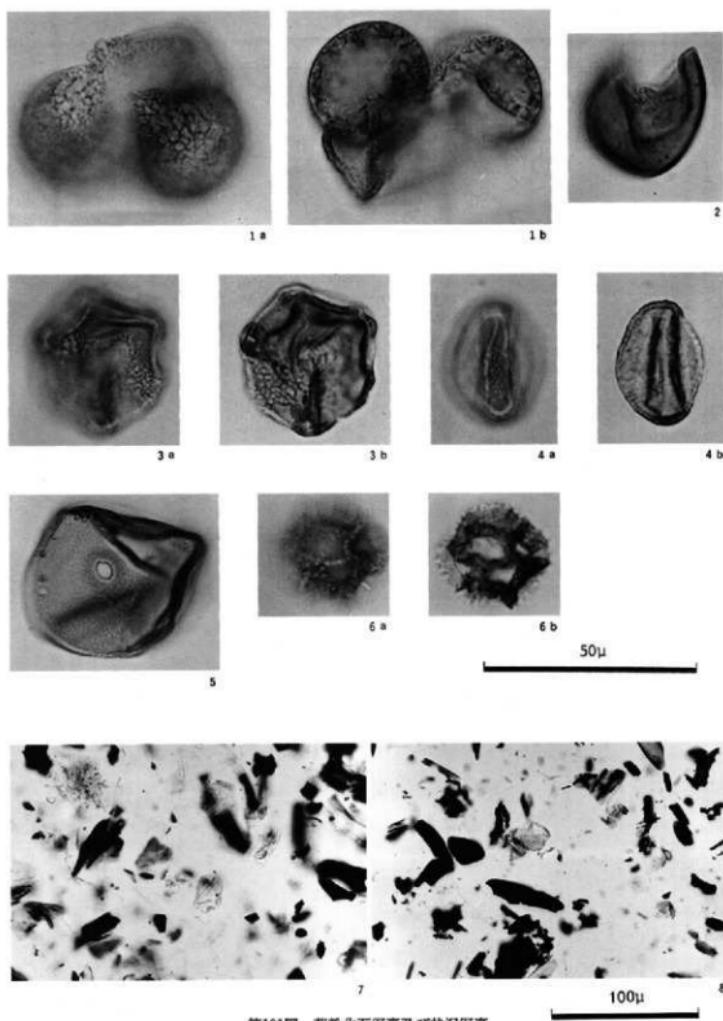


1 暗褐色土～チョコレート色土（しまり非常によく粘性大きい上面にKPY散在する）
2 1層とロームの斑状混じる
3 ローム

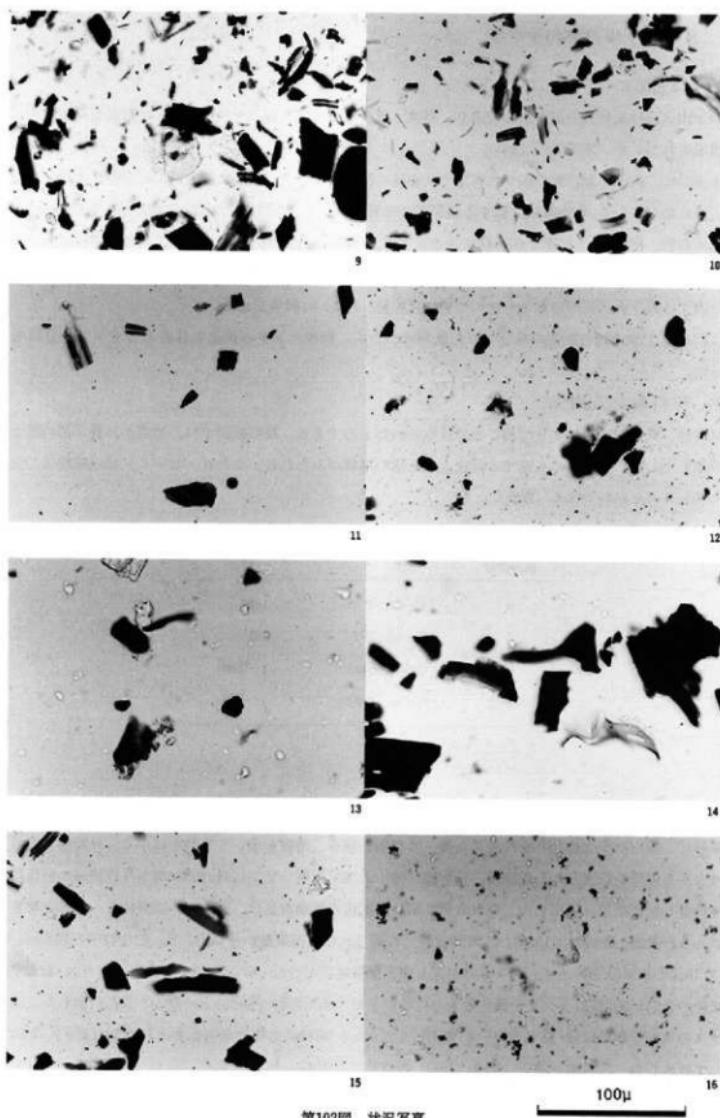
第100図 五丁歩遺跡23D区風-2（東壁）の模式断面図および花粉分析試料の採取層位

図版説明

番号	花粉化石名	地点	試料番号	標本番号
第101図				
1 a + b	マツ属	18C グリッド	P - 1	2032
2	スギ属	〃	〃	2033
3 a + b	ハンノキ属	〃	〃	2031
4 a + b	コナラ属	〃	〃	2035
5	イネ科	〃	〃	2036
6 a + b	タンボポ亜科	〃	〃	2034
7	状況写真	〃	〃	
8	〃	〃	P - 3	
第102図				
9	状況写真	18C グリッド	P - 6	
10	〃	〃	P - 7	
11	〃	〃	P - 13	
12	〃	〃	P - 17	
13	〃	20C グリッド	P 2	
14	〃	〃	P 4	
15	〃	〃	P 6	
16	〃	23D 風-2	②	



第101図 花粉化石写真及び状況写真



第102図 状況写真

D 五丁歩遺跡のテフラ

1) はじめに

飯士山火山は更新世中期の火山であり、石英・單斜輝石・斜方輝石・角閃石などの輝晶を伴う安山岩から構成されている（茅原ほか、1981）。

本遺跡は、飯士山北西麓に広がる斜面の北西縁に位置する。すぐ西側には魚野川に平行する崖線が北北東方向に伸びている。本遺跡の位置する斜面下の地質について、松村（1977）は第2期噴出物、茅原ほか（1981）は大原溶岩、梶（1986）は第2期活動による五丁歩火砕流、高野（1989）は火山麓扇状地とそれぞれ呼称が一定していない。高野（1989）によると本遺跡ののる面は米原Ⅱ面（M2面）とされている。なおこの地域に分布する風化火山灰層の鉱物分析については松村（1977）の報告がある。

今回は五丁歩遺跡の断面で採取された試料について、指標テフラの検出を目的としてテフラ分析を行なった。

2) 試料および分析法

試料は、発掘担当者によって層ごとに採取されたものである。採取断面では、地表から最下部の飯士山火砕流までの間に約6mにも達する風化火山灰層の堆積がみられる。またa・b・c・dの試料は、土坑内で採取された試料である（表86）。

表86 試料表

試料番号	地点	層位
a	F-34, P 1	16層
b	F-34, P 1	2層
c	G-34, Pit 1	4-①層
d	G-34, Pit 1	4-②層

分析法

試料は、湿ったまま約20gを秤量した後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析筒（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析筒（#60, #250）を用いて $>1/4\text{mm}$ および $1/4\sim 1/16\text{mm}$ の粒径に簡便・秤量し粒径組成を算出した。なお分析に用いた試料の乾燥重量は、別に同一試料約5~10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105°C、5時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/ $4\sim 1/16\text{mm}$ の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・軽鉱物・重鉱物の合計が300粒以上、また風化物その他の粒子を含めた合計が500粒以上になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法にしたがい、細粒鉱物粒子を包有するF型火山ガラスはF'型として区別した。屈折率の測定は新井（1972）の方法にしたがった。

3) 鉱物組成

偏光顕微鏡下での計数結果を表87に示す。これをもとに粒径組成、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成、形態別の火山ガラス含有量、および重鉱物組成を第103図に示す。なお形態別火山ガラス含有率は試料単位

重量当たりの1/4~1/16mm粒径の火山ガラスの割合で表示した(注1)。

(1) 深掘り地点

粒径組成における>1/4および1/4~1/16mmの砂分を合わせた含有率は上部のNos. 3~1で20%を越えるが、他の試料では10%前後である。火山ガラス・軽・重鉱物組成では、火山ガラスの含有量についてみるとNos. 24'~23, Nos. 18~15, Nos. 12~8, およびNos. 2~1において約30%前後の高い値を示す。重鉱物と軽鉱物では、ほぼ等量の試料も見られるが大部分は重鉱物の方が多い。軽鉱物は、大部分の試料で長石>石英であるが、Nos. 27~25', No. 20, およびNos. 5~3においては石英>長石である。

形態別の火山ガラス含有量では、中間型のC型がもっとも多く含まれるが最大でも1%に充たない。C型火山ガラス多産層位は、Nos. 18~15およびNos. 10~8付近である。バブルウォール型のA・A'型、塊状のB型、多孔質型のF型などがわずかながら漸減的に検出されるが、顕著な極大を示さない。

重鉱物組成は、主に斜方輝石・角閃石・不透明鉱物などが多く含まれ、単斜輝石は少なく、酸化角閃石・カンラン石・緑簾石・ジルコンなどがわずかに検出される。斜方輝石は、下部のNos. 27~25では10%前後だが、Nos. 24~23で35%, No. 22の19%を極小に上方に漸増し、No. 16で42%の極大、No. 13で26%の極小、No. 8で51%の最大値をとる。またNo. 4で13%の極小を示し、上方に漸増してNo. 1で42%を示す。単斜輝石は数%がふつうであり、最大でもNo. 19の12%である。角閃石は下部で多く上部に漸減する傾向がみられる。角閃石の極大はNo. 22の47%を最大にNos. 27~25・13で36~38%の極大値を示す。不透明鉱物はNo. 26で64%、No. 20で56%、No. 4で69%の極大をなし、緩やかだが変化に富む産出を示す。カンラン石はNo. 7で4%を示す。

(2) F-34, P 1 地点およびG-34, Pit 1 地点

粒径組成は、砂分の含有が10%前後少ない。

火山ガラス・軽・重鉱物組成における火山ガラスの含有量は、試料bが46%と多いが、他は約20~30%前後の値を示す。重鉱物>軽鉱物である。軽鉱物は、全ての試料で長石>石英である。

形態別の火山ガラスの含有率は、深掘り地点と同様にC型がもっとも多く含まれ、試料bで1.3%の最大値を示す。またA・A'・B・F型などがわずかながら検出される。

重鉱物組成は、深掘り地点と同様、主に斜方輝石・角閃石・不透明鉱物などが多く含まれる。斜方輝石は、a・dで38~46%と多く、c・dでは30~32%とやや少ない。角閃石は、c・dで29~36%と多く、a・bで7~24%とやや少ない。不透明鉱物は26~37%含まれる。単斜輝石は数~10%と少ない。酸化角閃石は微量検出されるが、カンラン石は検出されない。

4) 検出されたテフラ

No. 16を中心とする17~15では、長柱状自形の角閃石と共に、(100)面の発達した扁平で清澄な斜方輝石の自形結晶が含まれる。このような晶癖をもつ斜方輝石は、大山倉吉軽石(DKP:町田・新井, 1979)に特徴的であることから、No. 16での黄色火山灰層はDKPに相当すると考えられる。DKPは、津南地域では、貝塚面以上の段丘面上に認められる(早津・新井, 1981)。DKPの噴出年代は約4.5~4.7万年前とされている(町田・新井, 1979)。

No. 11のオレンジ色テフラは、灰色安山岩質スコリアを含むこと、褐色F'型火山ガラスが検出されること、斜方輝石>単斜輝石であること、およびDKPの上位であることなどから妙高火山群地域の大平スコリア(O'D:早津・新井, 1980)、あるいは飯山地域の柏尾スコリア(KA:早津・新井, 1981)に対比される可能性がある。大平スコリア層は約4.2万年前の噴出年代があたえられている。

5 自然科学の分析・調査

No. 7では重鉱物のうちカンラン石が4%と他の試料よりも多い。この試料中にはときに黒色スコリアを含む。カンラン石とスコリアの存在およびDKPと大平スコリアの上位であることから、約3万年前の貝坂スコリア（KS：早津・新井，1981）あるいは約2.5万年前の前坂スコリア（MS：早津・新井，1981）対比されるかもしれない。両テフラは、妙高火山を起源とするカンラン石斑晶を伴う玄武岩質スコリアである。

No. 4は最大粒径が数mmの発泡良好な質白色軽石からなる。軽石は風化している斑晶鉱物は斜長石・不透明鉱物・斜方輝石・单斜輝石を含む。不透明鉱物は細粒新鮮な粒状自形結晶で多量に含有される。両輝石には無色C・F型火山ガラスの付着がみられる。これらの斜方輝石の屈折率を測定したところ $\gamma=1,706\sim1,713$ の測定値が得られた。これは草津黄色軽石（YPk, 約1.1万年前）の屈折率 $\gamma=1.707\sim1.712$ （町田ほか、1984）と一致する。草津黄色軽石は、浅間火山を給源に北北東方向に分布軸をもち、湯沢町付近でも分布が確認されている。これらのことからNo. 4の軽石は、草津黄色軽石YPkに対比される。なお草津黄色軽石層準には軽石型火山ガラスの濃集部があるとされるが、No. 4では認められない。しかし上位のNos. 1~2でB・C・F・F'型などの軽石型火山ガラスが多く、関連性があるかもしれない。

今回の分析では約2.2~2.1万年前降灰した姶良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976）層準は検出されなかった。層位からすると、貝坂スコリアあるいは前坂スコリアに対比される可能性のあるNo. 7と草津黄色軽石に対比されるNo. 4との間に存在するはずである。断面では黄褐色ローム中に明るい斑状部分をもつNo. 6がAT層準と予想されたが、鏡下ではA・A'型火山ガラスの含有率がきわめて低い。また一般にATの火山ガラスは、降灰後の二次的移動によって上下とくに上方へ拡散する場合が多い。No. 4付近の試料中に含有されるA・A'型火山ガラスは、ATに由来する可能性があるが、一般的な上方への拡散量からするときわめて少ない。したがってAT降灰後、草津黄色軽石降灰直前までの間にこの地点では削剥作用を受けたものと考えられる。

5) 従来の鉱物分析との比較

今回の分析結果は、角閃石・斜方輝石・不透明鉱物を主体にし、單斜輝石・酸化角閃石を伴う点で飯塚火山麓でなされた村松（1977）の重鉱物分析結果とよく一致している。大山倉吉軽石DKPは、貝坂段丘疊層直上のローム層から検出される（早津・新井，1981）。したがってNo. 16以上の風化火山灰層は貝坂ローム層に、おそらくNos. 21~19の暗色部を境として下部は米原ローム層に対比されるであろう。高野（1989）は本遺跡のるる面を米原II面としており、今回の分析結果はこれに対応している。

信濃川流域のローム層の重鉱物組成は、貝坂段丘をおおうローム層では角閃石・不透明鉱物のほかに斜方輝石を多く含有するが、より下位のローム層では不透明鉱物と角閃石が卓越している（新潟第四紀固体研究グループ、1969）。本地域の米原ローム層中には角閃石・不透明鉱物のほかに斜方輝石が多く含まれている。両者の米原ローム層中の斜方輝石量の相違は、おそらく風成二次堆積粒子の給源地であるところの周辺地質の差によるものと推定される。

注1 形態X型の火山ガラスの含有率A Xは、

$$A X (\%) = (C / B) \times (E \times / D) \times 100$$

で算出される。ただし、

B : 試料の乾燥重量 (g)

C : 1/4~1/16mm粒径砂分の重量 (g)

D : 計数した1/4~1/16mm粒径粒子の総数

Ex : 計数した X 型火山ガラスの粒数

引用文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノジーの基礎的研究—。第四紀研究、11、254—269。
- 茅原一也・小松正幸・島津光夫・久保田喜裕・塩川智 (1981) 越後湯沢地域の地質。地域地質研究報告 (5 万分の 1 地図)、地質調査所、108p.
- 遠藤邦彦・鈴木正章 (1980) 立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、19—30。
- 早津賢二・新井房夫 (1980) 炙高火山群テフラ地域の第四紀テフラ層—示票テフラ層の記載および火山活動との関係—。地質学雑誌、86、234—263。
- 早津賢二・新井房夫 (1981) 信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代。地質学雑誌、87、791—805。
- 梶清史 (1988) 飯土火山。『日本の地質中部地方 I』共立出版、209。
- 新潟第四紀固体研究グループ (1969) 新潟県の第四系。地図研専報、15、127—159。
- 町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 T n 火山灰の発見とその意義—。科学、46、339—347。
- 町田洋・新井房夫 (1979) 大山倉吉軽石一分布の広域性と第四紀編年上の意義—。地学雑誌、83、303—338。
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラ日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—。渡辺直経編『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』、865—928。
- 松村達 (1977) 飯土山の地質について。新潟の自然、3集、31—36。
- 高野武男 (1989) 新潟県魚沼地方の地形からみた地殻運動と六日町盆地の形成過程。地球化学、43、366—391。

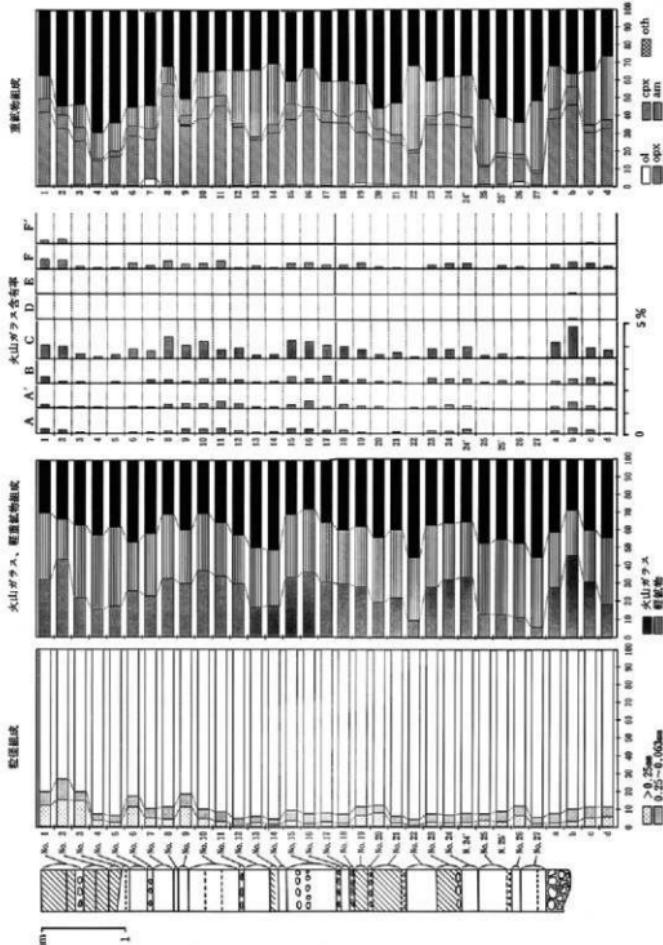


図103図 五丁歩遺跡試料の粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成図
gl カンラン石 opx 別方輝石 PC 開隕石平行晶 cpx 平行晶 am 布岩石 OPX 不規則颗粒 eth 空洞
opx 粒状物 PC 粒状物 air 空洞

表87 五丁歩道跡の礫物組成

試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	No.23	No.24	No.24'	No.25	No.25'	No.26	No.27	a	b	c	d
A 無色	15	14	6	6	8	5	6	9	15	19	31	20	11	13	21	19	19	17	7	5	13	5	16	14	24	7	2	7	14	23	17	5	
A'無色	12	6	10	12	7	8	7	15	16	21	40	36	13	16	17	36	14	21	15	14	7	12	15	24	19	8	4	4	2	14	28	16	8
B 無色	21	10	10	8	14	4	18	13	7	18	25	24	11	18	28	20	37	18	21	13	16	8	34	30	28	12	13	14	8	17	20	29	12
C 無色	44	49	26	20	29	42	38	80	42	75	47	74	24	33	75	74	69	62	44	21	42	18	59	49	63	19	18	6	5	80	114	42	36
C'無色		1																								1	1						
D 無色	2	1	1	1	3	3	2	2	2	1	1	2	2	2	2	1	1	2	2	1	1	2	3	4			1	1	2	4	1	2	
E 無色	2		1	1	1	3			1	1			1															1	4	1			
F 無色	29	37	16	14	13	25	17	30	15	23	43	9	20	10	24	26	21	20	32	12	8	5	23	32	30	5	15	11	8	23	26	23	12
F'無色	4										1									1	1												
F''無色	12	18	1				4	1	1	1	4	1								1	1										1	5	1
石英	30	20	71	91	121	31	59	19	14	22	37	43	46	41	31	25	38	47	44	68	90	43	44	41	65	89	95	78	34	11	21	43	
長石	135	52	57	71	67	66	89	148	87	124	133	169	114	120	150	148	140	160	102	60	88	102	148	109	115	92	83	65	78	138	113	106	108
カントン石		1	2	1	1	7				1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1					2	2	5	2					
斜方輝石	55	34	29	22	26	47	37	71	45	52	90	79	63	81	58	56	67	69	47	40	38	58	71	61	59	19	29	24	14	86	63	53	59
両輝石平行構造											1																						
单斜輝石	10	8	9	2	5	9	10	10	7	16	12	5	4	13	13	3	12	7	19	9	8	4	10	12	10	2	4	4	4	12	14	7	9
角閃石	17	4	13	22	25	15	20	12	11	16	29	68	89	91	20	29	31	37	25	16	29	143	39	33	41	68	37	33	84	55	9	51	66
融化角閃石		1	2	3	1	2	1	2	1	2	1	2	1	3	3	2	1	2	1	2	1	2	1										
隕石																																	
シルゴン		+																															
不透明藍色	49	57	63	116	102	92	88	45	67	48	68	81	82	81	62	44	76	78	69	88	85	96	81	67	66	96	113	117	115	71	59	60	48
黒色		1	1							2	1	1																					
その他	110	720	243	182	180	86	181	56	67	39	90	58	39	38	45	59	130	160	121	59	77	65	83	161	119	196	177	48	47	144	168		
合計	547	1031	559	572	603	542	575	543	514	605	626	694	673	579	543	543	542	559	513	527	606	621	549	582	561	528	583	579	569	529	581	577	

(数字は枚数、+は計算以外の検出を示す)

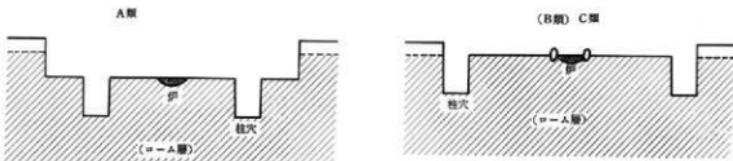
6 まとめ

A 遺構について

1) 住居跡の分析

a) 住居跡の構造について

各説の遺構説明において、住居跡については、ただ“住居跡”として説明を加えていたが、その形状、構築方法には違いが認められる。一つは、平面形が円又は橢円形で明確な掘り込みを有するいわゆる堅穴住居跡である(A類)。柱穴は住居跡掘り込みの内側に存在する(第104図)。柱穴は4本～6本で、4本柱の他は長方形を呈さず、掘り込みの平面形をめぐるように柱穴が配される。ローム面での掘り込みは明確である。炉はすべて地床炉である。これに対して、柱穴の平面形態が長方形又は亜甲状を呈するものがある(B・C類)。発掘段階においてローム面での掘り込みは、ほとんど認められず、斜面の山側で一部認められるのみである。したがって、掘り込みはあったものの、A類に比べるとあまり深くは掘り込まなかつたことがわかる。また柱穴はA類に比べるとやや大きくなっている。柱の数は長軸で3本又は4本、短軸で2本を基本としている。掘り込みは長軸は直線、短軸は直線又は、弧状になっていたと考えられる。A類と一番大きな違いは、柱穴と掘り込みとの関係である。つまりB・C類は柱穴列と掘り込みラインとが一致しているということである(第104図)。上屋構造が明確でないが、このことから、壁の立上りが柱穴列と密着しており、掘立柱建物風の構造であったことが想像できる。このB、C類の構造の建物は、県内では堀之内町清水上遺跡、津南町沖ノ原遺跡等にある。



第104図 五丁歩遺跡住居跡構造断面模式図

b) 住居跡の形態分類

当遺跡で確認された住居跡は、65基を数えるが、そのうち中期前葉～中葉(環状集落の形成)にかけてのものが59基、中期後葉5基、その他1基である。ここでは、環状集落を形成した住居跡群について分析検討を加えたい。

分類基準としては、その形状・規模・柱穴の配列・炉の形状・位置等を加味して行った。
A類…いわゆる堅穴住居跡である。

A-①類…隅丸方形を基本とした小形の住居跡である。床面積は8～13m²。4本柱で方形又は台形の配置をとる。中央には地床炉を有する。堅穴状の掘り方をもつていて。7基が確認されている(7C

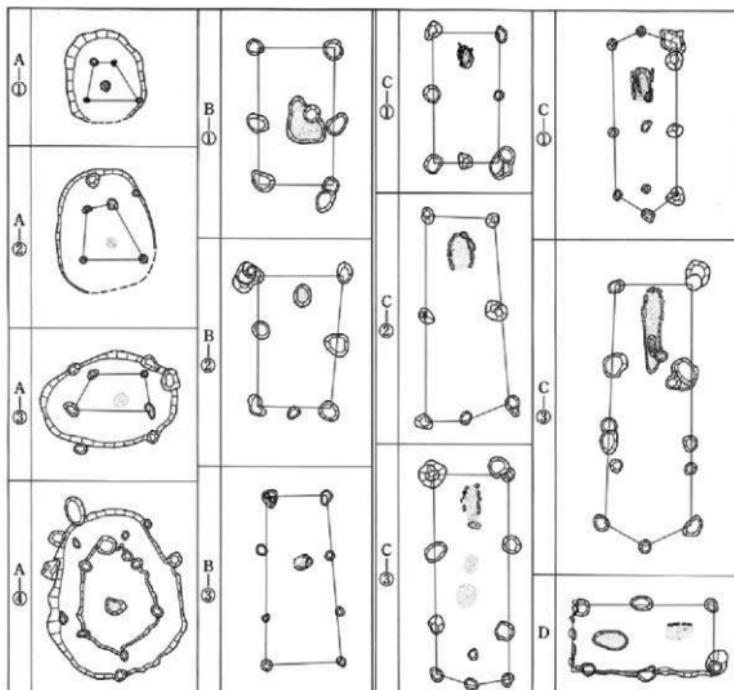
号住・8B号住・13号住・29号住・30号住・31A号住・39号住)

A-②類…梢円形に近い掘り方をもつ。床面積は14m²前後とA-①類よりやや大きい。やはり4本柱で、台形の柱穴配置をとる。柱穴間距離もA-①類より広くなる。中央には地床炉を有する。2基が確認されている。(7B号住・10A号住)

A-③類…やや細長い卵形の掘り方をもつ。床面積は13~20m²くらい。やはり4本柱で、ややつぶれた台形配列で、上・下辺の柱穴間距離が長くなる。中央には地床炉を有する。3基を確認している。(7A号住・11号住・33号住)

A-④類…A-③類と同様卵形の平面形状をもつ。床面積は大きく15~30m²に到る。柱穴は5~6本で五角形を基本とするが亀甲状に近いものもある。中央には地床炉を有する。6基確認されている(7D号住・8A号住・19号住・21号住・32号住・20号住)。この中で7D号住は掘り方が確認されていない。また、21号住は住居跡の柱穴列の外側が一段高い構造となっており、やや特殊でこれ一例のみである。

B類…一方形又は長方形の柱穴配置をとるものである。やはり竪穴状であったと考えられる。炉は地床炉で



第105図 住居跡形態分類図

ある。

B-①類…床面積が10m²前後と最もも規模のものである。炉は地床炉で中央にある。このB-①類としたものは、床面積はほぼ同じであるが形状が3基共異っている。29B号住居跡は方形の4本柱で長軸を結ぶラインに布掘り状の溝がある。12号住は4本柱であるが、長軸がより長い。やはり布掘り状の溝をもつが、全周はしていない。集落内側の短辺には溝ではなく、また外側は一部切れている。16D号住はより細長く、短軸の倍の長さが長軸である。溝はない。

(12号住・16D号住・29B号住・26号住・38C号住)

B-②類…床面積は13m²前後とB-①類よりやや大きい。柱は1間×2間で長軸はほぼ5m、短軸2.3~3mと安定している。炉は地床炉で、環状の外側にくる。4基が確認されている。20B号住のみ面積が大きいが、炉が外側にあることから、この類に含めた。

(9C号住・16E号住・20B号住・38B号住)

B-③類…床面積は17m²前後とB-②類よりやや大きい。柱は1間×2間で、長軸は6m前後、短軸は2.9mと安定している。炉はやはり地床炉で、位置は、中央にあるもの(41A号住)、内側にあるもの(16C号住)があり一定しない。以上の2基の他43号住も面積的には、この類に入れたが、長軸の柱穴が4本で、他のものより1本多い。炉は中央よりやや外側である。

(16C号住・41A号住・43号住)

表88 住居跡分類一覧表

分類	住居NO	面積m ²	長軸m	短軸m	分類	住居NO	面積m ²	長軸m	短軸m
A-①	7C	8.3 (11.8)			C-①	9A	13.8 (13.9)	5.5 (4.9)	2.8
	8B	8.0				9B	11.8	4.8	2.5
	13	9.1				23	16.5	5.0	3.3
	29	9.1 (13.4)				35A	10.4	4.3	2.1
	30	11.8				40A	10.4	4.2	2.5
	31A	11.8				40B	13.6	5.5	2.4
	39	11.4				42			
A-②	10B				C-②	7	24.1	7.5	3.2
	7B	(14.0)				14	20.9	7.2	2.8
	10A	(13.8)				18A	20.1	7.3	2.6
A-③	38D					41B	15.9	7.0	2.3
	7A	(21.8)			C-③	15	26.1	7.7	3.2
	11	13.8				18B	20.1	8.6	2.4
A-④	33					27	19.3	8.0	2.4
	7D					28	22.1	8.0	2.8
	8A	(34.4)				37A	20.7	7.8	2.6
	19	(18.3)				38A	29.7	8.7	3.4
	21	24.4			D-①	22	6.0	3.0	2.0
B-①	32	(16.4)				24	8.5	3.6	2.4
	20	15.2			D-②	16A	13.0	4.8	2.3
B-②	12	8.9 (10.7)	3.1	2.6		25	13.7	6.1	2.2
	16D	11.2	5.0	2.3	D-③	16B		7.2	
	26	8.4	5.0	2.8		35B			
	29B	14.0	5.0		D-?	17			
	38C					18C			
B-③	16E	12.1	4.5	2.7		31B			
	9C	14.4	5.1	(2.9)		36			
	20B	17.1	6.1	2.9					
	38B	13.7	5.3	2.6					
B-④	16C	15.8	5.6	2.8					
	41A	17.8	6.0	2.5					
	43	15.6	6.2	2.5					

C類—長方形の柱穴配列をとり、炉が石圓炉のものである。

C-①類…長方形の柱穴配置をとり、床面積は14m²前後のものである。柱間は1×2間で、長軸は5m前後と安定している。炉は石圓炉で、環状外側に位置している。このうち、9B号住は柱穴にそって布掘り状の溝がめぐる。また9A号住・40A号住は柱穴が亀甲状となっている。7基が確認されている（9B号住・23号住・35A号住・42号住・40B号住・9A号住・40A号住）。

C-②類…長方形の柱穴配置をとり、床面積が20m²前後と大きくなる。柱間は1×2間で、長軸は7m以上となる。したがって長軸の柱間は3.5mと広い。炉はやはり環状の外側にある。4基（7号住・14号住・18A号住・41B号住）が確認されているが、7号住では炉が確認されていない。

C-③類…長方形の柱穴配置をとり、床面積が20m²以上となる。柱間は1×3間で長軸は8m前後となる。（27号住のみ1×2間）。環状の内側が亀甲状となるものが2基ある（28号住・38A号住）。他のものも、内側は棟持柱的な柱穴を有する。炉は石圓炉で、長大化する。

D類—環状の放射線ラインに対して建物の長軸が直角となるものである。炉は石圓炉。

D-①類…長方形の柱穴配置で、床面積が6~8m²と小さいものである。2基（22号住・24号住）が確認されている。24号住については、柱穴の延びがあるのかどうか明確でない。

D-②類…長方形の柱穴配置で、床面積が13m²くらいのものである。規模的にはC-①類と同様である。2基（16A号住・25号住）が確認されている。

D-③類…②類より大きい規模をもつものであるが、全体が明確なものはない。35B号住・16B号住がそれにあたると考えられる。

以上の他D類に入ると思われるものに18C号住・31B号住・17号住・36号住がある。

c) 各類別分布（第106図）

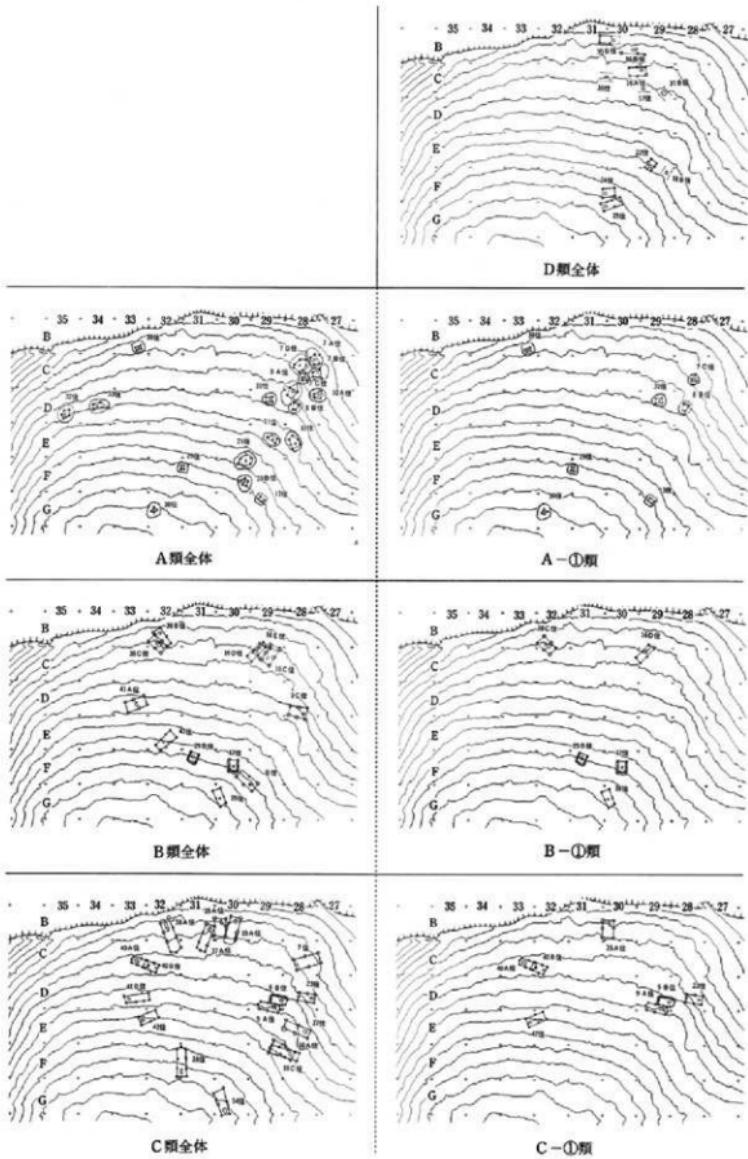
A-①・②類

A-①・②類は同様の形状をもつがA-②類の方が面積的に大きい。A-①の類は7基、A-②類は2基確認されている。A-①類はまず31号・29号・37号がほぼ正三角形状に並ぶ。他の4基（30・13・8B・7C号住）は、その東側（外側）に位置する。30号・13号・8B号はほぼ等間隔に並ぶが、7C号住のみ8B号住に近接する。またA-②類の10A・7Bは8B・7C号住の外周に位置し、7Cと7Bは重複関係にある。これらが全部同時存在したわけではないが、この中でも39・29・31号住の3基、30B・8B号の3基は各々が系列的な位置関係、対応関係が見られ、2時期の設定が可能と考えられる。7C・7B号住の付近は、住居数の重複が著しいがA類がほとんどであり、この周辺一帯が土器捨場として利用されており、A-①・②類が初期の段階で廃棄された可能性がある。

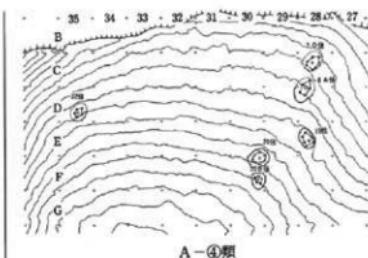
A-③・④類

この両類も32号・33号を除けばすべてが北東側に集中する。A-③類は3基で三角形状の配列を示し、A-④類は6基で弧状の配列を示している。この両類を重ね合せると、32と33、20と21、11と19、7Dと7Aという住居跡が各々近接して存在していることがわかる。20と21はいずれもA-④類であるが他の3例はA-③とA-④類の組合せで対応関係を見ることができる。8A住のみは対応するものがない。このようなうまい対応関係があるということは、継続的な建て変えを意味しているのではないかと考えられる。どちらが古いという重複関係は見い出せない。しかし、ここでA-④類とした住居跡のうち21号住居跡のように、外周にいわゆるベッド状遺構を有する住居跡についてふれておきたい。この住居跡は特徴のある住居跡で、五丁歩遺跡では一例のみであり、異質な存在である。県内においてこの類の住居跡は中期後半

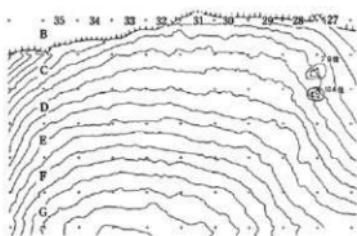
6まとめ



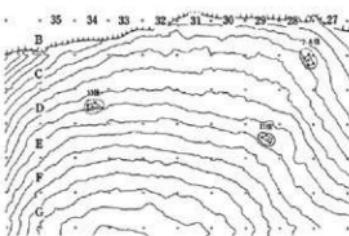
第106図 住居跡類別分布図



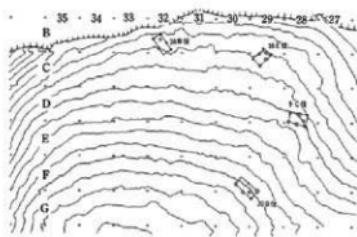
A - ④頬



A - ②頬



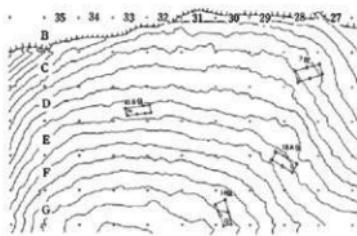
A - ③頬



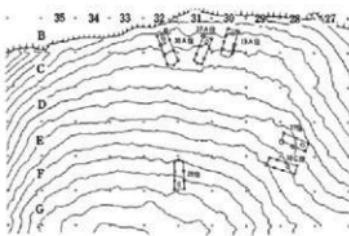
B - ②頬



B - ③頬



C - ②頬



C - ③頬

になってかなり一般的に認められる(神の原、板倉、岩野原、長野遺跡)がいざれも長い石圍炉をもっている。地床炉でこの類は、板倉遺跡の第7号住居跡くらいのものである。県内では一番古い部類に入る。一方関東・中部地方においても、この類の住居跡は、いくつか認められる。

種口(1989)によると、中部地方では茅野市棚畠遺跡(九兵衛尾根、落沢期)原村大石遺跡(新道期)、居沢尾根遺跡(井戸尻~曾利期)、藤内遺跡(藤内~井戸尻期)等で確認され、また、関東地方では、八王子市神谷原遺跡(新道期)、横浜市三の丸遺跡等で確認されている。大わくでは、勝坂式期に認められる住居形態である。しかし、これらはいざれも石围炉であり、地床炉のものはすくない。炉に石を採用することについても地域差を指摘することができる。概略的に言えば、関東中部地方では勝坂式期から北陸地方では新崎式の新段階から、東北地方では大木8b式期からであり、東北地方の方がよりおそくなっている。新潟県に関しても、北陸地方とはほぼ同様の傾向をつかむことができるが、東北地方の影響の強い地域では、よりおそい傾向にある。例えば、この五丁歩遺跡とほぼ同時期の清水上遺跡では、すべて地床炉であり炉石の採用はない。出土している土器は東北大木色の強い土器が多く出土している。

B-①類

B-①類は、形状的には2つに分類される。16D・38C・26号住のように長方形の配列で6本柱となるものと、12・29B号住のように方形の4本柱で布振り状の構造をもつものである。これら5つの住居跡に企画的な配列は認められない。

B-③類

41A住・43住が南側に、16C住が北側に位置するが、企画的配列とは言いがたい。炉の位置は3基共に一致しない。上記B-①類、B-③類はいざれも炉が中央にあるか、ややはずれる位置にある。このグループで2~3時期あると考えられるが、どれが組合されるかは不明である。

B-②類

4基がきれいに弧状の配置を示し、画一的な在り方を示す。規模もほぼ似かよっている。この4基が同一時期に営まれた可能性はきわめて高い。

C-①類

このC-①類も配置に相関関係を見い出すことができる。まず42・35B・23号住は、3基が弧状のほぼ等間隔に配列されている。また40A・40B号住は、9B・9A号住と対応関係をもっている。これらC-①類で(42号住・35B号住・23号住)(40B号住・9B号住)(40A号住・9A号住)の3時期を想定できる。

C-②類

3基あるが弧状のきれいな配列を見せる。同一時期に営まれた可能性がきわめて高い。

C-③・C-④類

7基あり、一見ばらばらのように見えるが、対応関係を認めることができる。まず28・38A号住である。同一形態で、広場を挟んで対峙する。41B号住を中心に置くと、きれいな弧状を形成する。したがってこのC-③類の中でも2つのグループの対応関係を認めることができる。37A・15号住に対して、18B号住・27号住である。これも各々2基が対応している。

D類

D類については、住居跡のプランを明確につかめるのが少ないため、分析は行わない。

d) 住居跡群の分布

さて、以上分類したものを見ると同一形態の住居跡がある程度の規則性をもって配列されていたであろ

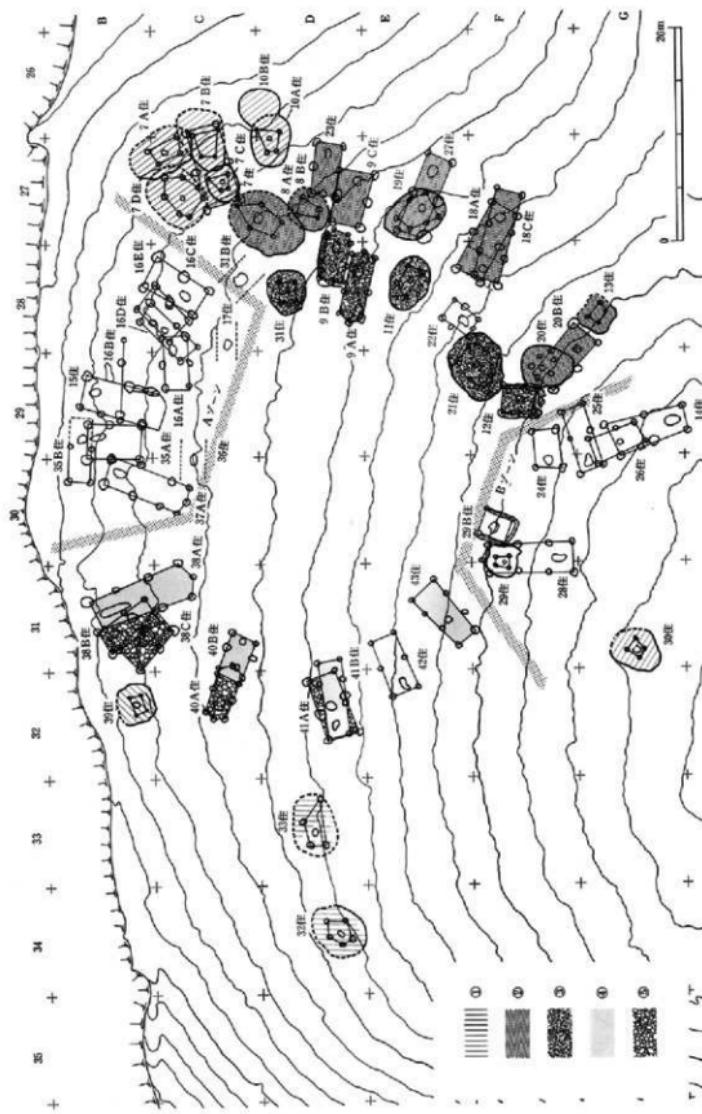
うことが読みとれたが、それが同時に存在したという証明にはならない。形態や規模の変化が、時期的な変遷を意味しているのか、あるいはそれぞれの住居跡の機能（大きさは長方形住居跡と堅穴住居跡）が異なっていたのか。この問題については、まず堅穴住居跡と長方形住居跡の関係を検討せねばならない。発掘所見では堅穴住居跡が古く、長方形住居跡が新しいという結果が出ているが、すべてがそうかどうかはわからない。住居跡出土土器（ほとんどが住居跡覆土）を見ても、新旧関係をつかむことはできない。堅穴住居跡が北側にかたよって多いことは指摘したとおりであるが、7、7A～7D、8A、8B、10A、13A住といった住居跡のある場所は、土器捨て場として利用されており、少なくとも、最後段階の住居跡ではなかったことが言える。土器捨て場が住居の背後（外側）にあることと考え合わせると、北側においては、外周から内周への建て替えの順を想定できる。そうすると、内周にも堅穴住居跡があることから、単純に堅穴から長方形住居跡への変化ではなく、両方が共存していた可能性が高いと思われる。単純に堅穴住居跡から長方形住居跡への変化、発展であるならば、中期以降長方形住居跡が主流を占めてしかるべきであるが、そうではない。このようなことを考えると、両者は併存しながらも、環状集落という集落形態に長方形住居跡が深いかかわりをもっていたことがうかがえる。面積的には、堅穴住居跡より大きいのが多いのは事実であるが、「大型住居」と呼ばれるほどのものは存在していない。床面積を見てもわかるとおり、30m²を越えるものはない。

五丁歩遺跡の環状集落は、いくつかの時期に細分されることは確実である。同心円とはならないが、住居跡の内側で弧を引くと、いくつかの弧を描くことができる（第107図）。スクリントーンで分類したように一番外周から3つの弧を読みとることができると、この弧については、北側と南側とで若干のずれを生じている。同一弧状に来るものが同時存在した確証は全くないが逆に偶然でもなく、多分に弧を意識した配列であったと考えられる。

まずスクリントーン①は一番外側にあるもので、すべてA類である。特に環状ということはないが、南北で二つに分かれるようである。スクリントーン②では、かなりの重複が見られるが、2基づつのペアを見出すことができる。8A号住と8B号住、23号住と9C号住、19号住と27号住、18A号住と18B号住、20B号住と13号住又は20号住である。長方形住居跡同志の切り合い、堅穴と長方形、堅穴と堅穴といった組み合わせがある。スクリントーン③では31号住、11号住、21号住の堅穴住居跡と9B号住、9A号住、21号住の長方形住居跡がある。スクリントーン②列に比べると数は少ない。しかしスクリントーン②と③でも対応を見ることができる。31号住と8A号住、9A、9B号住と9C、23号住、11号住と19号住、21号住と20号住といった具合である。重複なしの建て替えであろうか。スクリントーン④は、きれいな弧状を示す。5基共に長方形住居跡である。この5基は重複はなく、間隔をもって配列されている。またスクリントーン⑤ラインでは、38B、38C、40B、41A号住が等間隔で並んでいる。この④、⑤においては、A類住居跡は存在しない。これに対してA、Bゾーンとした部分について配列に乱れがあり、またD類住居跡の存在する部分である。明らかに前記スクリントーン部分（①～⑤）とは異った配列を示している。このように見えてくると、環状部の相対する面②、③と④、⑤、AゾーンとBゾーンがそれぞれ関連し合っているような配置がうかがっててくる。はたしてこの対峙は何を示しているのであろうか。双分性等を考慮する必要があろう。

e) 長方形住居跡の方向性と土坑I類との関係について

長方形住居跡については、その中心軸がほとんど環状集落の中心方向を指しているが、微妙なずれを示している。この方向性については、すべてが中心に向いているわけでもない。ただ漠然と作られたのかあ

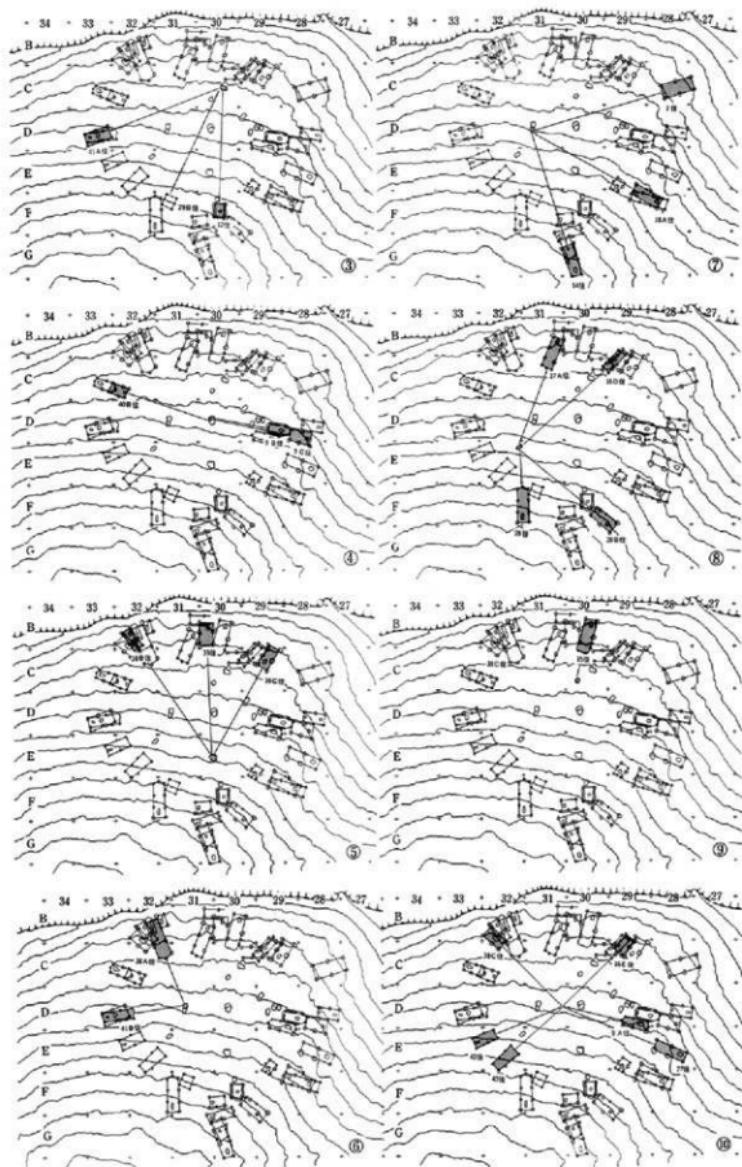


第107圖 住居跡配列分布圖

るいは、一定の方向性があるのかを検討した結果、土坑I類としたものと関連があることが判明した。第108図は長方形住居跡について、その中心軸を集落内側に向けて引いたものである。これによると、I類とした土坑上を中心軸が通る住居跡群をいくつか見いだすことができる。

- ① 2・3号土坑——23号住居跡
- ② 4号土坑——9B号住居跡
- ③ 5号土坑——12号・29B号・41A号住居跡
- ④ 6号土坑——9B号・9C号・40B号住居跡
- ⑤ 7号土坑——38B号・35A号・16C号住居跡
- ⑥ 9A号土坑——41B号・38A号住居跡
- ⑦ 9B号土坑——7号・18A号・14号住居跡
- ⑧ 10・48号土坑——37A号・16D号・28号・20B号住居跡
- ⑨ 15号土坑——15号住居跡
- ⑩ ——————16E号・38C号・40A号・42号・43号・27号・9A号住居跡
- ⑪ ——————18B号住居跡

- ①の23号住居跡については、2又は3号土坑を通過する。土坑との距離は短い。
- ②9B号住居跡は4号・6号土坑のいずれも通過する。4号土坑との距離は短い。
- ③の5号土坑に対しては、12号・29B号・41A号の3住居跡があるが、3基共に土坑に対して対峙する位置にある。住居跡はいずれもB類で12・29B号はB-①類の小形である。
- ④の6号土坑に対しては、9B号・9C号・40B号の3基があるが、土坑をはさんで対峙する。9CはB-②類である。⑤の7号土坑に対しては、38B・35B・16C号住の3基があるが、広場中心をはさんで対峙する住居跡にある。この3基は、扇状にはば等間隔で並んでいる。38BはB-②類で13.7m²、16CはB-③類で15.8m²、35AはC-①類で16.5m²であるが、ほぼ同規模である。
- ⑥の9A号土坑に対しては38A号・41B号住の2基がある。2基共に土坑側に存在し、近い距離にある。38A号住はC-④類で29.7m²、41B号住はC-②類で15.9m²である。
- ⑦の9B号土坑に対しては、広場をはさんで対峙するように7号・18A号・14号住の3基がある。いずれもC-②類に属し、面積は7号が24.1m²、14号が20.9m²、18A号が20.1m²とほぼ同規模である。この3基もほぼ等間隔で環状集落の一番外側に存在する。
- ⑧については、厳密には、48号土坑に対して37A号・16D号住居跡、10号土坑に対しては、28号・20B号住の組み合せとなるが、一応4基を考えると、他とはやや異った配置を示している。中央広場をはさんだ場合、37A号・16D号住と28号、20B号住が、ほぼ対称に配置されていることがわかる。他の住居跡とはかなり異った方向を示しているが、10号土坑を接点と考えれば、この方向にも説得性が生れてくるといるものである。37A号住に対して28号住があるが、いずれもC類で面積も20.7m²と22.1m²とほぼ同規模である。また16D号住に対して20B号住であるが、いずれもB類である。面積的には16D号住が10.7m²、20B号住が17.1m²とやや開きがある。
- ⑨はI類ではないがIII類の円形5号土坑に対して15号住居跡が対応すると考えられる。この5号土坑には立石がある。
- ⑩はライン上にI類土坑がのってこないものである。しかし、これらの住居跡群は中央広場のほぼ一点で主軸が交叉する。これも何か意味のあることと思われる。



第108図 住居跡と土坑の関係分布図

このようにみると住居跡の主軸の方向と土坑とに何らかの関連があったのではないかとの仮説が成り立つ。しかし、これだけの土坑があれば、主軸の延長上にいくつかの土坑がのってくる場合もあり、明確にどの住居跡に対してどの土坑と言うことはできない。

この住居跡と土坑に関連ありとすれば、どちらが優先したであろうか。住居跡があって、土坑が決定されたのか逆に土坑があって住居跡が決定されたのか。

以上ではほとんどの長方形住居跡に対して土坑との関連をつかまえることができたが、18B号住居跡のみその方向性が不明である。

このように長方形住居跡については、ただ広場を向いているということではなく、I類とした土坑と大きく関わっていたことがわかった。また各々のグループは、ほぼ同規模のものが対応しているケースも多いことも判明した。では住居跡A類とした竪穴住居跡についてはどうかというと、これについては方向性はあまりうまくつかめないが、A類住居跡の分布が北東側にかたよって多いのと、II類・III類とした土坑が南西側に多いことが、何か関連はないであろうか。

2) 土坑について

第IV章3において土坑I、II、III類について説明を加えたが、若干の分析を行いたい。問題となるのは土坑の性格である。一般に環状集落では、集落の内側に墳墓群が認められる場合が多い。岩手県西田遺跡(佐々木1980)はその典型例としてあまりにも有名である。この西田遺跡では、長方形柱穴列の内側に隅丸長方形の土坑がきれいな放射状に配列されている。そして中心部と思われる所にも数基の土坑が存在し、ほぼこの方向に向けて土坑は並んでいる。また新潟県城之腰遺跡(藤巻1991)でも同様の傾向が見られるが、方向性については、あまり明確なものはない。その他長野県大石遺跡例では円形土坑の例が多い。さて、当遺跡であるが、その配列にあまり規則性は認められない。集落のほぼ中心とされる地点(31-D-3、8)には遺構は全く認められていない。まずIa類であるが3基ある。1号、10号、8号土坑がそれである。長軸を放射軸方向にむけている。この他II類とした48号、50号、21号土坑も放射状の配列をとる。次にIb類としたものは、放射方向に対して直角となるものである。これについてもIa類と同様の形態で、墓としての可能性がきわめて高いとされるものである。どちらかといふと北東側に集中する傾向がある。このI類については、前述したように長方形住居跡と対応関係をもっている。

次に第II類としたものは、先述のように南西側に集中する傾向が強い。これらの土坑も、墓の可能性が高いと思われる。南西側にII類が多いことについては、北東側にA類の竪穴住居跡が多いことと何か関係があると思われる。A類の竪穴住居跡については、その方向性をつかむことが困難なため、その関係を証明することはできない。

第III類としたものは、その他をまとめたものである。集落内にある土坑については、墓の可能性も十分に考えられる。集落外にあるものについては、形状、深さとともにまちまちで、性格付けはできない。

もう一つ集落内に存在する土坑の特徴としては、その配列に一定の傾向が見られることである。一つは、列をなしているものである。これは集落外から読くものである。40、39、37、26号がそれである。ほぼ等間隔(39、40号の間に1基存在したと考えられる)に存在している。ほぼ円形、同規模のものである。この列をなすグループについては墳墓かどうかの判断はできない。もう一つの特徴は、2基一対で存在している土坑が多いということである。例えば2・3号、5・13号、16・17号、18・19号、9a・9b号、25・26号、29・30号、31・32号、10・48号といったものである。これらは偶然とはとても考えられないもので

ある。いずれにせよ、これら土坑群と住居跡とは密接な関係をもつてることには間違いない。

さて、集落内に存在する土坑については、墓壇の可能性が高いとしたが、もう一つ集落内に存在するものに配石がある。図版6に示したように内側にはかなりの自然川原石が認められた。若干のそれはあるものの、前述の土坑群とほぼ同様の分布を示している。おそらく、これら土坑(墳墓)群と関連したものと考えられる。

配石は遺構確認面よりかなり上で確認されている。つまり、この配石面が当時の生活面であったらうことが想像される。そして黒色中であることから、後世の耕作等で旧状を変え、発掘において検出されたものと考えられる。このようなことから、検出された石は墓石として使用されていたのではないかと思われる。つまり、当時の生活面上に墓標として、土坑(墓)上に数個づつが配石されていた可能性が高い。その形状は定かでない。

このように考えると中央広場は、墓域を除くと、かなり面積のせまいものとなってしまう。

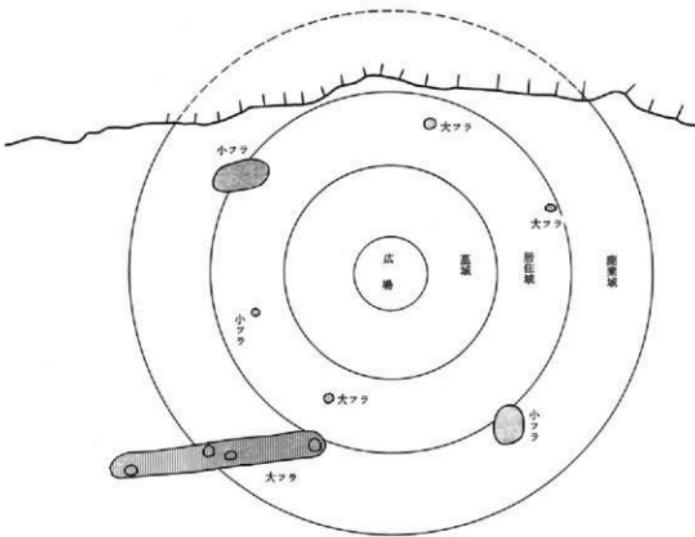
3) 集落の構造について

今まで遺構個々について検討を加えたが、環状集落を形成した時期の集落の構造について述べてみたい。環状集落の構造については、全国的に類似の構造を示していることがわかつてきた。この五丁歩遺跡においても、大きさは同様の在り方を示している。まず中央には建物等の構造物が存在しない広場がある。これは他の遺跡例でも共通的なところであるが、岩手県西田遺跡例などは、中心部にも墓域があるとも考えられる。ただ五丁歩遺跡においても、中心部に近い位置に、土坑(6. 16. 17号)がないわけでもない。この広場の外周には墓域がある。これも他遺跡例と共に通る。前述のように墓の配置、主軸方向にきちんとした方向性は認められない。これは、岩手県西田遺跡、小千谷市城之腰遺跡例のように、土坑の長軸が中心に向くのは異なっている。また、この土坑上には、墓石の存在の可能性を指摘したが、こうなると少なくとも構造物が地上に存在したわけで、広場との共用は無理であり、きちんとした領域分化がなされていたことを示している。また土坑には方形に近いものと、円形に近いものがあることも指摘したが、各々が長方形の住居跡(B・C類)と、円形竪穴住居跡(A類)に対応した可能性はある。次に居住域であるが、B類、C類の住居跡は数にそれほどのかたよりではなく、円形にめぐっている。しかしA類とした竪穴住居跡は北側に圧倒的に多い。長方形住居跡については、長軸が円の放射軸方向である。そして炉がすべて放射軸の外側に存在することから、住居の入口は、反対の放射軸の内側、つまり墓域、広場に向かって開いていたと考えられる。またD類については、B、C類と軸方向が直角であるが、すべてに石囲炉がある。この炉は、環状の対称側では逆位置になっている。つまり、円周において一定の方向(時計廻り又は逆)をもっていたことを意味している。炉の反対側を入口とすれば、時計廻りの規則性を見出すことができる。この居住区域については、他遺跡と比較した場合、いくつかの違いを指摘できる。まず西田遺跡例であるが、ここでは、居住域の内側に長方形柱穴列がある。この柱穴列に炉は存在せず城之腰遺跡例と同様の在り方を示す。これには竪穴住居跡は重複しておらず、この長方形柱穴列の外側にきている。しかし西田例、城之腰例ともに外側すべてをめぐるように竪穴住居跡が存在しているわけではない。この五丁歩遺跡においては、竪穴住居跡の分布にややかたよりがあるものの、長方形と円形両方が同一エリア内に存在している。この居住区における長方形住居跡については、炉も存在しており、西田、城之腰遺跡例の長

方形柱穴列とは、構造、性格共に異なっていたと考えられる¹⁾。

また貯蔵穴とされるフラスコ状土坑については、前述のように小型と大型では分布の在り方が異なっている。つまり、小型フラスコの多くはグループをなし、集落の相反側の位置に向かい合うように存在している。また大型フラスコは、集落内にあるものとそうでないものとがある。集落内にあるフラスコ状土坑は分布図のごとく、広場を中心として相対性の位置にあることがわかる。

居住域の外側には、大型フラスコ状土坑が直線状に4基認められる。群をなして多くあるというほどでもない。このように当集落において貯蔵穴と思われるフラスコ状土坑はそれほど多くはない。また同じく廻収域も重なってみられる。単純に言えば、集落の背後ということになる。このまわりの廻収域にも、廻収量の多少は認められる。これは居住域の各地点における住居跡数密度の濃淡に比例するもので、特に北から北西部にかけて遺物量が多いのは、その前面に住居跡が多く存在したためであろう。また北東部は崖下に廻収したものと思われる。したがって廻収域の特定の場所をすべて場としたことはなかったと考えられ单纯に住居の背後にゴミを捨てたと思われる。(1991.3.25)



第109図 五丁歩遺跡集落構造概念図

1) 城之原遺跡では造構の重複が著しく、長方形柱穴列と円形柱穴住居跡とが明確に分布域を分けているとは言いきれない。

B 土器について

1) 各系列の土器

a) 隆Ia系列(第110図)

半截竹管による沈線や細い単沈線により文様を描いているものである。直線的に開く土器(540, 1071, 58)とくの字状に口縁が外反する土器(888, 1252)がある。540, 1071では口縁部にはり付けの隆帯が認められる。三角形印刻や、沈線側端部に連続の刺突を施す土器等もある。また894では胴下部に突起が付されている。すべて法量が小さく、文様にも企画性が認められない。小形土器ゆえのバラエティであろうか。また隆帯がほとんど用いられていないのも、小形であることに理由があるであろうか。

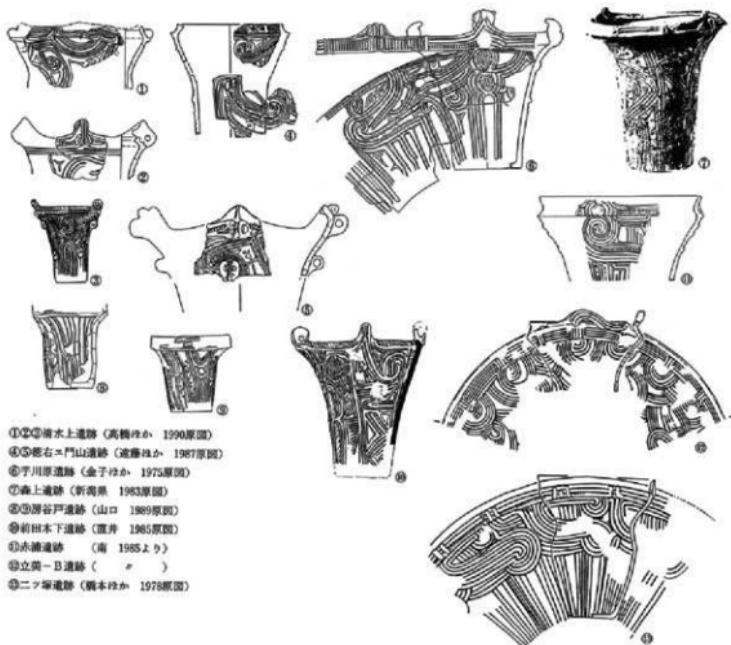
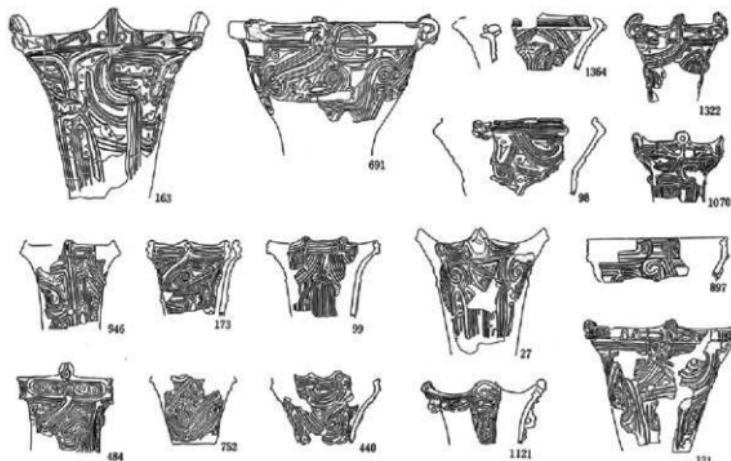


第110図 隆Ia系列の土器

b) 隆Ib系列(第111図)

この隆Ib系列の土器は、五丁歩遺跡の中では最も安定した形で見られる土器群で、163などを代表とする。器形はG器形が圧倒的に多く、縄II系列の土器と同様の文様要素をもつ。口縁部まで直線的に延びるA器形も若干認められる。幅のせまい口縁部文様帯は、突起等により4単位に区分されるのが基本であり、各文様帯は横円区画(173, 484)や横隆線束(691, 1364)、縱集合短沈線(121)などによる。163では横S字状隆帯が連続し、隆帯脇にはキザミが付される。同様の口縁部文様をもつ土器に1322, 1070がある。口縁部文様帯で最も多く認められるのが、先述の横又は縦の隆線束である。横方向(691, 1364, 173, 99, 440)が多く、縦(121)は少ない。この口縁部文様のみを取り上げるならば、長野県深沢遺跡(西沢1982)の土器に特徴的に用いられる。また県内においても中期前半に認められるが縦隆線束が圧倒的に多い。また縄II系列にもこの文様は用いられる。胴部文様は、主要モチーフを太い隆帯(スクリントーン)で描いており、渦巻文を基本としている。またその両脇には隆線(半截竹管で引いた後、沈線部を深くなぞる)がそっている。また三角部分には印刻による三叉文(玉抱き)が充填される場合が多い。渦巻の中心部には眼鏡状の突起が付されるものが多いが、ないものもある。ちなみに火炎型土器では渦巻の中心に眼鏡状の突起の付されるものは、福島県方面を除いてはほとんどない。胴下半部は無文部を多く残すもの(27, 163)、縄文の付されるもの(121, 691)、胴上半の文様がそのまま下半部まで流下するもの等がある。いわゆる越町土器によく見られる横円区画内列点刺突は163のみである。

県内における類例は少ないものの、魚沼地方に認められる。堀之内町清水上遺跡では①~③の土器がある。②の口縁部突起は163に共通する。③では玉抱き三叉文、眼鏡状突起、逆U字区画内の列点刺突等が特徴的である。小千谷市德右エ門山遺跡(遠藤ほか1987)でも同類の出土がある(④~⑤)。⑥は中里村芋川原遺跡(金子ほか1975)出土土器で、口縁部文様帶には縦・横の隆線束が用いられている。胴部には列点刺突文があり、下半部には無文部を多く残している。また⑦は同じく中里村森上遺跡(金子ほか1974)出土土器である。胴部に隆帯は用いられておらず、半隆起線によっている。また渦巻文も用いられておらず、三角



第111図 陸 Ib 系列の土器

6 まとめ

部分には玉抱き三叉文が充填されている。その他糸魚川市長者ヶ原遺跡(藤田ほか1964)にも類例がある。

県外では、北陸方面に多くを認めることができる。しかし北陸方面の土器は、口縁部文様帯がせまいか又は無文とする土器が多く口縁部に明確に、しっかりとした文様帯をもつ土器は少ない。代表的な土器として⑪・⑫²⁾をあげたが、S字状に流れる渦巻文は越後と共通的である。また平口縁が多く、口縁部が波状になるものや突起の付される、列点刺突文は認められない(北陸東部富山県はこの限りでない)。群馬・長野両県には、基本的にはないとは考えられるが、類似の土器は認められる。群馬県では房谷戸遺跡(山口1989)出土の⑧、⑨がそれである。口縁部は横隆線で、胴部は縱区画で曲隆線文は認められない。長野県では、前田木下遺跡(直井1985)出土土器(⑩)が近いと言える。また最近の出土例では御代田町川原田遺跡(堤1991)に類例がある。

以上のようにこの隆Ib系列の土器は他地域での出土は多くなく、県内においても、魚沼地方を中心をもつ土器群とすることができる。福島県方面には全く認められない。いわゆる焼町土器との関連性もないわけではないが、群馬、長野両県で出土している「焼町土器」とは分離されるべき文様構成をもっている土器群と言える。

c) 隆Ic系列²⁾(第112図)

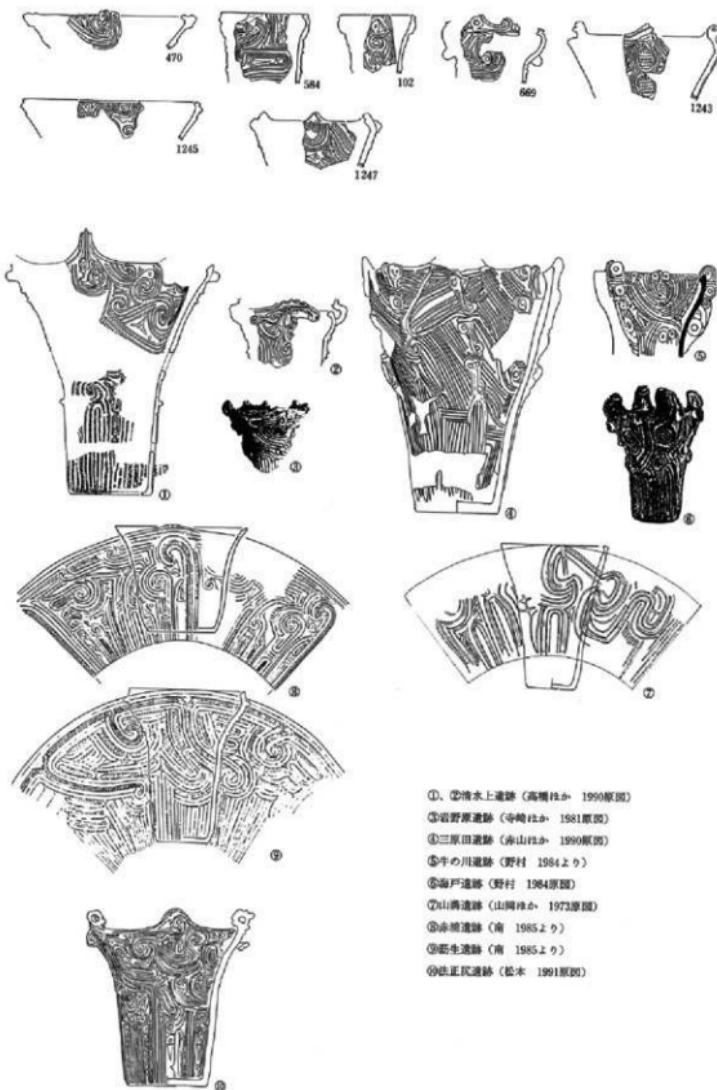
明確な横区画をもたない土器群である。完形品がなく全体の文様構成は不明である。文様要素は隆Ib系列と同様で、基隆帯による渦巻文、眼鏡状把手、楕円区画内列点刺突、三叉文等である。口縁部は平口縁が基本であるが突起の付される土器が多い。669では入字状突起の変化したものが付される。この突起は当遺跡では特徴的に付される。いずれも文様は密に施され、無文部は少ない。県内での類例は少ない。①、②は堀之内町清水上遺跡出土である。①は大きな波状口縁の土器で横S字文、渦巻文が多用される。②も渦巻文を基本とするが、口縁部には鋸歯状の把手が付されている。③は長岡市岩野原遺跡(寺崎ほか1981)出土で②の口縁部の把手に共通性をもっている。また669の把手とも共通性をもつ。この他新井市大貝遺跡(岡本ほか1967)にも同系列の土器が認められる。

群馬県では、類似の土器はほとんど認められない。あえて三原田遺跡(赤山1990)出土の④をあげたが、かなり異質な感じを受ける。五丁歩遺跡で認められるような曲隆線、渦巻文は全くなく直線的な文様である。しかし環状突起、眼鏡状突起は多く用いられている。⑤～⑦は長野県内出土土器である。長野県の土器は、曲隆線文が多用されており、眼鏡状突起も認められている。⑤、⑥は共通的な土器で楕円区内には列点刺突がある。また下半部は逆U字状の隆骨である。⑦は下半部無文となっている。五丁歩遺跡の102がやや長野県出土土器と雰囲気が似てるであろうか。北陸方面でも共通的な土器を見い出すことができる。しかし、北陸方面の土器は⑧、⑨のように口縁部に2条程度の半隆起線がめぐっている土器が多く、口縁端部から直接文様が垂下していくものは、ほとんどない。東北地方では、このタイプはほとんど認められない。最近の資料では、法正尻遺跡(松本1991)に出土例がある(⑩)。眼鏡状把手が用いられている。文様構成は、北陸地方の土器に近いようである。

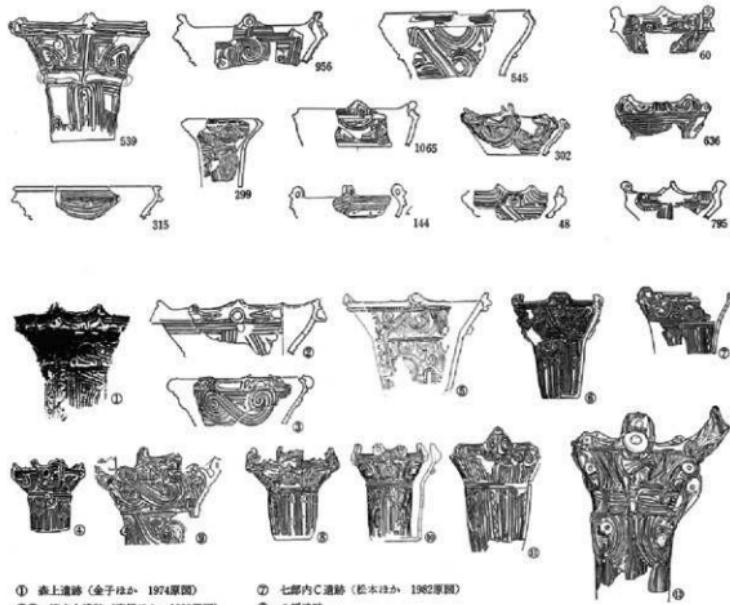
以上のようにこのタイプは、あまり類例が多くない。ただ隆V系列の土器の中に、上半部に横区画の認められない土器が多くあり、これを含めると主体は信州方面にあると言える。

1) ここに引用した北陸方面の土器の実測図の多くは、(南久和1985)によっており、直接原典の図を引用していないものもある。

2) 一応深鉢といふことで分類しているため鉢は除外した。鉢では、578がそうであるし、また長岡市馬高遺跡でも出土している。



第112図 陸Ic系列の土器



① 汽上遺跡（金子ほか、1974原図）
 ②③ 清水上遺跡（高橋ほか、1990原図）
 ④ 岩野原遺跡（小林、1988原図）
 ⑤ 中江田の古遺跡（秀賀、1987原図）
 ⑥ 畠名原遺跡（大平ほか、1990原図）
 ⑦ 七部内C遺跡（松本ほか、1982原図）
 ⑧ 八幡遺跡
 ⑨⑩ 石生前遺跡（佐藤、1990原図）
 ⑪ 行幸田山遺跡（大塚ほか、1987原図）
 ⑫ ⑬

第113図 隆IIa系列の土器

d) 隆IIa系列 (第113図)

この系列の土器も五丁歩遺跡では安定した形で認められる。口縁部第I文様帯は、隆Ib系列と共通点が多い。やはり横の半隆起線が目立つ(539、956、545等)。またコイル状の眼鏡状把手の付される土器(636、795、302等)は、このタイプに特徴的である。315、48では墻帶上に八の字状のキザミが付される。口縁部第II文様帯は基墻帶による渦巻文を基本とするが、三角形区画をもつ土器(60、48)、墻帯を全く使わない土器(299)も見られる。539の場合側部に無文帯をもち、そこから逆U字状に墻帯が垂下している。

五丁歩遺跡以外では、あまり明確なものはないが、やはり魚沼地方に類例が認められる。①は中里村森上遺跡出土である。口縁部第I文様帯は横半隆起線文で入字状把手の変化したものが付される。口縁部第II文様帯には曲隆線文があるが、渦巻文はあまり明確でない。側部には半隆起線文が垂下している。②、③は堀之内町清水上遺跡出土である。③には横S字状の渦巻文をもっている。④は長岡市岩野原遺跡出土のいわゆる火焔型土器である。火焔型土器の文様構成は、この隆IIa系列かIIb系列に入る。しかし、この隆IIa系列のように、はっきりとした第I文様帯をもつ土器は少ない。④の土器はしっかりと口縁部第I文様帯をもっている。やはり横方向の墻線であるが、沈線部に刺突が施されている。この他に糸魚川市长者ヶ原遺跡、富山県不動堂遺跡(小島1980)出土の火焔型土器も同様の文様帯をもっている。

県外では福島県方面で多く認めることができる。⑤は中江聖の宮遺跡(芳賀1987)出土の土器である。第一包含層からの出土で、他に出土している土器もほぼ同一時期のものばかりである。報告者はこの第一包含層の土器を大木7a式の最も新しい段階として把えている。また第二包含層出土の土器もほぼ同時期で、北陸の新崎系の土器も出土している。このいずれの包含層においても大木8a段階とされているものは全く出土しておらず、時期を降らせたとしても大木7b段階に納まることは間違いないようである。報告によると、口縁部第1文様帯は無文でS字状の突起が4個付される。また口縁にそって爪形文の加えられた隆線がめぐらしくある。腹部は隆線により区画され、区画内は太い沈線によって渦巻文等のモチーフが充填されている。口縁部の渦巻文はすでに隆線で描かれている。また胴部にも爪形文の付された逆U字状の隆線が見られる。新潟方面の影響を受けた土器としている。時期的に問題となる土器の一つである。⑥は福島県桑名邸遺跡(大平ほか1990)出土土器である。口縁部第1文様帯は横縞線文である。⑧、⑨は鶴頭冠をもつたいわゆる火焰型土器であるが、しっかりと第1文様帯をもっている。特に⑨の土器については、隆IV系列とした217と文様構成、モチーフ等に共通性が強い。⑩、⑪も同様の文様構成をもつ土器である。

群馬県、長野県方面では、この文様構成は認めることができない。しいてあれば⑫の群馬県行幸田山遺跡(大塚ほか1987)出土土器がそうである。文様構成には共通性があるものの、文様モチーフは全く異なるものであり、大きな隔たりがある。また北陸方面でも全く認めることはできない。

以上のように、省内にそれほど類例はなく、むしろ福島方面に多いことがわかる。いわゆる火焰型土器とも分布的には共通してくる。このことは、とりもなおさず当該期の大木系土器の文様構成を火焰型土器が用いていることを証明しているのである。

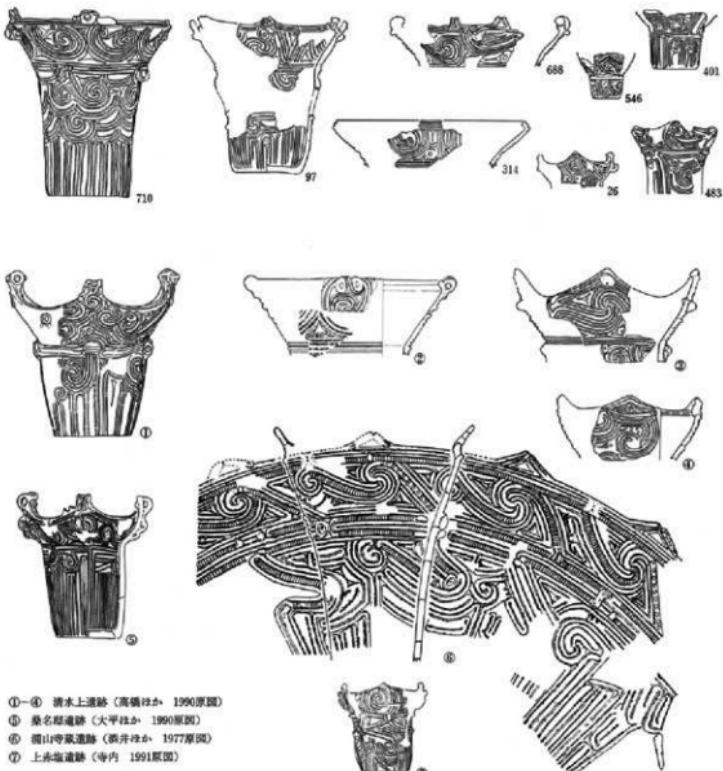
e) 隆IIb系列(第114図)

隆IIa系列に比べると、この系列の土器はあまり多くない¹⁾。大きくて平口縁の土器と波状口縁の土器とに分けることができる。平口縁の土器では口縁部に隆線が2~3条めぐる土器(710、97、688、314)が多く、口縁端部から直接文様が垂下する土器は少ない。隆IIa系列の口縁部第1文様帯の幅がせまくなつたと考えてよいと思われる。口縁部文様帯は、斜方向に走る渦巻文を基本としており、これは火焰型土器をはじめとして越後的な文様割り付けである。710、97共に口縁部には入字状把手の変化したものが付されている。両者共に似たような文様であるが隆線の文様技法に違いが見られる。710は主要モチーフに太い隆線を用い、それにそう隆線は半截竹管によっており、沈線部のなぞりは認められない。一方97では、主要モチーフの両脇の隆線も断面が高く、沈線部が深くなっている。胴部文様も2段構成で下半部はいわゆるコスモス状文である。これは北陸の上山田式に共通する。

隆帶系波状口縁の土器は、ほとんどがこの系列である。いわゆる王冠型土器もこの系列である。26や546の波状部の渦巻は波頂部から垂下するのではなく横からであり、このような巻き方は纏I系列の343、777と共に通する。五丁歩遺跡において隆帶系の波状口縁の土器は清水上遺跡などと比べると数は少ない。546では隆帶は全く使用されておらず、沈線によっており、沈線部には連続のキザミが付されている。小形ゆえに隆帶を使用していない可能性もある。

省内ではこのタイプの平口縁の土器はそのほとんどが、鶴頭冠の付されるいわゆる火焰型土器で、類例は意外に少ない。①~④は清水上遺跡出土で、②は口縁端部から直接文様が垂下する土器でこの系列としては類例がない。平口縁の土器としては、この他与板町徳晶寺遺跡、長岡市岩野原遺跡、中里村芋川原遺

1) いわゆる火焰型土器、王冠型土器と呼ばれている土器も文様割り付けではこの系列に入るが、ここでは除外して考えることとする。



第114図 潤IIb系列の土器

跡等に類例が見られる。波状口縁の土器は新潟、福島で多く認めることができる。①の胴下半部は710、97と共に通である。⑤は福島県桑名郡遺跡出土である。渦巻文を基本とすることは越後と共通である。北陸地方では、この系列は富山県東部地方にしか認めることはできない。⑥は富山県浦山寺藏遺跡(酒井ほか1977)出土である。この遺跡の土器は、ほとんどが胴部文様帯と口縁部文様帯が区切られており、北陸地方では異質である。⑥は隆帯上に爪形文が多用されている。

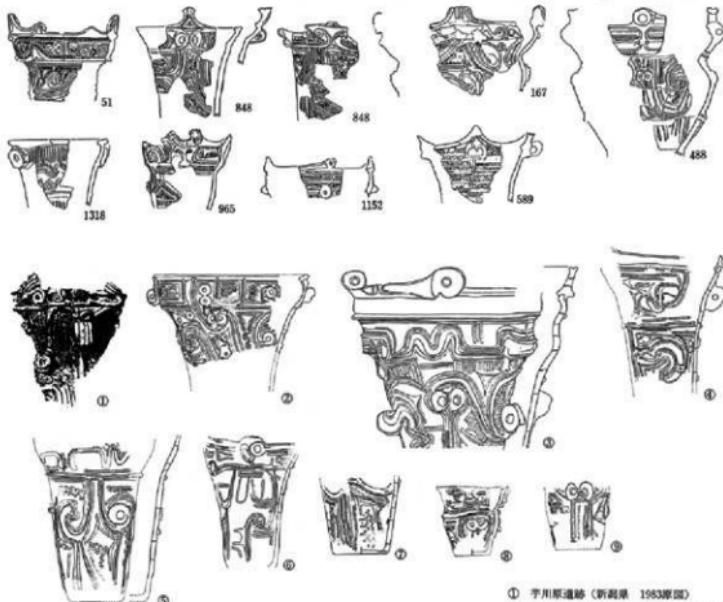
以上のようにこの系列も越後を中心として福島県方面に多く認められる。いわゆる火焔型土器の分布域と重なると言える。群馬、長野県方面には基本的にはない土器群である。しかし、長野県北部では上水内郡上赤塙遺跡(寺内1991)に類例がある(⑦)。

f) 隆IIIa系列 (第115図)

文様区画内に細い沈線文を充填する土器で、突起、把手等の付されるものである。県内では、ほとんど確認されていなかった土器群である。51を典型とする。51は口縁部に大きな把手（入字状把手）で環状部をもつて有する。沈線部には連續のキザミが付され眼鏡状突起、渦巻文等が見られる。各々の文様要素は他系列の土器にも認められるものである。まず口縁部の大きな把手は、五丁歩遺跡ではかなり多く用いられている。いわゆる入字状把手の発展したものと考えられる。沈線部に付される連續のキザミ（有筋沈線に類似）もこの遺跡で多用されている。また有筋沈線ということであれば、いわゆる新巻類型の土器、阿玉台式土器、東北の大木7b-8a式の土器に多く認められるところである。区画内の細い沈線は、この時期としてはあまり多用されるものではない。しかし、北陸の新巻式土器や関東の勝板式土器などではまま見られる文様である。848、965では大きな渦巻文は用いられておらず、848では端部が小さく渦を巻く程度である。589、1152は横区画である。167、488は脇部のふくらむ器形で大きな渦巻等が用いられており、前記のものとはやや異なる。488は台付になると考えられる。これらの土器には時間幅があると思われる。

以上の土器の類例は県内ではほとんどなく、①の森上遺跡出土土器くらいである。今のところ分布は魚沼地方ということができる。

県外においては、長野県小県郡東部町久保在家遺跡（小林ほか1986）に類似性の強い土器が出土している。②～⑨がそれで、第1号住居跡からまとめて出土している。山口氏は、これらの一群を「新巻類型」の典型（山口1989）としている。②は51の土器と器形、文様共に共通性が強い。51の口縁部把手は③と同じである。また③は1318と共通性が強い。④～⑨は有筋沈線を多用しているが、地文に渦巻文や沈線を用いて



① 森上遺跡 (新潟県 1983年調査)
②～⑨ 久保在家遺跡 (小林ほか 1986年調査)

第115図 隆IIIa系列の土器

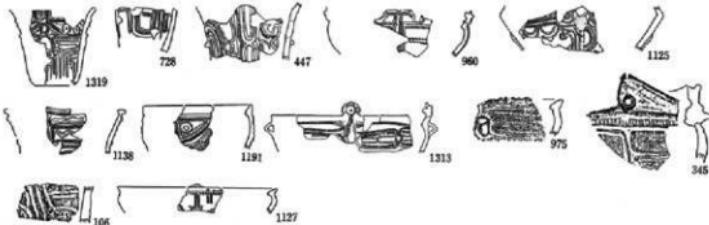
6まとめ

おらず、むしろ陸IIIb系列に近い。これらの土器とともに新道～藤内式の土器が併出している。

以上のようにまだ類例は少ないが、縄I系列と関連性が強い。

g) 隆IIIb系列(第116図)

直線的な隆帯及びそれに添う沈線によって文様が描かれ、沈線部にはキザミが多用される土器である。地文に縄文ではなく、無文部を多く残している。完形品がないためはっきりとした位置付けはできないが、破片を見る限りにおいても、器形、文様にバラエティがあり、分類しようのないキザミを有する土器を一括した感がある。したがって本来は、2～3に分類されるべき内容をもっている。1319は文様帯が胴部で分帶される。隆帯上にはキザミが付され、小環状突起が多く認められる。728、447等は長野県久保在家遺跡に類似の土器がある。1313、975等はいわゆる斜向沈線文系土器に共通するものがある。975は清水上遺跡出土の斜向沈線文系土器の口縁部に近いものである。960は有筋沈線に近くキザミは細い。345は口縁部の大きな入字状把手が目立つ。当該期の編年を考えるうえでは、大きなカギを握っている土器群である。



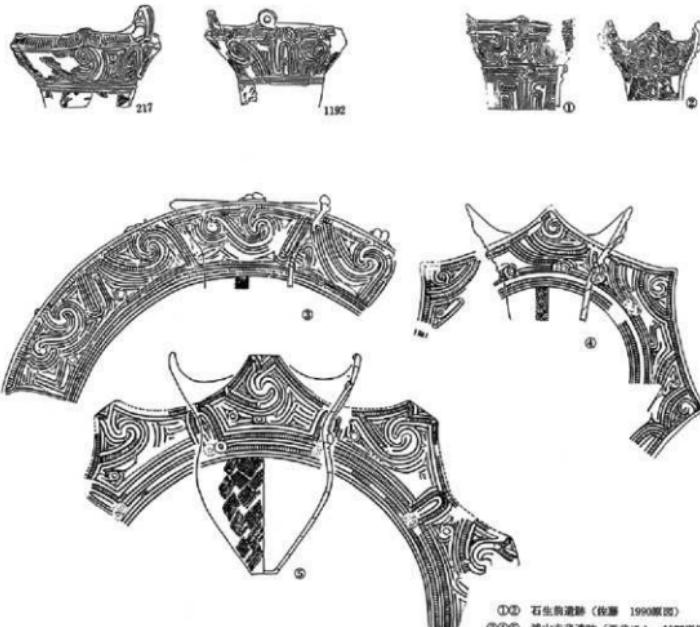
第116図 隆IIIb系列の土器

h) 隆IV系列(第117図)

文様割り付けは隆IIa、IIb系列と同じである。したがって追いは胴部に縄文を有するかいなかである。五丁歩遺跡での出土は2点である。217では発達した把手が見られまた1192では円環状の把手が付される。これら2者と口縁部文様帶で類似性の高いのが、隆IIa系列で取りあげた福島県石生前遺跡(佐藤1990)の土器(第113図⑨)である。県内では、波状口縁の土器が比較的多く目立つ。

県外でも数は少ないが、北陸、東北方面に見られる。①、②は福島県石生前遺跡の土器である。隆IIa系列とはほとんど変わらない。②は波状口縁の土器である。この他栃木県方面にもいわゆる馬高式の影響とされる同文様帶の土器が認められる。③～⑤は富山県浦山寺藏遺跡出土土器である。3点共に器形の異なる土器であるが文様割り付けは同じである。①は横S字文を基本とし、④では三角区画内に小渦巻、⑤は波状部に渦巻文と三叉様の文様をもっている。いずれも爪形文が多用されているのが特徴である。石川、福井方面にはない。また長野、群馬方面にも確認されていない。

以上のようにこの系列の土器は新潟、福島を中心として認められる土器である。ただ富山県浦山寺藏遺跡出土の土器は、北陸の中でも異色であり、中部、越後の土器を考えるうえで重要である。



第117図 隆IV系列の土器

①② 石生前遺跡（佐藤 1990原図）
③④⑤ 浦山寺墓遺跡（西井ほか 1977原図）

i) 隆V系列（第118図）

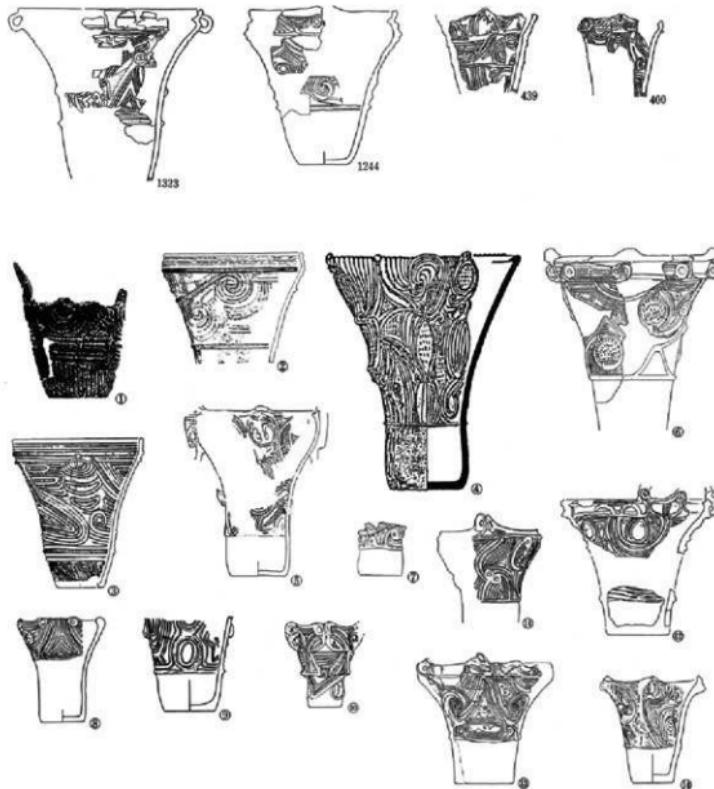
胴部下半に横の区画をもつ土器である。この系列の土器も県内ではほとんど類例がない。1323、1244は下部が無文となる土器である。1323は隆Ib系列と共通性が高い。口縁部が無文で柄状把手が付される。胴部には眼鏡状把手が見られ、縫帶にそって半截竹管文が2例認められる。文様に渦巻文は用いられていない。一方1244では、渦巻文が用いられており、無文部を多く残している。439では下半部も隆起線等による上半部と同様の文様である。400は隆IIa系列と同文様であるが、下半部には縄文が付されている。口縁部は梢円区画内に斜向沈線が充填され、胴部は縫帶を用いておらず、半隆起線のみの文様である。このように4点共に違いがあり安定した存り方を示していない。

県内では他に中里村森上遺跡に類例がある（①）。この土器は上半部を欠損するが、下半部に半隆起線による横区画をもっている。下半部は縫半隆起線束である。上半部には太い縫線による梢円区画及び区画内の列点刺突があり沈線部には連続の刺突も認められる。

県外では、まず福島県方面には全く存在しない。北陸方面でもほとんどないと言えるが、②、③のような土器はある。両者共に爪形文の付される縫帶により横区画されており、下半部には縄文が付されている。④～⑪が長野県出土の土器で、いわゆる「焼町土器」と呼ばれている一群である。長野県で焼町土器と呼ばれているのはこの系列が多い。④は「焼町土器」の標準となった土器である。はっきりとした渦巻文は認められない。⑥は長野県坪ノ内遺跡（寺内ほか1990）出土で口縁部に文様帯をもっており、五丁歩の土器に近いが、列点のある梢円区画の文様などにやや違いが認められる。⑩は台付鉢で大きな有段構成をとる

ものである。これは長野独特のものであり他地方には認められない。**⑯**~**⑰**が群馬県出土である。**⑯****⑰**共に口縁部に文様帶をもっており、越後に近い土器と言える。**⑯**では大きな渦巻文があり、多分に越後的である。

以上のようにこの系列の土器は長野県を中心を持つ土器で、「焼町土器」の多くを占めている。五丁歩道跡では客体の土器である。この横区画は勝板式に認められるものであり、下半部を無文とすることもそう



① 長上遺跡（金子ほか、1974原図） ④⑤ 長神山遺跡（木下ほか、1975原図）
 ②③ 鹿生遺跡（井、1985より） ⑥ 本城遺跡（松永ほか、1975原図）
 ⑦ 貴生遺跡（野村、1964より） ⑧ 美久保（寺内ほか、1986原図）
 ⑨ 用賀遺跡（大久保ほか、1981原図） ⑩ 三原田遺跡（寺山ほか、1990原図）
 ⑪⑫ 呼ノ内遺跡（寺内ほか、1990原図） ⑬ 置谷戸遺跡（山口ほか、1989原図） ⑭ 下佐野遺跡（新井ほか、1986原図）

第118図 路V系列の土器

である。したがって長野県に多く存在することも理解できる。

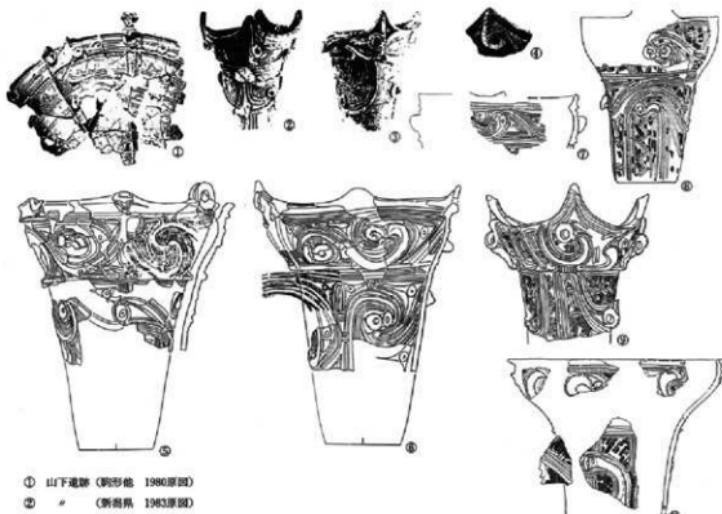
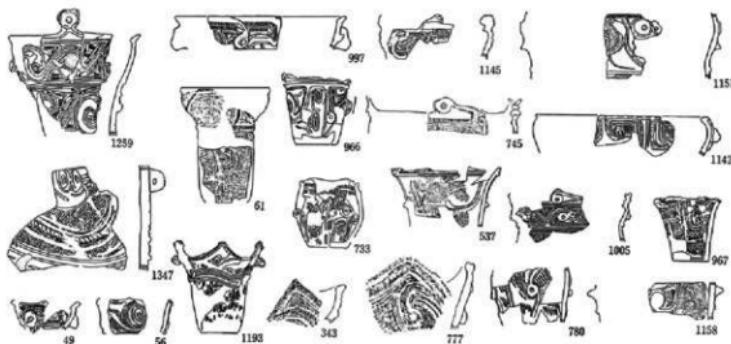
j) 繩I系列(第119、120図)

いわゆる「新巻類型」¹⁾「ブレ焼町」²⁾「後田原IV類」³⁾とされている土器に類似するものである。地文に縄文をもつ土器とそうでない土器とがあるが全体が明確でないためここでは一括する。この系列は口縁部文様帶と胴部文様帶とを区切るのが一般的であるが、733のような土器も認められる。文様では沈線部にキザミを付すものと、そうでないものと約半々が認められる。どちらかというとキザミが付される土器が多いといえようか。口縁部文様帶では、幅広の舌状隆帯がS字形にめぐるもの(1259)、環状及び眼鏡状突起の施される土器(997、1151、1005)等がある。61は飾装性にとぼしい。1142は区画内に細沈線を施しており、分類上は隆IIIa系列に入れた方がいいかもしない。1193は明確な文様帶区分が行われていない。343、777は波状口縁の土器である。五丁歩遺跡においてはこの系列の波状口縁は少ない。曲隆線は波頂部から垂下せず脇からのびている。平口縁の土器では、1259のような突起や1145、745、1005といった入字状突起が認められる。胴部文様では横S字形の舌状隆帯の付される土器(1259)は少く、基本的には縦である。1347のように大きく渦を巻く土器も見られる。この舌状隆帯の端部は何も付されないもの(61、537)、幅広く円形になるもの(1158)、環状、眼鏡状となるもの等のバラエティがある。

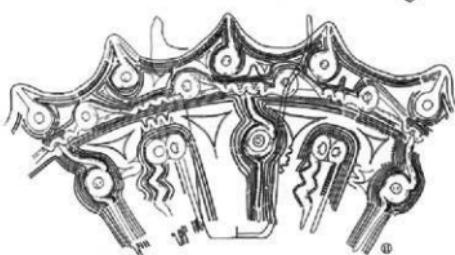
県内の類例も今のところ少ない。①、②は長岡市山下遺跡(新潟県1983、駒形1990)出土である。①は口縁部に1259と同様の突起が付される。また小波状突起から垂下する環状把手も付される。口縁部文様帶には横の無文帶がありその両沈線筋にはキザミが付されている。これは、いわゆる新巻式土器の手法と共通する。胴部には半截竹管による連弧文や環状突起が付される。②は波状口縁である。波頂部から隆帯が垂下し、端部が環状突起となっている。また舌状の隆帯も見られる。隆帯にそっては刺突のある沈線が2~3条そっている。胴部にも環状突起が見られそれを隆帯が横に連結している。地文には繩文が付される。③は六日町上の台II遺跡(新潟県1983)出土である。基本的には②と同じである。④は吉川町長峰遺跡(関はか1984)で、波状部しかないがおそらく同類と考えられる。

県外では群馬、長野両県に同類が認められる。⑤~⑩が群馬県出土である。波状口縁の土器は⑨のみで他は突起等が認められる。⑤、⑥は三原田遺跡出土で共通性の強い土器である。口縁部上半には幅のせまい無文帶が認められ環状の突起が付される。また口縁部文様帶は舌状隆帯による横S字形で眼鏡状突起が認められる。胴部にも類似の文様が付される。⑦~⑩も大方同様の文様構成をもっている。以上群馬県内で出土している土器には共通性が高く、波状口縁が少ないことがわかる。また沈線部にキザミを有するものがないことも特徴の一つと言える⁴⁾。一方長野県で在り方がやや異なる。まず輪形では波状口縁の土器が圧倒的に多い。⑪は波頂部から舌状隆帯が垂下し、環状突起とながっており、②、③と共通する。胴部は縦区画で環状及び眼鏡状突起が舌状隆帯と共に垂下している。沈線部にはキザミ、刺突が多用されており、他の土器でもキザミ、刺突の採用が多く、群馬県の存り方と異なっているのは興味深い。また長野県下で出土している土器は群馬県出土に比べるとあまり曲隆線的でなく、大きなS字形などは用いられてお

- 1) 「新巻類型」は房谷戸遺跡報文(山口1990)の中で、山口氏が提唱したものである。また「焼町土器」も「焼町類型」として設定している。詳しくは報文を参照されたい。
- 2) 「ブレ焼町」は三原田遺跡の中で赤山氏が用いている。「新道式並行期の曲隆線文を伴う土器」としており、いわゆる焼町土器に先行する土器で、これらを合わせ、一系統の消長を示すとしている。
- 3) 「後田原IV類」については、野村氏の論文(野村1984)に示されているので、それを参照されたい。この中では、「焼町土器」は、「後田原IV類」からの直接影響は求められないとしている。
- 4) 「ブレ焼町」では、沈線部にキザミある土器が含まれる。



- ① 山下遺跡(朝形他 1980原図)
- ② " (新潟県 1983原図)
- ③ 上ノ台日遺跡(")
- ④ 長峰遺跡(岡ほか 1984原図)
- ⑤ 三田原遺跡(赤山 1990原図)
- ⑦ 十二原日遺跡(菊池 1988原図)
- ⑨⑩ 藤谷戸遺跡(山口 1986原図)
- ⑪ 吉田向井遺跡(樋木 1988原図)



第119図 繩I系列の土器(I)

らず、特に胴部は縱に直線的である。

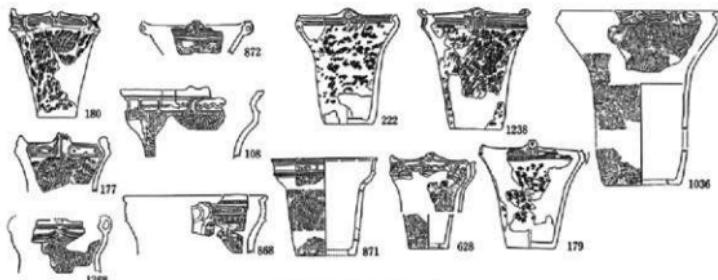


① 坪ノ内遺跡 (寺内ほか 1990原図)
② 佐田原遺跡 (野村ほか 1988原図)
③ 北丘B遺跡 (長野ほか 1973原図)
④ 東神山遺跡 (× × ×)

第120図 繩I系列の土器(2)

k) 繩II系列 (第121図)

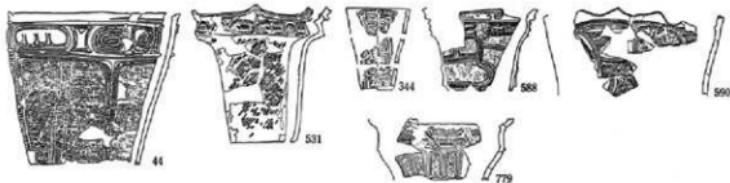
口縁部に幅のせまい文様帯をもち、以下が繩文のみの土器である。器形は、ほとんどがG器形となる。繩Ib系列と同様の文様構成となる。繩IIaとしたものは180、177、108等である。180は橋状又は環状の把手により楕円区画されるもので区画内には横及び縱の隆起線文が充填される。108は微隆起線文による楕円区画で区画内に波状沈線が充填されている。繩IIb系列としたものは872、1268、871等である。872は区画内に交互刺突文が、1268は隆帶にそってキザミが、871は隆帶上にキザミが各々付される。繩IIc系列としたものは222で、沈線のみによる区画で類例は他にない。繩IId系列としたものは179、1238等である。1238では數本の縱隆起線文で区画が行われ、文様帯の下帯には細い縱キザミが認められる。179では上記1238と同様の文様区画であるが隆帶楕円区画も併用されている。1036は楕円区画等は明確でない。隆帶による文様であるが全体は不明である。以上のようにこの系列にはバラエティが多いが、完形品が少なく比較、検討はできない。県外における類例は少なく、越後独自の土器と言える。津南町沖ノ原遺跡(江坂ほか1977)には、時代は下ると思われるが同タイプの大木8a~8b式並行期の土器がある。



第121図 繩II系列の土器

I) 繩IV系列 (第122図)

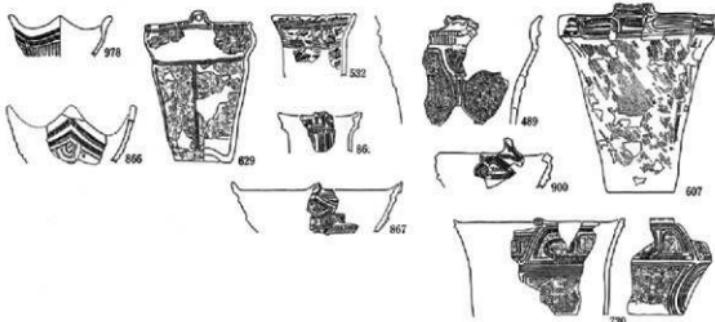
地文に縄文を有し、沈線部にキザミを多用するものである。器形、文様にバラエティがあり、細分すべきであるが、全体をうかがえるのが少なく文様技法のみで一括した。縄IIIb系列との共通性が高い。531は前記縄II系列に入るべきかもしれない。沈線部には密にキザミが付されるが類例はない。44も他に類例のない土器である。断面三角形に近い隆帯により梢円区画を行い、それにそってキザミのある沈線が派生する。沈線キザミ、隆帯共に安定しておらず稚拙な感じを与える。344、588は器形、文様構成に共通性が高い。キザミは細かい。588には入字状の把手がある。



第122図 縄IV系列の土器

m) 縄V系列 (第123図)

爪形文を用いる土器である。新潟県における当該期の土器で爪形文を用いるのは、いわゆる新崎式系の土器であり、平野部では一般的である。しかし五丁歩遺跡においては浅鉢を除いてほとんど見られず、文様構成も異っているものが多い。湯沢町岩原遺跡（北村ほか1990）において新保段階ではしっかり北陸系の土器が出土しているにもかかわらず、次の段階では、ほとんどなくなってしまうという大きな変化を見せている。978、866は波状口縁で、県内では多く認められる器形である。清水上遺跡、千石原遺跡（中村ほか1973）等が好例である。629、532も文様構成としては、越後新崎系土器に共通する。532はキザミである。それ以外の土器については全く類例が知らない。607は縄II系列にも該当する土器である。隆帯による梢円区画及びそれにそった爪形文である。口縁部には低い台形様の把手が付される。この把手の形状は、阿玉台Ib式の把手との関連性をうかがわせるものである。730は口縁部に入字状の把手が認められる。869のように爪形文が縦に施されるのは北陸方面にはない手法で、福島県方面に一部認められる。



第123図 縄V系列の土器

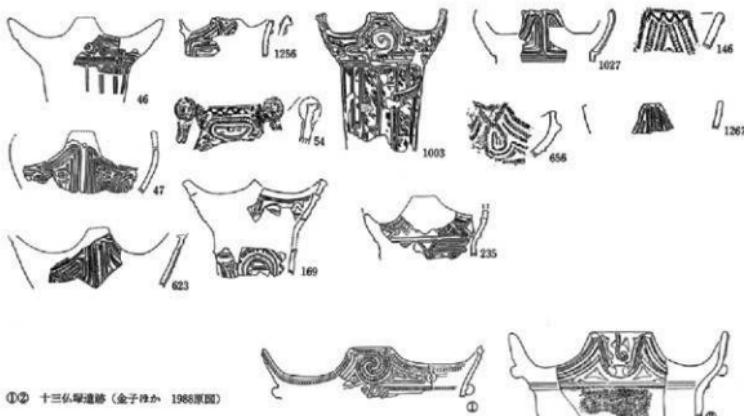
n) 繩VI系列の土器（第124図）

端部が水平となる台形様の波状口縁をもつ土器である。このような台形様の波状口縁の器形は阿玉台式及び東北大木7a～7b期にかけて認められるもので、他地域には存在しない。明らかに縄文の施されない土器（1256、169）も存在するが一応一括して扱う。全体的には沈線部にキザミの施される土器が多くを占める。また隆帯上にキザミやハの字状の沈線を施す土器（146、656、623）も見られる。文様構成では、波央部を中心として左右対象の文様構成をとる土器（47、623、1027、1267）と波央部に文様の中心が来るもの（54、1003、656）がある。

このうち1003では波央部にスリットが見られる。また隆帯の波状はりつけも54、1027、146に見られる。1003のようなスリットは東北大木7b式の波状口縁の土器に特徴的に付されるものであり関連性をうかがわせる。口縁部中央の舌状隆帯による渦巻文は、「新巻類型」とも関連があろうか。胸部の沈線による縦区画は大木7b式と類似する。縄文の付されない1256、169ではいざれも沈線部及び沈線端部にキザミの付されるも、169では幅広の隆帯が用いられている。

県内では十三仏塚遺跡に同器形の土器がある。①では爪形文による渦巻文が、②では隆帯上にハの字状の沈線が付されている。いざれも北陸的な文様技法である。

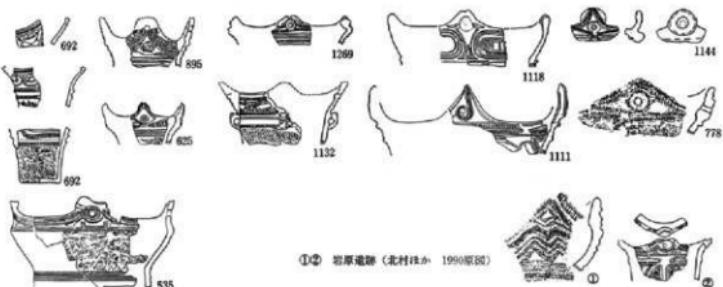
このように、この系列で地文に縄文を有する土器は東北大木7b式と関連が深いことがわかる。特に46、47等は類似性が強いと言える。



第124図 縄VI系列の土器

o) 縄VII系列の土器（第125図）

やはり波状口縁の土器であるが波頂部がとがるか丸くなるものである。ほとんどの土器が波状中央部に、円形浮文を有するのが特徴である。また必ず有節沈線やキザミが付されるのも一つの特徴である。692は大きな三角形印刻、有節沈線が認められ、五領ヶ台式土器の要素をもっている。625でも口唇部にそってキザミがあり、五領ヶ台式的である。535は口縁部文様帯が2分される土器で他とは異なる。類似の土器はあまり認められないが、湯沢町岩原遺跡で五領ヶ台式土器（①、②）が出土しており、関連性をうかがうことができる。



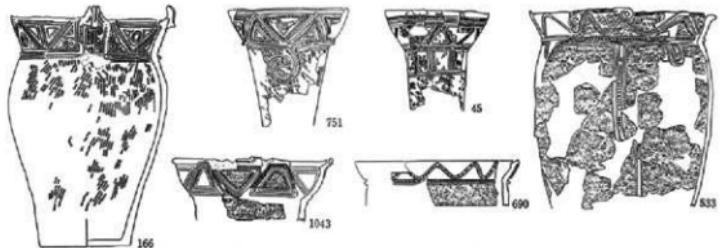
①② 岩原遺跡（北村ほか 1990原図）

P) 繩理系列の土器（第126図）

口縁部に三角形区画を文様としてもつ土器である。区画は沈線のみによるもの（166、45）と隆帯によるもの（751、533、1043）がある。166は2～3本の沈線により区画を行い区画内に三角形印刻や細沈線を充填している。45では胴下半に横区画が見られるが、これは勝板式の文様割り付けに共通する。751、1043では隆帯区画にそって有筋沈線が走っている。690、533は口縁がくの字状に外反する器形で口縁部に山形の隆帯がめぐっている。533では入字状の把手が見られる。

県内では魚沼地方に類例がある。①は川久保遺跡出土で、口縁部に大きな環状の把手がある。区画内には三叉文、玉抱き三叉文がある。②も同様に区画内に玉抱き三叉文が見られる。また県外では、北陸地方に同タイプの土器が見られる。

以上のようにこの系列の土器は、関東勝板式土器の文様区画の影響で作られた土器と考えられる。

① 川久保遺跡（佐藤 1985原図）
② 上の台II遺跡（新潟県 1983原図）

第126図 繩VII系列の土器

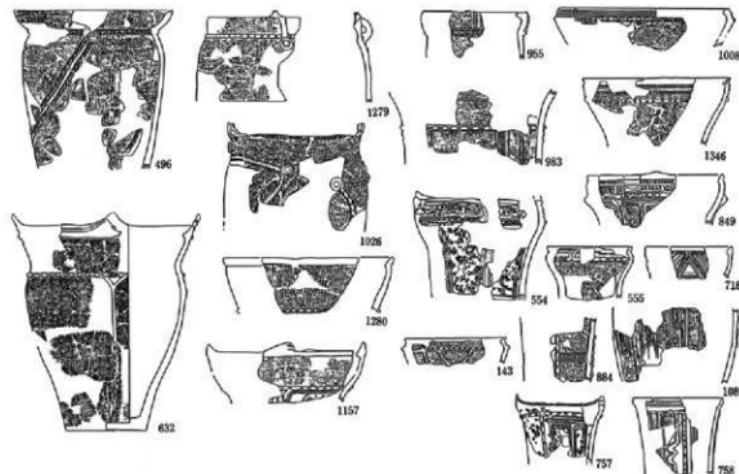
9) 繩IX系列の土器（第127図）

連鎖状隆帯をもつ土器である。器形的には、B・H器形の比較的大形の土器に目立つ。496、632、1279、1026、1280等が典型である。くの字に外反する口縁部は上端まで繩文の付される土器(496、1279、1026)と無文部をもつ土器(632、1280、1157)とに分けることができる。前記3個体は、いずれも円形環状浮文を隆帯の連結部に付している。鎮状隆帯は頭部に必ず付され、そこから胴部に垂下する土器が多い。垂直に垂下するもの(632、1157)、斜に垂下するもの(496、1026)等がある。次にA器形の土器では2例(757、758)ある。口縁部は無文帶及び沈線で、頭部及び胴部に鎮状隆帯が認められる。また胴部には幅広の隆帯も見られる。キャリバー状の器形では口縁部文様帯の下端隆帯が鎮状となるものがほとんどである。

県内での類例はあまり明確でないが、清水上遺跡ではA器形の土器には見られないが、キャリバー器形には少數認めることがある。

県外では、福島地方に認められる。757に類似する器形の土器では上の台A遺跡(鈴鹿ほか1984)にあり、またキャリバー形では、法正尻遺跡(松本ほか1991)に少數認めることができる。長野県方面でも認められ、寺内(1989)によると、北原遺跡、雨森遺跡、大谷遺跡、荒神山遺跡、前田木下遺跡等にあり、最近では、坪ノ内遺跡(寺内1990)等にも出土している。時期的には、「平出III型」頭から認められる文様ということである。器形的にも、五丁歩遺跡に類似する。

現在のところ、この系列の土器はあまり明確にとらえることはできないが、五丁歩遺跡ほどまとまって出土している遺跡は少ない。大きくは信州～越後魚沼地方に分布域の中心をもつとしておく。



第127図 繩IX系列の土器

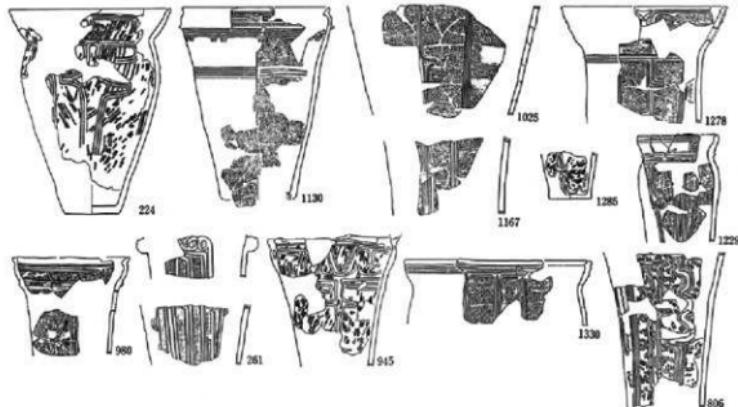
r) 繩X系列の土器

東北大木系の土器で有節沈線を用いるものである。五丁歩遺跡では非常に少なく979、579、1216などであるが、全体が明確でなく、検討するには至らない。

s) 繩Xla系列の土器（第128図）

横又は縦の沈線が連続せず、途中で途切れ、端部が直角に曲がる土器である。いわゆる大木系の土器に認められる文様である。224、1330を除いては、ほとんどがキャリバー状の器形になると考えられる。224は他に類例のない土器で、あえてこの系列に入れた。半截竹管2本による文様で口縁上部文様帶にこの系列の特徴を有している。1130も口縁部文様帶に逆U字状の沈線がある。945は口縁部沈線による相対するU字状沈線がめぐっている。その他はほとんど胴部にこの文様が採用されている。806では舌状の隆帯が波状に垂下している。

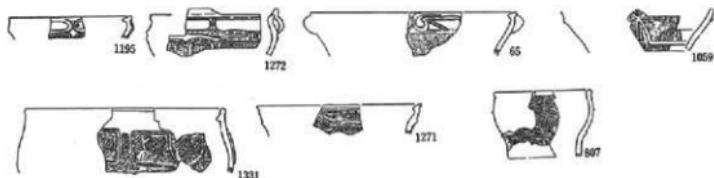
県内ではこの系列の土器はあまり明確でない。東北地方の大木系土器では、大木7b段階での胴部文様は基本的に縦区画で、大木8a段階では、縦+横のクランク文様や渦巻文が主流となる。この系列の文様は、どちらかというと大木7b段階にまで認められるものである。



第128図 繩Xla系列の土器

t) 繩Xlb系列（第129図）

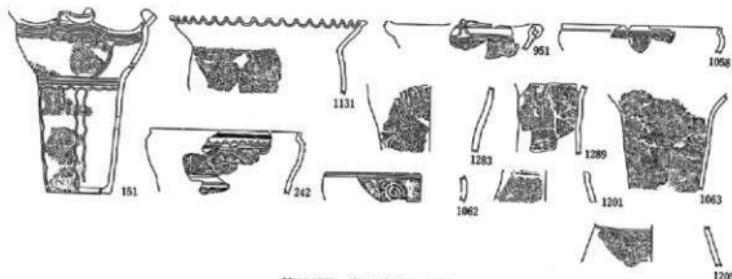
断面三角形に近いはり付け隆帯を用いている土器である。これも上記繩Xla系列と同様、東北大木系土器の文様要素の一つである。1195、1272では口縁部に梢円区画を用い、区画内は無文としている。65、1059、807は、はり付け隆帯で1195、1272、1331とはやや異なる。大木7b~8a段階にかけて認められるが、五丁歩遺跡での出土例は少ない。



第129図 繩Xlb系列の土器

u) 鋼刃系列 (第130圖)

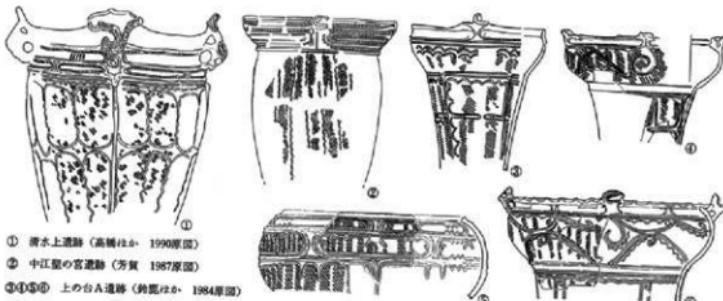
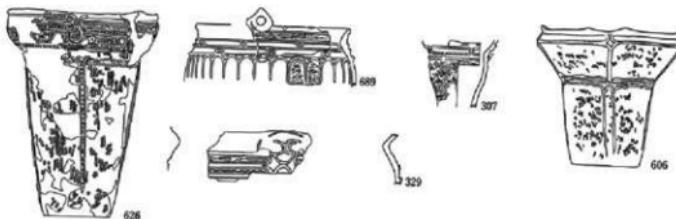
頭部及び口縁部に沈線による文様を描いているものである。まず鋸歯状の沈線の見られる土器(1131、151、951、1058、1201)が比較的目立つ。また星様の文様をもつもの(951、242、1205)もある。そして1062のような円形の文様をもつもの(1131、1289、1063)も特徴的である。1063では、沈線による横S字文がある。これらの文様はやはり大木系の文様であり、7b~8a段階にかけて認められるものである。



第130図 繩III系列の土器

v) 繩XIII系列の土器 (第131図)

細長い椭円区画を用いる土器である。出土数はあまり多くない。やはり東北地方に類例を求めることが可能である。626は口縁部に2段の椭円区画をもっており、区画内に沈線が走っている。また副部に



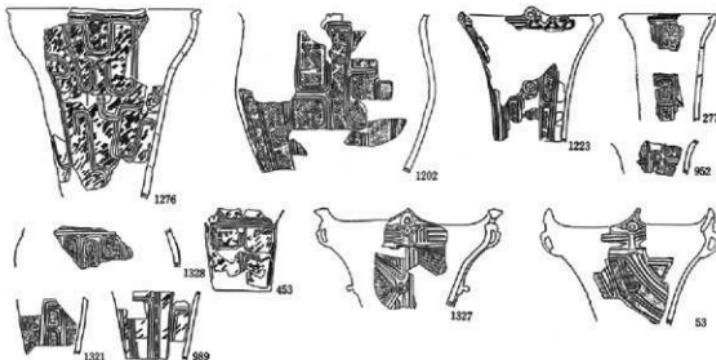
第131図 挿XIII系列の土器

はY字状の隆帯が垂下する。類似の文様構成をもつものに②の中江聖の宮遺跡出土土器がある。口縁部の文様構成は同じであるが、区画内には交差刺突が見られる。689、329は胴部の張る器形で、頸部に2段の楕円区画がある。689、329共に隆帯は細い断面三角形のものを用いている。①は清水上遺跡出土であるが同じく頸部に2段の楕円区画が認められる。⑤は上の台A遺跡の土器である。胴下半に垂下する連続逆U字状の隆帯は689と共通する。606は口縁部に一段の楕円区画をもつもので4単位の単純な文様構成である。頸部の波状沈線等②の上の台A遺跡に類似、共通する。なお⑥の土器は縄XIV系列242の土器と文様構成が共通している。

以上の②～⑥の土器は福島県では大木7b式段階に比定されている。

w) 縄XIV系列の土器（第132図）

いわゆるクランク様の文様をもつ土器である。東北大木8a式、群馬の三原田式等に特徴的な文様である。1276は口縁部から底部まで文様帶の区切りがない。1223、277は縄Ib系列と同様の文様構成である。1327、53もそうである。口縁部文様帶は変わりがない。胴部についてはクランク様の文様構成ではないが、一応ここにあげておく。



第132図 縄XIV系列の土器

x) 勝坂系列の土器¹⁾（第133図）

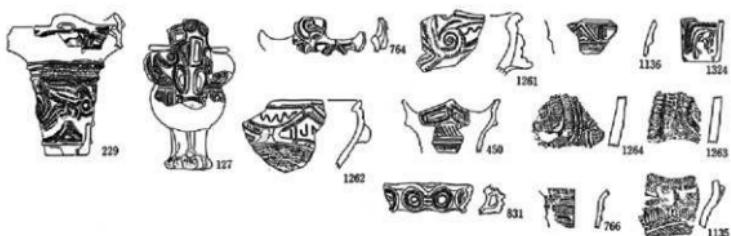
明らかに勝坂式の文様技法を用いている土器である。越後にしてはかなりの出土量を示している。文様では、127を除いて共通的な施文手法を示している。文様ではキャビラ文、ベン先文、刺突沈線を用いているのがほとんどで、いわゆる新道式土器に特徴的である。また127は脚付土器で他に類例をみない特殊な土器である。文様的には藤内式段階にあるものと考えられる。

県内における勝坂式土器の分布範囲はせまく、現在のところ魚沼地方から上越地方の山間部に限られているが（高橋1989）、北陸方面においても量は少ないと分布が見られる²⁾。またこれらの土器の胎土分析結果（第IV章5）では、関東から持ち運ばれたという明確な結果は出ておらず、地元で作られた可能性が大とされている。しかば、関東方面から何らかの理由で五丁歩に来た人が、土の選択、焼成も関東風を行った

1) 勝坂式、阿玉台式土器については、寺内隆夫、三上徹也両氏に御指導いただいた。

2) 例えば、富山市杉谷（A. G. H）遺跡（藤田ほか1975）では、かなりまとまった出土が見られる。

結果と見ることができる。五丁歩で出土しているこれらの土器の文様や製作技法は、関東でも赤城山麓の房谷戸、三原田遺跡といった北関東により近いと思われる。



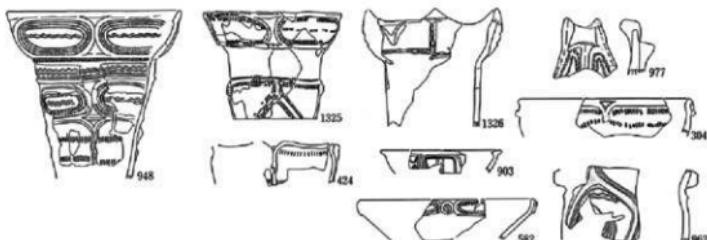
第133図 勝坂系列の土器

Y) 阿玉台系列の土器（第134図）

明らかに関東地方の阿玉台式土器と思われるものである。948、1325は典型的な土器で最も阿玉台式土器の特徴をもっている。948は梢円区画、Y字状垂下隆帯、爪形状刺突などをもっている。梢円区画内の刺突列や波状文は複列文様であり、阿玉台II式の特徴をよく示している。1325も同様である。977も波状口縁の典型である。304、424にもY字状隆帯、列点刺突が見られる。582は浅鉢で梢円区画に複列の刺突がめぐらしている。

県内における阿玉台式土器の分布は、前記勝坂式土器と同様魚沼地方山間部に多いが、北の方にも一部認められ、勝坂式土器とは若干の異った分布を示しており、このことは福島県に勝坂式土器はほとんどしていないのに比べ、阿玉台土器はI～II段階でかなりの比率で認められることを考えれば、納得のできるところである。

(1991.3.25)



第134図 阿玉台系列の土器

2) 遺構出土土器の検討

五丁歩遺跡出土の土器は各系列の土器で説明したように、時期的にはあまり時間幅をもたないにもかかわらず、文様の系統、器形等にバラエティが多く複雑である。したがって他遺跡に類例を求めることが困難な土器が多く認められる。ここでは遺構出土土器について検討し、編年材料を作ることとしたい。しかし、出土状況を見るとほとんどが住居跡覆土の出土であり、床直土器や土坑一括といった出土状態を示している土器はほとんどない。したがって一括を強調することはできない。また、整理を担当した職員が直接発掘調査にたずさわっていないため、出土状況等明確に把握できていない。加えて住居跡の切り合い関係についても発掘所見とセクション図に整合性が認められないものもある。よってそれらを勘案しながら検討していきたい。

a) 7A号住居跡（A類住居跡）

全般的には縄文系列の土器が多く出土している。特徴的なのは、縄文VI系列の土器3個(46、47、54,)が出土している。前述のように大木7b段階にあると考えられる。次に縄IIIa系列の土器(51)である。この土器は新巻類型とされる久保在家遺跡出土土器に類似する。久保在家遺跡一号住居跡ではいわゆる新巻類型の土器と新道式土器が伴って出土しており、また49に類似する有節沈線を多用する土器も多く出土している。61は新巻類型と考えてよいであろう。久保在家遺跡では、他のいわゆる隆帯系の鶴町類型は全く出土していない。このことから考えると、7A号住居跡出土の48、69、60といった隆帯を密に施す土器は、時期を異にすることができよう。

次に43、44の土器であるが、他遺跡に類例はとぼしい。43文様帶の横の区切りがあまり明確ではないので東北的ではない。文様は沈線と幅広の隆帯を用いており、把手、突起等は付されていない。おそらく大木8a段階までは降らない土器と考えられる。次に44は縄IV系列である。胴部のU字状文様は43と共通する。おそらく同時期の土器と考えられる。

このように見てくるとこの7A号住居跡出土の土器は2時期を考えることができる。

旧…43、44、46、47、49、51、61

新…48、59、60、53

b) 10A号住居跡（A類住居跡）

ここでは隆帯系の土器がほとんど出土しておらず、注目される。229は勝坂式土器である。隆帯上の爪形文、ベン先状刺突、有節沈線等新道式土器の技法を用いており、その段階の土器と考えられる。235は縄VI系列で7A号住居跡と同じ在り方を示している。242は大木7b式段階の土器であろう。したがってこの10A号住居跡も、7A号住居跡の旧段階と同時期とすることができる。

230では口唇部にキザミが見られ、また231は梢円区画内に波状沈線がある。また263は縄IIlb系列又は縄I系列の土器で、やはり7A号住居跡出土土器の旧段階と共通している。この2つの住居跡は共にA類であり、また環状集落の最も外周に位置している。そして古段階の土器が廃棄されているということができる。

c) 27号住居跡（C類住居跡）

長方形C類の住居跡である。炉付近からまとまった土器の出土が見られた。531は縄IV系列で有節沈線、キザミを多用する土器である。口縁部梢円区画を基本としている。類例はあまり知られていないが、大木8a段階まで下ることはないと思われる。538は基本的に新崎系土器の文様割り付けである。爪形文ではなく、キザミ手法となっている。535は縄VII系列の土器で波状部を中心として対象の文様構成をとるもので、やはり大木8aまで下ることはあるまい。537は有節沈線と舌状隆帯が認められ、いわゆる新巻類型に近いと

考えられる土器である。536は隆Ib系列の土器とかんがえられるが、この土器はレベル的には、最上面から出土しており、他の出土土器より後出のものと考えられる。

このように、この住居跡出土土器も縄文系列がほとんどを占め、大木7b段階にあると考えられる。

d) 37号住居跡（C類住居跡）

やはりC類の住居跡である。この住居跡でも隆帶系列の土器は全く認められない。前述の住居跡と同様縄VI系列の土器がここでも出土している（623）。また縄VII系列の土器（625）もある。626は大木7b段階に比定される土器と考えられる。また629は新崎式土器の文様構成である。口縁部に浅く爪形文が見られる。上記の他、明確な爪形文をもつ新崎式土器や鎖状隆帶をもつ土器等がある。

このようにこの住居跡出土土器も7b段階に留まる土器と考えられる。

e) 23号住居跡（C類住居跡）

C類の住居跡である。483は隆IIb系列波状口縁の土器である。隆帶は幅広くやや扁平な感じを与える。484も主要モチーフは高い隆帶であるが、それ以外は比較的深い沈線によっている。また渦巻文がやや幅広い隆帶によっている所も見受けられ、他の隆帶系土器と異った様相を示している。488も他に類例はあまり認められない。489も他に類例はないが、爪形文の使用、Y字状隆帶等から大木8a式段階以前の段階とみることができよう。

f) 43号住居跡（C類住居跡）

C類住居跡であるが中央に竪穴状のくぼみがあり、ほとんどの遺物はここから出土している。688のみややはざれで出土している。691は器形に類例がない。玉抱き三叉文の目立つて多いこと、下半部に縄文が施されている等興味深い土器である。692は三角形の印刻、口縁部にそった有筋沈線等古い技法をもった土器であり、大木7a新～7b古段階に比定できる土器である。689、698、695はいずれも胸部の張る土器である。689が最も大木系土器に近いと言える。大木7b段階に入るものと思われる。

このように当住居跡の土器は大木7a新～7b段階にかけての土器が認められるが時間幅があるようである。

g) 13号住居跡（A類住居跡）

A類竪穴住居跡である。302は大きな渦巻文を主要モチーフとする越後の文様をもった土器である。コイル状の環状把手が目立つ。また三叉文等がほとんど見られなくなる。一方297は隆帶を全く使用しておらず、沈線によっている。三叉文等はあまり認められない。304は阿玉台式土器である。おそらく阿玉台II式段階のものと考えられる。305は時期は明言できない。307は頸部に椭円区画を有している。無文帯である。椭円を区画する隆帶はあまりきれいではなく、少しだれた感じをもっている。

当住居跡の時期は、明確でない。

h) 21号住居跡（A類住居跡）

住居内にテラス状の段を有する特異な竪穴住居跡である。469は地文に縄文を有し、安定しない半隆起線で文様を描いているが稚拙な感じを与える土器である。470は焼町土器に近いもので曲隆線が密に施されている。一方471は沈線によっている。479は口縁部に隆帶による連弧文が見られる。このモチーフは大木8a式土器にまま認められるものである。478は類例がない。

この住居跡での時期はあまり明確でない。

i) 30号住居跡（A類住居跡）

レベル的には584～586、589が覆土上層から、588、590（？）が下層から出土している。もちろん下層が

縄文系列、上層が隆帯系列である。一般的傾向としては、納得のゆく出土状況と言える。

j) 7 B号住居跡（A類住居跡）

A類堅穴住居跡である。97は五丁歩遺跡の中でも最も越後的な文様構成をもつ土器である。すべての隆帯が断面カマボコ状を呈し渦巻も強い巻き込みをもっている。文様も密に施され玉抱き三叉文は見られない。一方98では、無文部が比較的あり、玉抱き三叉文等が充填される。99、103等も密に施されている。102は隆Ic系列の土器で、最も焼町土器に近い土器である。107、108については大木7b、8aいずれに並行するかは明確でない。隆帯系列の土器は、おそらく大木8a式並行期にあると考えられる。

k) 7 C号住居跡（A類住居跡）

A類堅穴住居跡である。121はやや問題となる土器である。器形はほぼ直線状に開く土器で隆Ib系列である。口縁部文様帶は継の集合太沈線でむらがある。下半隆帯には爪形文が付される。隆帯系列で爪形文の付される土器はあまり見られない。以下の文様は太い隆帯により文様を描いているが文様に方向性がなく安定していない。隆帯はY字状となるものもあり、渦巻状の接点には眼鏡状の把手が付く。また下半部には縄文が見られる。類例は見られないが、ここで福島県中江聖ノ宮遺跡出土土器と比較してみたい。まず文様構成は隆IIa系列で異なっている。口縁部には、いずれも半ひねりの加わった環状突起が4個付される。五丁歩のはコイル状となっている。下端隆帯に爪形文を付すのは共通する。口縁部及び胴部の文様は、渦巻を指向しながらもまだ安定しておらず企画性が見られない。五丁歩の土器には眼鏡状突起が見られ、中江聖ノ宮遺跡のそれにはボタン状の突起となる。以上のようにこの両者の土器にはかなり強い共通性を見出すことができる。また123は隆系であるが口縁部に無文の梢円区画が見られる。127は脚付きの特殊土器であり、本場の中部・関東地方でも知られない。文様等からは藤内式の範囲に入るものと思われる。133も幅のせまい梢円区画である。129は断面三角形の隆帯の使用等に古い要素を見ることができる。この他、やはり古手と思われる土器（125、126）等もある。

当住居跡出土土器は隆帯系は、古式と考えられる土器である。127の藤内式土器がはたして伴うのかどうかは、検討をする。

l) 8 A号住居跡（A類住居跡）

土器捨場の様相で一括資料ととらえることはできない。多くの土器が出土している。このうち163は小堅穴状遺跡の床面から出土している土器である。この土器はいわゆる渦巻文は用いられておらず、また無文部を多く残し、玉抱き三叉文等が見られる。これに伴ったと思われるのが180である。また178、177もほぼ同一レベルで出土している。164、165は163と同一文様をもつ土器である。167はコイル状の把手をもつ。173は口縁部梢円区画で文様構成は163と同様で隆Ib系列であるが、文様構成にはかなりの違いが見られる。173では全面を隆帯に添う沈線で充填している。玉抱き三叉文等は見られない。169は図示はされていないが眼鏡状把手をもつもので、扁平幅広隆帯と細く浅い沈線により文様を描いている。

以上のようにこの8A号住居跡の土器にはバラエティが多く2~3時期を区分できそうである。まず古いと思われるものが169、165で、新しいと思われるが163、164、166、167、173である。大木7b~8a式期にかけての土器である。

m) 9 B号住居跡（C類住居跡）

C類長方形の住居跡である。217は口縁部に大きな把手を有しており、口縁部文様帶にも福島県内で出土している火焰型土器と共通する文様をもっている。大木8a段階に入る土器と思われる。218は隆Ic系列であろうか。文様が密に施される。224は半隆起線による沈線文様であるが、他に類例がなくはっきりしない。

おおよそ当住居跡出土土器は大木8a段階に入るものと思われる。

n) 28号小フ拉斯コ状土坑

土坑上面で出土した一括土器である。710は渦巻文を最大限に用いた土器で文様構成も同一文様をくり返しており安定した感じを与えている。胴下半部はいわゆるコスモス状文である。711は口縁部に発達した環状把手を有する。710は天神山式並行と考えられ、また711は大木8a式並行と考えられる。

以上述べてきた各遺構出土状況を参考にしつつ編年を考えていきたい。

3) 出土土器の編年

前項で遺構出土土器の検討を行なったが、一括資料として良好なものはあまりない。ここでは遺構出土土器を目安として、五丁歩遺跡出土土器の編年を行なうこととした。分類した系列が多いため、それらの並行関係をつかむことは困難である。したがって細分はむずかしく、今回は前半期（I段階）、後半期（II段階）の2時期区分とする。およそ清水上I・IIにそれぞれ対応する。

前半期（第1段階）

中期初頭と考えられる土器及びそれ以前の土器は存在するが、それを除いて、集落を営んだと考えられる時期に限定する。前半期は縄文系列の土器がほとんどを占め、隆帯系列では隆IIIb系列があり、隆Ib系列も場合によっては前半期に入ってくる可能性もある。前半期と考えられる土器は隆Ibの一部、IIIb、縄I、IV、V、VI、VII、VIIIの一部、IXの一部、X、XIa、XIb、XII、勝坂式、阿玉台式土器がある。最も古いと思われる土器は縄VII系列の土器である。先端が三角形状を呈する波状口縁で波状部を中心にはば対称の文様構成をとる土器である。この中でも692は最もわかりやすく、大きな三角形印刻は、大木7a式、五領ヶ台II式等に特徴的である。また625、1144等の口縁部にそったキザミ等も当刻期に特徴的である。452、292等の胴部に見られる継の単純な沈線やY字状の沈線も当刻期に特徴的である。近辺では湯沢町岩原遺跡において五領ヶ台II式及び直後段階の土器が出土しており、五丁歩遺跡の土器は、その次段階にあるものと考えられる。次に信州地方のいわゆる斜行沈線文系土器と関連があると思われる土器（1313、975、960）がある。横円区画及び区画にそった小さい刺突列等に共通性が見出せる。次にくるのが縄VI系列の土器である。この系列は五丁歩遺跡では非常に特徴的である。大きな波状口縁で、器形的には、大木7a～7b式期に認められ、中部、関東、北陸方面には認められない。文様については、波頂部に共通性を見出せる。大木7b式の波状部では頂部に鎖状の沈線を刻む土器が多く認められる。五丁歩遺跡においても1003が鎖状の沈線をもっている。また小波状の隆帯のはり付けも特徴的である。46、47に見られる三叉文、玉抱き三叉文、胴部逆V字状の連續縦区画も大木7b式に共通である。235におけるY字状隆帯も大木7b式に共通する。1003では、胴部の文様帶に大木7b式の特徴をもつが、口縁部の渦巻文は幅広で舌状に近く、前述のものより新しい傾向をもっている。同様の波状口縁の土器に隆帯系のものもある。1256、169、623等がそれである。623は細かな刺突によって区画内を充満しており、このような細刺突の土器は長野県久保在家遺跡の土器にも一部認められる。1256、169については隆帯、渦巻文はあまり使われておらず、隆帯系列の中では古い部類に入るものと考えられる。

次に縄文I系列の土器であるが、これはいわゆる「新巣類型」と呼ばれている土器群である。当遺跡においては明確に時期判定できる土器との共伴を確認することができなかったが、長野県や群馬県の出土例から新道式段階にあることは、ほぼ間違いないところである。当遺跡でもかなりの出土数があり、安定

した出土状況を示している。この系列の土器については、いくつかの細分が可能である。一つは、沈線部にキザミを多用する土器(780, 966, 997, 1145等)と用いない土器(1055, 61, 1158等)とがあることである。そして、キザミを用いる方では、あまり渦巻文の文様は用いていないのに対し、キザミを用いない方はかなり大きな渦巻文を用いていることである。1259を典型例とし、群馬県三原田遺跡にも同類がある。ちなみに群馬県で出土しているこの系列の土器は平口縁(突起は付される)で、波状口縁は少ない。そして、ほとんどキザミは付されていない。一方、長野県では波状口縁が多く、キザミの付されるのがほとんどで、また渦巻文は、あまり用いられていない。このようなことから、波状口縁、キザミのあるものが古く、平口縁、キザミのないものより新しい傾向をもっていると言えないだろうか。県内で出土している山下、上の台、長峰遺跡等の波状口縁の土器は、いずれも沈線部にキザミを用いている。一方纏文を用いない縄IIIb系列であるが、このうち236, 491は新巻類型とされる土器であろうが、他については眼鏡状把手、舌状隆帯等あまり明確でない。しかし無文部を多く残している点、曲隆線的文様があまり用いられていない点からすると、「新巻類型」とほぼ同時期におくことができよう。次に縄IIIa系列の土器であるが、この系列の土器の中で1142, 51, 1318等も「新巻類型」の範囲でとらえられる土器である。これらについては長野県久保在家遺跡出土土器との強い関連性は前述のとおりである。他の165, 848, 1147, 589については類例がなく、判断材料をもち得ないが、ほぼ同時期のものと考えられる。次に縄IV系列であるが、類例が少なくむずかしいが、441は、口縁部横円区画で胴部にはU字状の沈線が用いられていること、頸部の隆帯が断面三角形であること等から大木7b式段階にあるものと考えられる。また7A号住居跡においては、前述の土器群と共に伴ったと思われる。531については、胴部に文様が施されていない。344は有節沈線により文様を描いているものである。これら2者はおよそ同時期と考えられる。

縄V系列の土器は、北陸のいわゆる新崎式土器の文様構成と共通のもの(866, 978, 532, 629)とそうでないもの(869, 867, 730, 607, 489)がある。前者では波状口縁の土器が県内では特徴的であり、清水上遺跡における越後系土器成立に大きく関与したと思われる土器である。この五丁歩遺跡においては、北陸系のいわゆる新崎式系土器の出土は少なく、同時期とされる清水上遺跡とは、大きな対称をなしている。しかし浅鉢に関しては、ほとんど北陸系である。

次に縄VI系列であるが、533, 751, 1043等が件出例から、前半期に入るものと思われる。縄IX系列の土器も分類は文様の一要素にしかすぎない。757, 758は類似の土器であるが、出土している26-C, D区は、いずれも新道段階の土器であることから、この2つの土器は前半期の土器と考えられる。632も37号住居跡共伴例から前半期に入ると思われる。縄X系列は類例が少ない。979については出土した27-F区の土器がいずれも前半期に属していることから、前半期の土器と考えられる。縄XIa系列については、遺構における他系列の土器との共伴関係が明確でない。文様で比較するなら、まず口縁部に発達した突起等が見あたらないこと。口縁部文様帶では、945のように沈線のみによる文様や1278のような三角形印刻、胴部文様では縄沈線を基本とするが、途中で切れて短くはねる文様となっている等大木7b式と共通の特徴をもっており前半期に入ると考えられる。縄Xlb系列の土器は微隆起線を用いた文様区画で大木7b式に特徴的である。また1331, 1272のように口縁部に無文帶では横円区画をもっている等、いずれも古い要素をもっている。縄XI系列では、242等があるが、前記と同様大木7b式の要素をもっているものである。縄XII系列の土器では、細い横円区画を特徴としているが、これも大木7b式のメルクマールとしてかなり有効なものである。これら縄XIa, Xlb, XII, XIII系列の土器の文様要素は各々組み合せられる場合が多くある。縄XIV系列の土器は前半期にはないと考えられる。その他前記分類にあてはまらない土器では43, 633, 129, 175, 698等が前半

期に入ってくるものと考えられる。

勝坂式土器では、完形品はあまり認められないが、文様要素から言えば、新道式土器の特徴をもっており、229は、10A号住居跡に見るように大木7b式段階と共伴関係にあったと考えられ、これら新道式土器は前半期の土器と思われる。次に阿玉台式土器も、複列の列点刺突や横円区画、Y字状隆帯等、阿玉台II式の特徴をもった土器がほとんどである。遺構での他系列との共伴関係はないが、三原田遺跡、房谷戸遺跡等の新道式土器との共伴例から、前半期に入るものと考えられる。以上のように前半期の土器は、編年表案のように、大木7b式段階にあり、これにいわゆる新巻類型、新崎式、駿沢式、新道式、阿玉台II式土器あたりが並行関係にくるものと思われる。

後半期（第II段階）

後半期に入るとと思われる土器には、隆Ib、Ic、IIa、IIb、IIIa系列の一部、IV、V系列、縄IIa、III系列の一部、縄IX系列の一部、VI系列等があるが、隆帯系列が多くなることが特徴である。

まず隆Ib系列であるが、遺構による伴出例を見ると前半期の土器と伴うのと、後半期に伴うのと両方があるが、いずれも覆土の出土であるため、確実なことは言えない。前述のように7C号住居跡の121の土器については、文様に類似が認められず口縁部等に古い要素を残していることから前半期に入る可能性が高い。その他は共通的な文様要素をもっている土器が多い。特徴的のは、やや幅広の無文帶部の両端に交互三角形印刻を施し、中央に円形刺突をもつ文様である。この文様は他の隆IIa系列や縄II系列にも広く用いられている。前記121を除いた他の隆Ib系列の土器については、一応後半期の土器としておく。隆Ic系列の土器は、後半期のみと思われる。完形品は見られないが、文様が密に施される土器がほとんどである。次に隆IIa系列の土器であるが、胴部の明確な土器は少ない。口縁部文様では、539のように幅広の太い隆帯の見られるものと、302、633のように渦巻文を中心とした文様をもつものと48、60のように三角形区画をもつものとがある。これらは時期的変遷を示すものと考えられるが、遺構ではとらえることがきかない。隆IIb系列もみな後半期の土器と考えられる。この系列の土器では、隆Ib系列に特徴的な文様は、ほとんど認められない。隆Ic系列と同様に文様が密に施される土器が多い。

次に隆IIIa系列では、488、167等が後半期に入るものと思われる。2個体共胴部の張る器形となる。隆IIIb系列は前半期のみで、後半期には認められない。隆IV系列は、217、1192を代表とするが、大きな渦巻文や把手等大木8a式的な要素をもっている。隆V系列の土器も数少ないが4点共文様構成が異なっている。この系列の文様構成は信州焼町類型に多く認められ、新巻類型より後出であることから、後半期に入るものと思われる。

その他隆帶系列では1155、947等は器形、文様構成等は異なるものの、勝坂式土器（藤内I式）の縱割り区画に共通性が認められる。

次に縄文系列であるが、縄I系列は前半期のみで後半期には認められない。しかし大きくS字状の文様を描く1259、1347等は、後半期に下る可能性がないわけではない。縄II系列の土器も特徴ある土器である。口縁部に文様帶をもつてながら、胴部が縄文のみの土器は東北地方にも類似は少なく、これも地域性をあらわしている。口縁部文様にはバラエティがあり、新旧の差があるものと考えられるが、住居跡出土例では、隆Ib、IIb系列等と出土していることから、後半期に入るものと考えられる。縄IV系列についても東北地方に見られる有節沈線をもつた土器とは文様構成等かなり違いが認められ、比較はできない。588の土器は30号住居跡において隆帶系の土器より下層で出土していることから、前半期に入る可能性もある。縄

第135図 出土土器断年模式図(1)

階IV	階V		周I	周II	周III	周IV	周V
			 967	 537		 869	
			 780	 997	 44	 865	
			 1145	 966	 531	 978	
			 745		 344	 532	
			 1055	 1158		 607	
			 1347	 1151		 598	
			 1259		 1259	 629	
					 133	 489	
				 1155	 180		
			 695	 439	 179		
			 217	 1192	 177		
			 1323	 947	 108		
			 1244	 944	 222		
				 59	 711	 1238	
				 471	 1036		

周I・II各区分内における範例は、年代順を表わすものでない。

五丁步	南道	唐水上	圆董	东北	周VI	周VII	周VIII	周IX	周X	周XI a	周XI b
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											
											

第136図 出土土器綱年模式図(2)

図 I・日区分内における統列は、年代順を表わすものでない。

第 I・II区分内における算列は、年代順を表わすものでない。

6まとめ

V系列は後半期にはなくなるものと思われる。また縄VI、VII系列も後半期には消滅する。縄VII系列の土器では明確に後半期に入ると思われる土器はないが、166が8号住居跡において出土しており、後半期に入る可能性がある。縄XIa系列でも同様であるが、住居跡出土例からすると224等が後半期に入るであろうか。縄XIb系列は、後半期には認められない。縄III、IV系列の土器についても後半期には認められない。縄XM系列については、文様構成バラエティがある。1327、53については口縁部文様帯等に古い要素があり、前半期に入る可能性もある。また、1223は縦区画を基本としており、クランク文様というよりも、むしろ、勝坂式のパネル区画に共通している。それ以外については、クランク文様で大木8a式や三原田式に共通する。

これらの他分類系列に入らない土器では、176、178、479、478、107、493等が後半期の土器と考えられる。勝坂式土器では、藤内式に入ると思われるものに127の脚付土器がある。阿玉台式土器については、明確でない。

以上後半期の土器について概略を述べたが遺構一括等良好資料が不足なため細分はできなかった。隆帶系列等をみると3段階くらいには細分できそうであるが、時期的には、「焼町土器」「藤内式土器」「上山田式土器」の時期である。大木式土器については、あまり比較する材料がない。大木8a段階を含むことは明確であるが、この後半期が大木7b式とのどの段階までさかのぼるかは不明。おそらく、大木7b段階を含んでいるものと考えられる。以上を表にすると以下のようなようになろう。

表89 出土土器編年対比表

五 丁 歩	関東・中部高地	北 陸	東 北	清水上
I	7A号住 10A号住 27号住 37号住	霧 沢 新 道	崎	大木7b
II	7C号住 8A号住 9B号住	藤 内	上 山 田	大木8a

4) 「新巻類型」「焼町類型」と五丁歩遺跡の土器について

「新巻類型」及び「焼町類型」の土器については、最近とみに注目されてきた土器である。この五丁歩遺跡においても、関連が深いと思われる土器が多く出土している。両類型共にはば共通の分布を示していることは、すでに指摘されているところである。「新巻類型」については、新道式段階に来るであろうことは発掘資料等からほぼ間違いないところである。分布については、群馬、長野両県であったが、この新潟県にも分布していることが明らかとなった。しかし、出土資料がまだ少なく、その出自変遷(文様等見る限り細分は可能と考えられる)をつかむまでは至っていない。

次に「焼町類型」との比較であるが、文様構成等で類似するのは、隆Ic系列、V系列の2つで、他は文様構成に大きな違いが見られ、「焼町類型」と分離すべきものと考えられる。もし、これを「焼町類型」に組み入れるならば、馬高式土器と呼ばれる火焰型土器のグループ、北陸地方の上山田式、天神山式土器等も含めて考えなくてはならなくなる。ただ、「焼町類型」に類似とした隆Ic、V系列の土器も隆帶等多分に越後的であり、在地で作られたことは明らかである。

さて、各系列の土器で分析したように隆Ib、IIa、IIb系列の土器は、五丁歩遺跡で非常に特徴的であり、馬高式土器とも分離すべきものと考えられるが、厳密に追っていくと、北陸の上山田、天神山式土器、火焰型土器、「焼町類型」と区別、分離ができない土器も多く存在することも事実である。「焼町土器」の分布は、群馬県、長野県東部、中部にあるが、北信がどのような状況にあるかは、いまだ不明である。しかし、最近の北信の資料(寺内1991)等を見ると、越後の(五丁歩)な土器もあり、場合によっては、北信では別の地域色を呈していた可能性もある。北信では「深沢遺跡の土器」がどのように展開するのかがカギをにぎっていると言えよう。新潟県及び福島県にかけては、火焰型土器、王冠型土器を代表とする馬高式土器が分布する。これらの土器は、鶴頭冠、抉りのある波状口縁の土器を特徴としているが、その他にも隆帶系の土器が多く存在する。火焰型土器、王冠型土器は基本的な文様構成は隆IIb系列にあり、中下越方面の土器もこの系列の土器である。したがってこの系列は馬高式土器と共有されていると言える。隆IIa系列の土器は意外と福島県方面に多



第137図 「新巻類型」土器主要出土遺跡分布図



第138図 土器分布図

く認められるが、この系列の文様分帯は、大木7b式土器と一致しているので、東北的な割り付けということができるかもしれない。隆Ib系列は、どちらかといえば、北陸地方に共通の分帯意識をもっている。このように「五丁歩式」「五丁歩類型」を提唱するにはあまりに複雑であり、今回はひかえておきたい。このように五丁歩遺跡の土器は単純ではなく、いろいろな要素が組み合わされて成立していることがわかる。

さて、これらの土器の成立であるが、明確な答えは得られない。共通的な文様要素をもつ、北陸の上山田、天神山式、続町土器、馬高式土器等はほぼ同時に発生、成立したものと考えられる。深沢遺跡の土器等北信の土器を見ると、当地の土器がこれら隆帶系の土器の成立に大きく関与したものではないかと思われ、大変気になるところである。五丁歩遺跡の土器を見る限り、明確にその変遷を追えるような資料はない。隆帶系列とした中で、I段階としたものは、隆IIIa、IIIb系列である。繩文用いない土器は、前期及び五領ケ台式期から連続的に存在するが隆IIIb系列は、それらの延長線上にあると考えられる。この隆IIIb系列では無文部を多く残す土器が主流を占める。そして隆IIIa系列では、その無文部に細沈線等が充填されるようになる。そして渦巻文の採用から、隆帶にそった隆起線や沈線で充填されるようになり隆I・II系列が成立してくるのではないかと考えられる。この隆帶系列の中で第一段階としてものは、猪沢、新道段階と考えられ、東北では大木7b式段階と併行関係にあると思われる。そして第II段階は信州の藤内式段階であるが、東北地方では先述のようにあまり明確ではない。しかし、福島県中江聖ノ宮遺跡等からみて、大木7b段階で隆帶系の土器が成立していたことは間違いないところである。

以上概略的に土器の分析を行なってきたが、その様相はあまりに複雑であり、ほとんど消化しきれなかつたというところが現状である。なぜこのように複雑な様相を呈しているのか。土器の文様は地域性をよく表わしており、人の動きそのものが反映されるものであるが、この遺跡の性格をそのまま反映しているのであろうか。環状集落は、その答えにはならない。五丁歩遺跡と共通な土器の分布を見ると、新潟、群馬、長野県境にそびえる標高1000m級の山々の山麓に分布していることがわかる。すなわち、その山麓で人の動き、情報交換があったのである。具体的な説明はできないが、繩文時代といえども、生活のパターン、食生活、風俗、習慣は地域により異なっていたと考えられ、五丁歩のような山間地と、馬高遺跡等の平野部では、かなりの違いがあったものと思われる。したがって、彼らの行動(移動)する範囲にも地域性があらわれていたであろう。五丁歩遺跡の土器は同じ水系にある清水上遺跡とは同時期でありながら全く様相が異っており、むしろ、群馬、長野県等に近い。このことは、五丁歩の人たちの交流が、下流平野部ではなく、山間地の人との交流(移動も含め)であったことを示しているのである。五丁歩遺跡の土器を見ると、今まで見たことのない土器が多く存在する。平野部における土器の安定した在り方と対称をなしている。発掘資料がまだまだ少なく、五丁歩遺跡の土器の解釈は今はできないが、今後の課題の一つである。(1991.3.25)

C 石器について

第4章第4節Bでは石器器種・石製品・剝片類・石核・自然礫類の分類・分析を通して、それらの諸特徴や一般的傾向を明らかにした。石器は土器と違いそれ自体で時期を判断できるものは少ない。しかし、器種分類や出土地点での検討の余地も多く不充分であるが、これらの多くは、伴出土器から中期前業の集落の石器様相を示しているといえよう。ここでは、これらの結果をふまえ、五丁歩遺跡での特徴的な石器の検討、出土石器全体の検討、他遺跡の石器との比較検討等を行ない、その成果と問題点、今後の課題等を明らかにしたい。

1) 板状石器

1034点出土の板状石器は、石器組成の17.2%を占め、本遺跡の石器組成、ひいては生産活動を考えるうえで、極めて重要な位置にある。また、多くの原石・素材・未成品も出土している。しかし、板状石器についての研究は、出土が地域的に限られるためかほとんど行なわれていなかった。以下、製作工程・分布・時期・用途について考えてみたい。

製作工程及び廃棄までの流れ 表90参照。完形品・原石・素材・未成品、また使用痕・完形品の大型品・小型品から、次のような製作工程及び廃棄までの流れが想定される。

第1段階 原石獲得段階である。石材はそのほとんどが泥板岩であることから、扁平な泥板岩が採集された。採集地は、大量出土から、他地域からの搬入ではなく、身近に入手できる所（具体的には魚野川）と考えられる。ただ、完形品に比べ、原石・素材がやや少ないとことから、原石採集地で多くは未成品・成品にして搬入したと推定される。原石は、大きさにより4分される。

第2段階 素材作出段階（一次加工）で、完成品に適した大きさの素材を得る段階である。完成品の大きさに適した原石は加工する必要はないが、厚すぎるものは板状剝離により分割され、また長さ・幅が大きすぎるものは主に折断により分割された。当然のことながら、一次加工での素材が薄すぎるもの、長さ・幅が小さすぎるものは廃棄される。

第3段階 刃部作出段階（二次加工）である。得られた素材の周縁に急角度剝離¹⁾の二次加工を加えられ、刃部が作り出される。二次加工はまだ全周していない。

第4段階 完成品の段階である。完成品は、二次加工が全周するため、円形・橢円形のものが一般的であるが、素材の形状により、半円（橢円）形・三角形・不整形になるものもある。

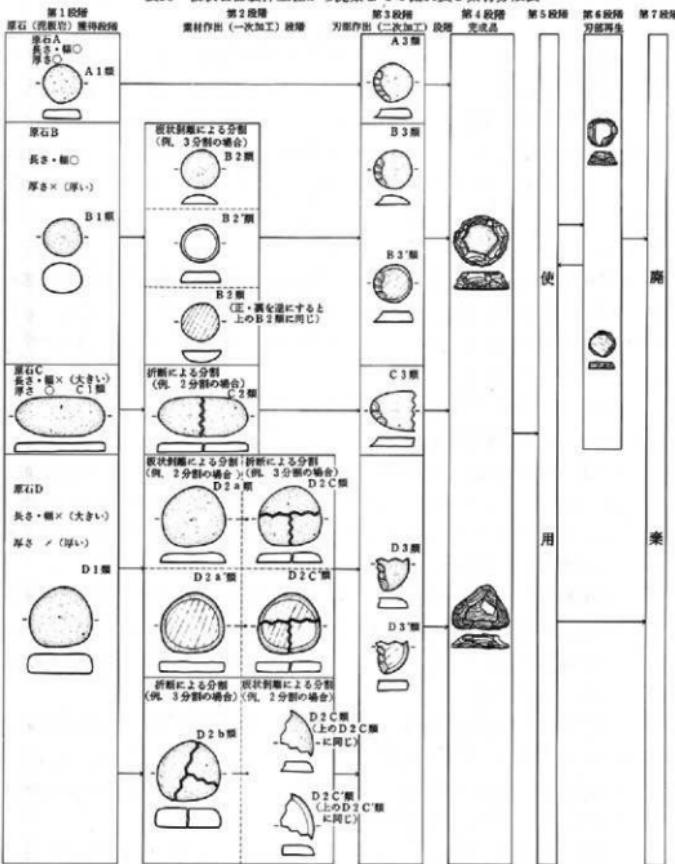
第5段階 使用の段階である。使用痕より裏面と周縁が主に使われ、正面は使われなかつたことは明らかである。

第6段階 刃部再生段階である。使用の結果、周縁が鈍くなつたものは、再度、急角度剝離の二次加工が施され、刃部再生が行われる。第5段階・第6段階がくり返されるが、出土板状石器には大型品もあること、使用痕が顕著でないものも出土することなどから、それ程使用されず、刃部の再生も行なわれず廃棄されたものがあったと推定される。

第7段階 廃棄の段階である。周縁が鈍くなり、使用に耐えないもの、刃部再生不可能なもの（小型品）は廃棄される。当然のことながら、刃部再生時の失敗作や使いづらいものも廃棄される。廃棄場所は環状集落及びその外側で他器種の廃棄と相連するものではない。また、特殊な棄られ方や埋納等を示すものは

1) 石材が板状に剝離しやすい性質上、浅角度剝離は難しい。

表90 板状石器製作工程から完成までの流れ及び素材分類表



存在しなかった。

分布 第139図・表91・92参照。板状石器及び類似品については、日本海側は富山県以北から、太平洋側は関東地方以北から青森県まで分布する。しかし、本県西部の寺地遺跡や富山県境A遺跡の円盤形石器などや福島県中通り地方から関東地方にかけて出土する円盤状石製品はほとんどが研磨痕を有したり、また沈刻の施されたりするものがあるなど本遺跡から出土する板状石器とは、形や石材がやや軟質であるなどの点は近似するが、加工において大いに異なり、別の器種と推定される。一方、青森県・秋田県・岩手県を中心に分布する円盤(板)状石製品は、打製のもの、磨製のもの、片面加工のもの、両面加工のもの、沈刻のあるもの(岩版?)、有孔のものなど多様な形態も含まれているため、充分な比較はできない。しかし、本遺跡で出土したような打製の片面加工で断面形が台形のものもある程度存在する。素材や石材については、扁平錐でやや軟質の石材(泥板岩・粘板岩・凝灰岩など)を利用する点で近似する。



第139図 板状石器及び類似品出土分布図

したがって、本遺跡で出土したような板状石器の分布については、形状・加工・使用痕等から詳細に検討すべきものと思われるが現在のところ本県西部・石川県・岐阜県・長野県・群馬県・栃木県・茨城県・福島県東部及びそれ以南からの出土例を見ないことから、日本海側では本県中部（中越地方）以北と福島県会津地方以北と考えたい。北限については、前述のように、秋田県・青森県・岩手県を中心に出土する円盤状石製品との区別が出来ないことから不明である。なお、北海道からは、円盤状石製品も出土していない。つまり現段階の板状石器の確実な分布は本県中越地方から福島県会津地方であるが、それ以北は今後の課題である。

時期 表91・92参照。県内出土の板状石器の例から、現在のところ、前期・中期初頭に遡る遺跡は存在しない。確実に出現するのは、本遺跡や清水上遺跡、布場平D遺跡（佐藤1985）から、中期前葉と考えられる。その存続については、藤橋遺跡（中村1966、駒形・寺崎1977）から晩期中・後葉（大洞A式期）頃と推定される。

なお、東北地方で多出する円盤状石製品については、「…前期前半…量的には縄文時代中期後葉～晩期…」（佐々木1988）とあるように、県内出土の板状石器より早く出現するようであるが、その存続はほぼ同時期

表91 板状石器及び類似品出土地一覧表(1)

新潟県(板状石器)

番 号	遺 跡 名	主 体 と な る 時 期								出土数	主な石材	備 考	文 献
		前 期	中 期	後 期	晚 期	不	前半	後半	前半				
1	北平B	-----	-----	-----	-----	-----	2	渡	板	岩	岩	田中(1983)	中村(1986)
2	高森	-----	-----	-----	-----	-----	1	浅	山	岩	岩	中村(1986)	中村(1986)
3	三十番場	-----	-----	-----	-----	-----	200以上	泥	板	岩	岩	中村(1986)	中村(1986)
4	藤崎	-----	-----	-----	-----	-----	数百	泥	板	岩	岩	中村(1986)	中村(1986)
5	物野原	-----	-----	-----	-----	-----	約500	真	板	岩	岩	後尾集落に限られ、中居集落は出土せず	後尾・中村(1981)
6	上越松	-----	-----	-----	-----	-----	4	泥	板	岩	岩	中村(1970)	中村(1970)
7	下久保	-----	-----	-----	-----	-----	16	粘	板	岩	岩	中村(1957)	中村(1957)
8	城之原	-----	-----	-----	-----	-----	3	空	板	岩	岩	藤崎・田中(1991)	藤崎(1991)
9	古越平D	-----	-----	-----	-----	-----	3	砂	板	岩	岩	住居跡より出土	住居跡(1980)
10	水上	-----	-----	-----	-----	-----	106	砂	板	岩	岩	高森(1990)	高森(1990)
11	馬島	-----	-----	-----	-----	-----	○	1	?	?	?	帆文等で「三脚石器」 古神川史跡委員会 とあり	古神川史跡委員会 (1980)
12	? (大神村)	-----	-----	-----	-----	-----	○	4	?	?	?	古神川川東地区より 出土	古神川史跡委員会 (1980)
13	釋迦新田下原A	-----	-----	-----	-----	-----	6	板	板	岩	岩	山内(1987)	新潟県(1983)
14	上ノ台II	-----	-----	-----	-----	-----	8	?	?	?	?	山内(1987)	新潟県(1983)
15	万葉寺跡	-----	-----	-----	-----	-----	7	硬	質	板	岩	内1点は中間階の 住居跡より出土	山内(1988)
16	大原	-----	-----	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	佐々木(1989)	佐々木(1989)
17	原	-----	-----	-----	-----	-----	2	?	?	?	?	佐藤(1989)	佐藤(1989)
18	五丁歩	-----	-----	-----	-----	-----	887	泥	板	岩	岩	他に原石・素材・未 製品出土	山内(1986)
19	川久保	-----	-----	-----	-----	-----	4	粘	板	岩	岩	原石の理由書による 鳥居橋久氏開示による とよ	鳥居橋久氏開示による (1986)
20	船山	-----	-----	-----	-----	-----	7	?	?	?	?	佐藤(1989)	佐藤(1989)
21	栗原	-----	-----	-----	-----	-----	数点	?	?	?	?	佐藤(1989)	佐藤(1989)
22	林中	-----	-----	-----	-----	-----	6	真	板	岩	岩	表揮	佐藤(1989)
23	上小原	-----	-----	-----	-----	-----	1	真	板	岩	岩	佐藤(1989)	佐藤(1989)
24	大久保	-----	-----	-----	-----	-----	2	真	板	岩	岩	佐藤(1989)	佐藤(1989)
25	向原II	-----	-----	-----	-----	-----	1	真	板	岩	岩	佐藤(1989)	佐藤(1989)
26	西原	-----	-----	-----	-----	-----	1	粘	板	岩	岩	高森(1988)	高森(1988)
27	栗田	-----	-----	-----	-----	-----	数点	?	?	?	?	栗田(1990)	栗田(1990)
28	下村A	-----	-----	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	佐藤(1989)	佐藤(1989)

福島県(板状石器)

39	磐梯南	-----	-----	-----	-----	-----	○	○	9	?	?	芳賀(1987)掲引き
40	勝負沢	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	73	底	板	芳賀(1987)
41	中江原の宮	-----	-----	-----	-----	-----	○	○	9	?	?	芳賀(1987)
42	神毛	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	?	?	?	芳賀(1987)掲引き
43	佐渡銀	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	?	?	?	芳賀(1987)掲引き

青森県(円盤状石製品)

34	風向2	-----	-----	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	すべて研磨	山道(1974)
35	近野	-----	-----	-----	-----	-----	8	板	板	岩	岩	他に有刃石製品25点 り、周辺研磨あり	一曲(1980)
36	大石平	-----	-----	-----	-----	-----	54	板	板	岩	岩	山道(1980)	山道(1980)
37	神牛	-----	-----	-----	-----	-----	2	?	?	?	?	他全面または表面研 磨された冠幅10.9点	山道(1980)
38	一ノ瀬	-----	-----	-----	-----	-----	1	板	板	岩	岩	山道(1980)	山道(1980)
39	藍蘿	-----	-----	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	研磨	小林原(1987)
40	八幡	-----	-----	-----	-----	-----	3	山	山	板	岩	周縁研磨あり	白川(1989)
41	西川牧廻	-----	-----	-----	-----	-----	13	板	板	岩	岩	周縁研磨あり	南雲(1978)
42	島川中村	-----	-----	-----	-----	-----	6	?	?	?	?	周縁加工	山田(1980)
43	外兵張	-----	-----	-----	-----	-----	1	砂	砂	板	岩	周縁加工	山田(1980)
44	御の上	-----	-----	-----	-----	-----	2	砂	板	板	岩	周縁加工・研磨あり	山田(1980)
45	石ノ庭2	-----	-----	-----	-----	-----	1	板	板	岩	岩	山田(1984)	山田(1984)

岩手県(円盤状石製品)

46	火打敷田	-----	-----	-----	-----	-----	2	泥	板	岩	岩	火打(1982)	火打(1982)
47	佐原敷田	-----	-----	-----	-----	-----	4	板	板	岩	岩	周縁加工	佐原敷田(1983)
48	君成田	-----	-----	-----	-----	-----	5	板	板	岩	岩	研磨あり	君成田(1982)
49	馬立日遺跡	-----	-----	-----	-----	-----	17	板	板	岩	岩	研磨あり	馬立日(1980)
50	御坂山	-----	-----	-----	-----	-----	1	板	板	岩	岩	研磨あり	中川(1987)
51	三浦	-----	-----	-----	-----	-----	7	板	板	岩	岩	研磨あり、沈割あり?	中川(1987)
52	鏡久保田	-----	-----	-----	-----	-----	2	?	?	?	?	周縁研磨あり	山道(1980)
53	青ノ久保	-----	-----	-----	-----	-----	981	板	板	岩	岩	周縁1点あり	山道(1980)
54	小井田III	-----	-----	-----	-----	-----	95	板	板	岩	岩	1点は研磨あり	工場(1982)
55	五城田	-----	-----	-----	-----	-----	2511	真	板	岩	岩	研磨あり	三澤(1983)
56	木津	-----	-----	-----	-----	-----	3	板	板	岩	岩	研磨あり、沈割3%	金木(1986)
57	御田I	-----	-----	-----	-----	-----	69	泥	板	岩	岩	周縁加工が多い	山道(1984)
58	御田	-----	-----	-----	-----	-----	6	板	板	岩	岩	研磨あり	山道(1984)
59	堂+沢	-----	-----	-----	-----	-----	31	砂	板	岩	岩	周縁加工あり	山道(1980)
60	酒沢	-----	-----	-----	-----	-----	1	板	板	岩	岩	周縁1点あり	山道(1980)
61	手代森	-----	-----	-----	-----	-----	15	板	板	岩	岩	周縁1点あり	山道(1980)
62	大明神	-----	-----	-----	-----	-----	17	板	板	岩	岩	周縁1点あり	山道(1980)
63	愛媛屋敷	-----	-----	-----	-----	-----	20	板	板	岩	岩	周縁2点あり	山道(1989)
64	西田	-----	-----	-----	-----	-----	5	板	板	岩	岩	2点は研磨あり	山道(1984)
65	鬼網西	-----	-----	-----	-----	-----	309	砾	石	安	山	周縁(1982)	周縁(1982)
66	鬼網北区	-----	-----	-----	-----	-----							
67	寺前1	-----	-----	-----	-----	-----							
68	寺前II	-----	-----	-----	-----	-----							
69	片地家原	-----	-----	-----	-----	-----							
117	川門	-----	-----	-----	-----	-----							
118	鬼網裏	-----	-----	-----	-----	-----							

*岩手県の分布等考査は佐々木(1980)がより詳細である。

表92 板状石器及び類似品出土地一覧表(2)

秋田県(円盤状石製品)

番 号	遺 跡 名	主 体 と な る 時 期							出土数	主な石材	備 考	文 献
		前 期	中 期	後 期	晚 期	不	期	前半				
70	合合1	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	黒 灰、岩	研磨あり	本川(1984)	
71	大房1	-----	-----	-----	-----	-----	-----	23	山砂岩、粘土岩	研磨あり	大宮(1984)	
72	はりま館	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	白、灰岩	研磨・尖端あり	仙田(1994)	
73	高原原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	7	黒灰岩・砂岩	穿孔点あり	小畠(1990)	
74	高原四日	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	黒 灰、岩	研磨あり	仙田(1982)	
75	欠番	-----	-----	-----	-----	-----	-----	10	黒灰岩・泥岩	側面削磨2。肩磨少	知泉(1990)	
76	脚踏台C	-----	-----	-----	-----	-----	-----	37	?	研磨なし。	宮内(1979)	
77	塚ノ下	-----	-----	-----	-----	-----	-----	113	黒 灰、岩	研磨あり、両面加工	小畠(1988)	
78	上ノ山1	-----	-----	-----	-----	-----	-----	11	黒灰岩・石英岩	両面加工あり	高橋(1990)	
79	上ノ山II	-----	-----	-----	-----	-----	-----	8	?	研磨あり	高橋(1990)	
80	森神	-----	-----	-----	-----	-----	-----	7	黒灰岩・安山岩	片面加工	庄内(1981)	
81	電毛沢遺跡	-----	-----	-----	-----	-----	-----	3	灰 山 石	片面加工	能登島(1990)	
82	上野原中学校	-----	-----	-----	-----	-----	-----	2	?	両面加工あり	曾澤(1985)	
83	電毛沢	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	?	全周削す。肩平隠	高橋(1980)	
84	上ノ山II	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1550	黒 灰、岩	研磨	高橋(1990)	
85	才の神	-----	-----	-----	-----	-----	6以上	?	?	周縁研磨38点	高橋(1990)	
86	下田谷谷	-----	-----	-----	-----	-----	-----	12	?	?	高橋(1990)	
87	東家清水	-----	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	?	高橋(1990)	
88	八重	-----	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	?	小木(1982)	
89	平鹿	-----	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	?	宮内(1988)	
90	鶴羽子沢	-----	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	?	鶴木(1982)	
91	上谷地中	-----	-----	-----	-----	-----	-----	?	?	?	鶴木(1982)	

宮城県(円盤状石製品)

92	田納貝塚	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	閃 灰、ひん 砂岩	研磨あり	北木(1986)
93	喜ノ木	-----	-----	-----	-----	-----	-----	3	灰 山 石	?	北木(1985)
94	六尻田	-----	-----	-----	-----	-----	4	?	?	?	田中(1981)
95	金剛寺	-----	-----	-----	-----	-----	1	石英安山岩	?	小川(1980)	
96	金剛寺	-----	-----	-----	-----	-----	2	?	?	?	能登島(1984)
97	青牛山	-----	-----	-----	-----	-----	3	?	?	?	鶴木(1982)
98	太陽川	-----	-----	-----	-----	-----	4	砂岩・隕石岩	研磨あり	鶴木(1982)	

福島県(円盤状石製品)

99	中里田B	-----	○	1	?	?	?	?	?	?	?
100	多名塚	-----	○	1	?	?	?	?	?	?	?

山形県(円盤状石製品)

101	高山	-----	-----	-----	2	?	?	?	?	?	?
102	高根	-----	-----	-----	11	?	?	?	?	?	?
103	砂田A	-----	-----	-----	6	?	?	?	?	?	?
104	源の神	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	?	?

新潟県(円盤状石製品・磨製板状石製品)

105	網山	-----	-----	-----	3	?	?	?	?	?	?
106	等地	-----	-----	-----	7	?	?	?	?	?	?

富山県(磨製板状石製品)

107	猪A	-----	-----	-----	18	?	?	?	?	?	?
108	十三塚	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	?	?

栃木県(磨製板状石製品)

109	二ヶ山	-----	-----	-----	2	?	?	?	?	?	?
110	御坂田	-----	-----	-----	7	?	?	?	?	?	?

埼玉県(磨製板状石製品)

111	裏手谷	-----	-----	-----	4	?	?	?	?	?	?
112	小深作	-----	-----	-----	2	?	?	?	?	?	?
113	片柳南部	-----	-----	-----	2	?	?	?	?	?	?
114	源貝北	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	?	?

東京都(磨製板状石製品)

115	No.3	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	?	?
116	中台貝塚	-----	-----	-----	1	?	?	?	?	?	?

といえよう。

出土量 表91・92参照。1遺跡からの出土量は、各遺跡でムラなく出土するものではなく、大量に出土する遺跡、極めて少ない遺跡が存在する。発掘調査規模によるが、県内では他器種に比べ多い出土を示すのは、本遺跡(887点)・三十塚遺跡(200点以上)(中村1966)、藤橋遺跡数百点(中村1966)、岩野原遺跡の後期集落(駒形・寺崎1981)約500点、清水上遺跡106点、一方遺跡の規模や他器種の出土量の割りに少ない出土の遺跡は馬高遺跡1点(中村1966)、岩野原遺跡の中期集落0点(駒形・寺崎1981)、城之脇遺跡16点(藤巻1991)、柳古新田下原A遺跡7点(池田1987)、万條寺林遺跡7点(池田1988)など当然多量の出土も考えられる地域・時期であるにもかかわらず少量の出土である。

しかし、馬高遺跡（中期中葉）に隣接する三十稻場遺跡（中期末葉～後期初頭）、岩野原遺跡の中期集落と後期集落の出土量の違いから、長岡市周辺の遺跡では中期末以降の大量出土という地域的・時期的な要因も考えられなくもないが、出土量も多少はあるにせよ、中期前半以降、板状石器が継続的に出土することを考えると、各遺跡の性格によるものと考えられる。それは板状石器が本遺跡や清水上遺跡・城之腰遺跡・福島県中江聖の宮遺跡の例¹⁾から、裏面や周縁に使用痕があり、実用品と考えられることからも裏付けられ、出土量の多少は各遺跡の性格つまり生業または生産形態の違いと考えられる。

なお、東北地方で多出する円盤状石製品についても、秋田県上ノ山I遺跡113点（小畠1988）・八木遺跡155点（高橋1989）・岩手県蔵内遺跡981点（工藤1982）、手代森遺跡2511点（佐々木1986）のように、多出する遺跡とそうでない遺跡が存在する。

用途 板状石器の使用痕は、石材がやや軟質で風化しやすいためか報告書に記述されることは少なかった。しかし、本遺跡では裏面の磨耗や周縁の微細剝離・磨耗が多数認められ、清水上遺跡では主に裏面の磨耗、城之腰遺跡では裏面の磨耗や周縁の微細剝離が、福島県中江聖の宮遺跡（芳賀1987）では裏面の磨耗²⁾が認められている。したがって、板状石器は裏面や周縁を対象物に接し、使用されたものと考えられる。また、使用痕や出土数、廃棄のされ方（出土分布）などから、実用品と推定される。

また、前述したことのくり返しにもなるが次のことも用途を考える上で重要である。

○形状から、裏面が平板状または周縁付近で若干湾曲する程度の扁平であること、周縁は急角度剝離であり、鋭角にならないことから対象物を切ったり、小刀のように削ったりするものとは考えられず、対象物に接し、板状の台の上で延ばす（磨る）ように使用されたと考えられる。

○本県や東北地方の多くは、チャートや硬質頁岩・珪質頁岩等の良質の石材があるにもかかわらず、やや軟質の泥板岩・粘板岩・礫灰岩を多用することから、対象物は、骨や石のように硬いものとは考えにくい。

○使用痕は裏面の磨耗や周縁の微細剝離であり、しかも線条痕がほとんど見られないことや裏面や周縁のほぼ全体を使用することから同じ部分を同じ方向で使用したものではない。

○板状石器の分布は不明であるものの対象物は本県中越地方以北、福島県会津地方以北であると考えられる。少なくとも、この地域より南からの出土は皆無と推定される。

以上、本遺跡で多出した板状石器について、若干記述してみた。分布・用途等は、各地で出土する板状石器及び類似品の分類が不明確なため、論拠を欠く記述になった。しかし、その分布が新潟県中越地方以北、福島県会津地方以北の可能性を考えると対象物は気候が影響しているのではないかとも思える。具体的には動物相・植物相を考えたいが動物相³⁾に思うかぶるものが多く、植物相を推定したい。さらに具体的には植物のせんいを取る過程で使用される工具と考えたいが、その根拠を見出せない。今後のさらには追及すべき課題である。

2) 片刃打製石斧

本遺跡の打製石斧完形品640点のうち、片刃打製石斧が約70%を占めた。これは、清水上遺跡（対象数326点・片刃28%・両刃71%・不明1%）、城之腰遺跡（対象数217点・片刃42%・両刃33%・未加工24%）等と比較す

1) 報告書には記載されていないが実見させていただいた。

2) サケの皮なめしを推定してみたが北海道からの出土がないことから、不可能である。また、毛皮の皮なめしを推定し、実際タヌキに使用してみたが、毛のあるものは厚く安定しないため不可能である。つまり対象物は薄いものと推定される。

れば、本遺跡の特徴の一つといえる。片刃打製石斧について述べたものは現在までのところ少ないが、中里村森上遺跡で出土数の90点とともに「裏面に一次剝離面を多く残して平坦で、表面がカマボコ型をなす」(齊藤・高橋1974)¹⁾、津南町八反田遺跡では「打製石斧とは、素材となる剝片の形状・製作技法・側面観が大きく異なり、主要剝離面を残し刃部の角度が大きい…中期に属する」(齊藤1984)と指摘している。一方、神奈川県尾崎遺跡で多出した直刃式片刃打製石斧の分析を行なった鈴木氏は県内の片刃打製石斧の分布(5遺跡)²⁾と「頁岩がもっと多く素材にはほとんど横長の剝片を用い、背面に一部自然面をこすものが多い。両側縁の調整剝離は、裏面(素材の主剝離面)より加壓して行ない急斜なものが多い。その際の素材の折断はほとんどみられない。形状は短冊形～楕円形をなし長さが幅の2倍以上のものが多い。また、刃部の状態は、直線状をなすものが少なくこのように、形態的には、片刃である点をのぞけば、ふつうの打製石斧と類似する点が多い。」(鈴木1977)と指摘し、直刃式片刃打製石斧との相違を述べた。

これ以降、片刃打製石斧の大量出土の類例が少ないと、分布が県内でも魚沼地方の一部に限られることなどから、注目されることは少なかった。今回、本遺跡での大量出土を機会に若干まとめてみたい。

一般的特徴 片刃打製石斧の定義については、ほぼ前述のとおりであるが、本遺跡出土の片刃打製石斧の一部には関東・中部地方や県内他地域で出土するいわゆる打製石斧との区別しかれるものがある。したがって、ここでは片刃打製石斧の定義というより一般的特徴を述べてみたい。

○刃部形状は断面形が当然片刃であるが、破損・刃部再生等から両刃になったと思われるものが一部存在する。平面形は円刃が極めて多く、直刃が少ない。

○素材は大型剝片がほとんどであるが、極く一部、石核素材と思われるものが存在する。縦長剝片・横長剝片の別は、森上遺跡では横長剝片が多い(鈴木1977)が、本遺跡ではそのような傾向は見られず、横長剝片は特徴の一つにならない。

○平面形は短冊形及び楕円形で占られ、分離形は存在しない。幅に対し長さが2倍以上のものが多い。刃部幅：基部幅で1.5：1を基準³⁾にすれば短冊形が多いが、短冊形から楕円形への変化は連続的であり、両者の中間形も多く存在する。また、横断面形はカマボコ形を呈し、厚手のものが多い。

○加工については、裏面が一次加工の平坦面またはやや緩やかに内湾する平坦状面を無加工にするもの、裏面の一次剝離面の極く一部に剝離を加え平坦面を作出するもの、比較的大きな剝離をいくつか裏面に施し平坦面を作出するものがある。正面の二次加工は、主に側縁に集中し、裏面から正面への急角度剝離を行なう。刃部・基部の二次加工は、無加工のものもかなり認められることから、必要に応じ施されるものと思われる。したがって正面には自然面を残すもの極めて多い。いずれにしろ、二次加工は片面加工・半片面加工・両面加工が存在するが、裏面は平坦面又はやや緩やかに内湾する平坦状面で、正面の側縁は急角度剝離であることで一致する。

○石材は各遺跡から出土する通常の打製石斧がやや軟質で、板状素材の得られる粘板岩・砂岩や片岩系の変成岩が多用されるのに対し、それよりやや硬質と考えられる頁岩が多用される。

以上の諸特徴から本遺跡の片刃打製石斧を抽出するとすれば、A類・B類・C類・D1c類のほとんど、D1a類・D1b類・D2類の一部が片刃打製石斧と推定され、完形品・破損品・破片うち、約500点以上

1) 報文では片刃打製石斧を石笠という器種名を使用している。

2) 鈴木氏自身が述べているように、森上遺跡以外は実測図・写真から判断したものである。したがって、片刃打製石斧かどうか検討すべきものもある。

3) 打製石斧分析の項参照



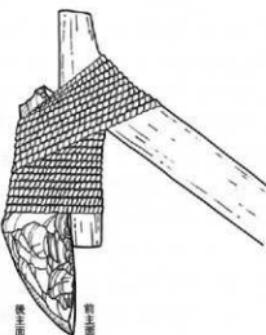
第140図 片刃打製石斧出土分布図

が相当する。

分布 第140図参照。報告書等の写真で判断した遺跡が多いため、確実とは言いきれないが、県内では、28ヶ所の遺跡で認められる。その分布は、柄尾市・下田村付近・魚沼地方の魚野川流域・信濃川上流域・東頸城郡東部に集中し、それ以外の新潟県北部¹⁾・中部の平野部・海岸部・南西部への広がりは見られない。一方、隣接県への分布を見ると、富山県・長野県・群馬県・福島県・山形県²⁾では類例は見られない。したがって、魚沼地方の山間部を中心に分布する石器といえる。しかし、津南町反里口遺跡は、新潟県・長野県の県境上の遺跡であり、出土量も多いことから、信濃川のさらに上流にあたる長野県北部の飯山地方では今後類例が認められる可能性がある。

時期 表93参照。発掘調査が行われ、時期がある程度推定でき、まとまった出土の遺跡は、下田村付の木平遺跡（中期前半）、津南町反里口（中期中葉～後期前半）、八反田遺跡（中期中葉～後期前半）、中里村森上遺跡（中期中葉～後葉）、堀之内町清水上遺跡（中期前葉）、本遺跡（中期前葉）等があげられる。中期初頭・前期に確実に伴う遺跡は今のところ存在しないことから、片刃打製石斧の出現は、中期前葉頃と考えられる。一方、その存続は、八反田遺跡では41点の出土のうち、中期中葉期34点、後期前半期7点と推定され、後期後半以降の遺跡に確実に伴う例は知られていない。片刃打製石斧の分布地域における後期前半の単純遺跡は存在せず不明な点があるものの、八反田遺跡の例や、後期後半以降に伴う例がないことから、下つてもその存続は後期前半頃までと推定される。

機能 第141図参照。片刃打製石斧の形態的特徴は、片刃で平面形が円刃、裏面は平坦面または緩く内湾する平坦状面で、側縁は急角度で断面系はカマボコ形を呈する。使用痕については他遺跡で述べている報告はなく、本遺跡の例では、線条度の29点を見ると、すべて正面の線条度が強く長く残されている。「片刃縦斧はひょううに珍しい」（佐原1977）こと、また本遺跡片刃打製石斧は、正面と裏面では形状に著しい違いがあることから縦斧とは考えられず、横斧と考えられる。さらに打製石斧の分析でも述べたように「横斧の使用痕は、斧の主軸に平行する線条痕からなっており、後主面で強く長く、前主面では弱く短い」



第141図 片刃打製石斧装着例

1) 新潟県中東部以北及び東北地方には、籠状石器及びそれに近似するものが多く出する。しかし、籠状石器は片刃打製石斧より、二次加工がより丁寧で刃部まで二次加工が施され、また、籠状石器のほうがより小型のものが多いことから、片刃打製石斧と区別されると考えられる。

2) 註1) の籠状石器が存在するが区別される。

表93 片刃打製石斧出土地一覧表

新潟県

番号	遺跡名	主 体 と な る 時 期						出土数	主な石材	備考	文献	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半					
1	牛・首	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点?	粘土質物	中村(1927)		
2	桑切	-----	-----	-----	-----	-----	-----	6	石英斑岩・	小林(1988)		
3	印内原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	2?	斜長岩・珪質岩	三井礦業高校史料科(1971)		
4	神の木平	-----	-----	-----	-----	-----	-----	10數点	花崗岩・	中村(1980)		
5	新倉	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	紫	田中(1961)		
6	笛水上	-----	-----	-----	-----	-----	-----	7	C板(圓刃式片刃打製石斧に近似したもの)	高橋(1990)		
7	宮下原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	4	アス・質	高田(1981)		
8	大原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	粘土質物	牧原(1988)		
9	五丁歩	-----	-----	-----	-----	-----	-----	約500以上	質	家田(1988)		
10	十二木原4地点	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点?	?	荒牧石器との区別し かねま、早朝土体	北村(1990)	
11	稻原1	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点?	真	川西町史編纂委員会 (1986)		
12	大原開墾地	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点?	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
13	大原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	2	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
14	大林	-----	-----	-----	-----	-----	-----	○	2?	?	川西町史編纂委員会 (1986)	
15	新町新田	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
16	山王原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	○	1?	?	川西町史編纂委員会 (1986)	
17	岩瀬大原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	○	1	?	川西町史編纂委員会 (1986)	
18	中子北	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
19	中子南	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
20	東風	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
21	桜山	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
22	兵者原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
23	林中	-----	-----	-----	-----	-----	-----	1	真	川西町史編纂委員会 (1986)		
24	原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	2?	真	川西町史編纂委員会 (1986)		
25	扇合十文字	-----	-----	-----	-----	-----	-----	2	質	川西町史編纂委員会 (1986)		
26	森上	-----	-----	-----	-----	-----	-----	90	アマガシ安山岩	鈴木(1970)		
27	宇川原	-----	-----	-----	-----	-----	-----	數点	?	川西町史編纂委員会 (1986)		
28	尻尾口	-----	-----	-----	-----	-----	-----	17?	安山岩	中村(1977)		
29	上野	-----	-----	-----	-----	-----	-----	32?	安山岩	引元(1962)		
30	八戸田	-----	-----	-----	-----	-----	-----	41	安山岩	中野より34点、後期 より7点	河瀬(1984)	

(佐原1977)ことから、本遺跡出土の片刃打製石斧の正面が横刃の後主面、裏面が横刃の前主面に相当するものと考えられ、着柄は後主面片刃横刃(現在の鉤の刃と同様に使用者の逆側に片面のあるもの)と推定される。このことから片刃打製石斧は鍔または手斧のような道具と考えられる。しかし、石器組成から見ると、中期前半は打製石斧の激増(小林1983)といわれており、本遺跡の打製石斧から片刃打製石斧を除くと、通常の打製石斧が極めて少なくなり、関東・中部地方の一般的な方や新潟県の一般的な方と異なってしまう。むしろ、片刃打製石斧は通常の打製石斧の一形態と考えるのが適当である。したがって、打製石斧の用途は主に土掘り具として使用されたと考えられる(大山1927)ならば、主に鍔として使用されたと推定され、その一部が手斧として使用された可能性もある。

3) 彫刻石皿

本遺跡からは7点の彫刻石皿が出土した。この数は各地での類例が少ないうえ、しかも各遺跡での出土数が少ないので極めて多い。ここでは、彫刻石皿の分布・時期等について、ふれてみたい。なお、中期以降の出現と考えられる有脚石皿については、彫刻石皿と異なるため除外した。

文様分類、表94参照。集成した彫刻石皿の文様を観察すると、半円弧状文(A類)、長半円弧状文(B類)、円文(C類)、円文に中点のあるもの(D類)、うず巻き文(E類)、うず巻き文に中点のあるもの(F類)、短沈線文(G類)、その他の文様(H類)がある。この他文様とは若干異なるが、裝飾石皿に含まれる両側縁が抉れたりするものや耳状の突起のつくもの(I類)、コブ状の突起のつくもの(J類)がある。これらの装飾文様は、対称性から見ると左右対称になるもの(1類)、左右非対称になるもの(2類)に分類され、また彫刻方法からA~H類までは沈線で表現される陰刻(a類)、浮彫り状に表現される陽刻(b類)がある。

表94 形刻石皿文様分類表

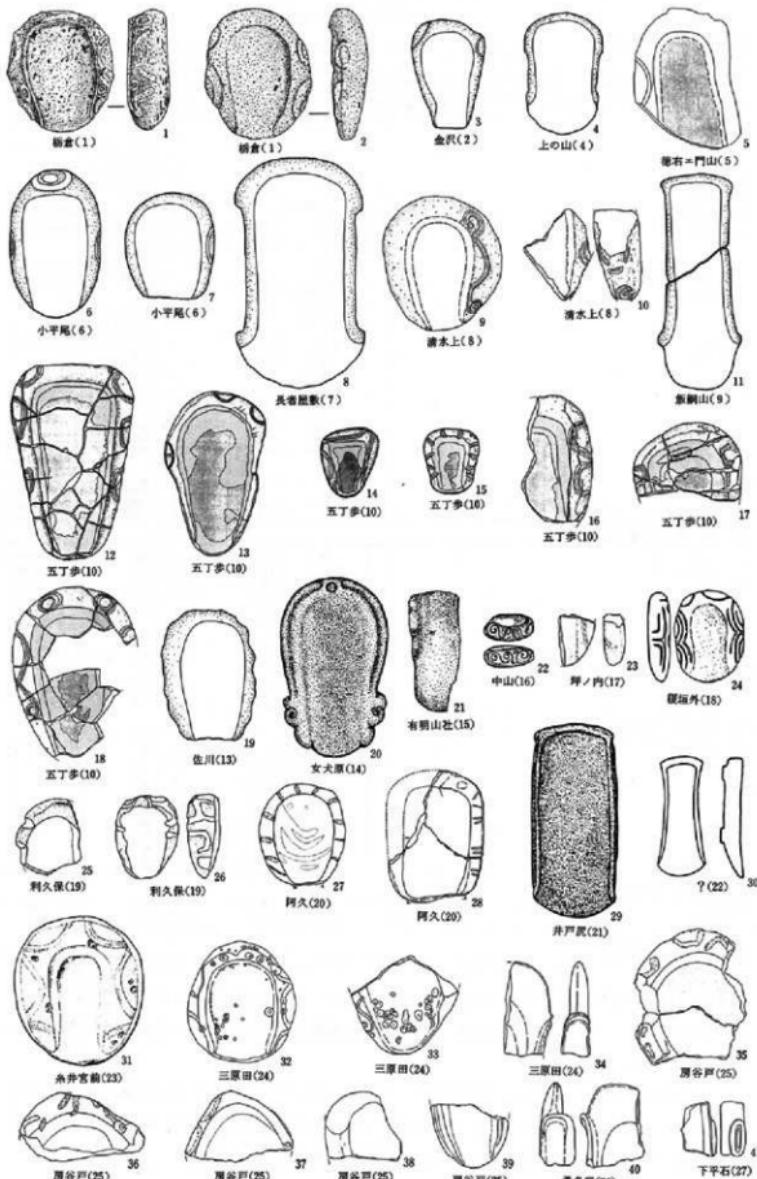
文 様	対 称 性	形 刻 方 法
A類 半円弧状文 B類 長半円状文 C類 円文 D類 円文に中点 E類 うずまき文	1類 あり	a類 陰刻(沈刻)
F類 うずまき文に中点 G類 照れ模文 H類 その他文様 I類 両側縁が抉れるもの J類 コブ状の突起	2類 なし	b類 陽刻(浮彫り)



第142図 形刻石皿出土分布図

これらを組み合わせ、文様分類を行った。

分布 第142図参照。各遺跡から普遍的に出土するものではなく、1遺跡からの出土数も少ないため、類例は多くない。調べたかぎりでは、26遺跡で44点である。その分布は、北は新潟県中部（中越地方）、東は福島県南部、南は長野県中部、西は富山県中部の範囲で、これ以外の地域では認められていない。文様分類別に見るとコブ状の突起を持つ（J類）は、新潟県佐川遺跡・富山県古沢A遺跡・長野県有明山社遺跡・梨久保遺跡及び女大原遺跡（コブ状突起とうず巻き文が合わさっているもの）の5例であるが、分布域の西寄りの区域に分布する。両側縁の抉りのあるもの（I類）は新潟県中部上の山遺跡・長者屋敷遺跡・飯綱山遺跡・長野県井戸尻遺跡・他遺跡の5例、耳状の突起のつくるもの（I類）は、群馬県三原田遺跡・福島県桑名庭遺跡・下平石遺跡の3例で、分布域のやや東寄りの区域に分布する。A～H類までの文様石皿は新潟県で9遺跡、長野県で6遺跡、群馬県の3遺跡の計18遺跡で最も多くの類例があり、上記分布域のはば中央部に分布する。さらにA～H類の分布を細かく見ると、半円弧状文（A類）は長野県では見られず、円文（C



第143図 形刻石皿集成図 () 内の番号は出土分布図の遺跡番号

縮尺 1 : 12

表95 彫刻石皿出土地一覧表

新潟県(彫刻石皿)

番 号	通 路 名	主 体 と な る 時 期						出土数	主な石材 名	文様分類			備 考	文 獻				
		前 期		中 期		後 期				文	対称 性	彫刻 方法						
		前半	後半	前半	後半	前半	後半											
1	勝常	-----						2	安山岩	1 B+C+H	1 b	対称		寺田(1961)				
2	金沢		○	1 ?		3 A+B		2	a	対称、写真上 り判斷	新潟県(1983)							
3	茂崎	-----				1 安山岩	B?	?	a	対称、写真より 判断	中村(1966)							
4	上の山		○	1 ?		4 I		1	-	対称、写真より 判断	新潟県(1983)							
5	鷹石立門山	-----				1 鳥居山	B	2	a	対称	道原(1987)							
6	小平尾		○	2 ?		6 D+B		1 a	対称、写真上 り判斷	新潟県(1983)								
7	長者里塚	-----	○	1 ?		7 B?		?	a	対称、写真上 り判斷	新潟県(1983)							
8	南水上	-----				3 安山岩	9 D+B+F	2	a	対称、写真上 り判斷	新潟県(1983)							
						10 D+?		1 a	対称	新潟県(1990)								
						11 安山岩	B	1 n	対称、調査時に 見つかる									
9	坂越山	-----	○	1 ?		11 I		1	-	対称、写真より 判断	新潟県(1983)							
10	五丁手	-----		7 砂岩	12 A			1	a	対称								
				砂岩	13 A			2	n	対称か?	新潟県(1983)							
				砂岩	14 B		1?	a	対称	新潟県(1990)								
				砂岩	15 A		1 a	対称、Aの裏 面										
				砂岩	16 A		1?	a	対称	新潟県(1983)								
				砂岩	17 A		1?	a	対称	新潟県(1977)								
				砂岩	18 B+C+E		1?	a	対称	新潟県(1983)								
11	平川原	-----		1 ?		?		?	?	?	?	?	?	中野村史跡調査 委員会(1985)				
12	沖ノ原	-----		1 ?		E		?	b	対称、写真上 り判斷	渡辺(1977)							
13	佐用		○	1 ?		19 J		1	-	対称、写真上 り判斷	新潟県(1983)							

長野県(彫刻石皿)

14	女大原	-----				1 砂岩	20 J+E+C?	1 a	対称		長野県(1983)		
15	有間山社	-----				1 砂岩	21 J	?	-	破片	長野県(1983)		
16	中山		○	1 ?		22 E+F		1?	a	対称	長野県(1983)		
17	坪ノ内	-----		1 ?		23 B?		?	a	対称か? - 後期	開聞(1990)		
18	履道外		○	1 ?		24 B+H		1 a	対称		長野県(1983)		
19	開久保	-----		2 ?		25 J		?	-	破片	山田・鶴口 (1986)		
20	阿久	-----		2 ?		26 H		2 a	対称				
				27 G		27 G		1?	a	対称・前期中	石山(1982)		
				28 G		28 G		2 a	対称				
21	井戸戸	-----		1 ?		29 I		2 a	対称		長野県(1983)		
22	? (深月町)		○	1 ?		30 I		1	-	対称	長野県(1983)		

群馬県(彫刻石皿)

23	糸井宮前	-----				1 相模磐石	31 B	1 a	対称・初期後		開聞(1986)		
24	三原田	---				3 相模磐石	32 B+H	2 a	対称		糸井・小宮 (1990)		
						相模磐石	33 E	2 a	破片				
						安山岩	34 I	?	-	破片			
				5 ?		35 A+?	?	a	破片		山口(1988)		
				?		36 A+?	?	a	破片				
				?		37 ?	?	a	破片				
				?		38 ?	?	a	破片				
				?		39 H?	?	a	破片				

福島県(彫刻石皿)

25	高須郡	-----				1 安山岩	40 I	?	-	破片	吉本(1980)		
27	下平石	-----				1 難石安山岩	41 I	?	-	破片	中山(1980)		

富山県(彫刻石皿)

28	古沢A	-----				1 ?	1	1 -	1	-	吉川(1983)		
----	-----	-------	--	--	--	-----	---	-----	---	---	----------	--	--

類)・円文に中点(D類)は新潟県にのみ分布する。うず巻き文(E類)・うず巻き文に中点(F類)と長半円弧状文(B類)は、三県に分布し、短沈線(G類)は、長野県阿久遺跡(石山1982)(前期中葉期)でのみ認められるだけである。

一方、文様の対称性から見ると、分布に片寄りは認められないが、I・J類は左右対称を基本とするものと考えられ、A~H類は対称・非対称が混在する。また、A~H類の彫刻方法は、ほとんどが陰刻(a類)であり、陽刻(b類)は、新潟県柄倉遺跡・沖ノ原遺跡の2例3点のみである。

以上、彫刻石皿・菱形石皿の文様分類例の分布を見たが、初めにも述べたように類例がすくなく、断定

的ではない。今後、資料の蓄積が望まれる。

時期 表95参照。彫刻石皿の出現で、時期がある程度推定できるのは、短沈線(G類)で表現されたものが長野県阿久遺跡の2点出土し前期中葉(有尾・黑浜式期)に比定されている。長半円弧状文(B類)で表現された群馬県糸井宮前遺跡(関根1986)の1点は、前期後葉(諸磯C式期)に推定される。うず巻き文(C類)は長野県女犬原遺跡(長野県1983)の1点(コブ状突起と複合)が、前期後半と考えられている。中期前葉には本遺跡例などからA~H類までのすべてが出そろっている。

このように彫刻石皿の出現は、類例が少なく不明確な部分も多いが、前期中葉にはまず最も文様の単純な短沈線(G類)がまず現われ、統いて後葉には長半円弧状文(B類)うず巻き文(C類)へと文様の複雑化が見られるようである。少なくとも中期前葉にはA~H類のすべての文様が出そろう。また、文様構成も1種類の構成から、2~3種類の構成へと複雑化が見られるようである。その存続は、長野県坪ノ内遺跡(関沢1990)の1点が後期前葉頃に比定されているのみである。多くは中期前葉から後葉までのものと推定される。このように見てくると、彫刻石皿は、前期中葉頃に出現し、中期前半に多くなり、後期後葉には「例外的に残存するだけ」(安達1983)になり消滅するものと考えられる。これを土器文様と比較すると、彫刻石皿の分布域の土器文様が前期中葉以降文様の立体化・複雑化の始まり、中期前・中葉の隆盛・後葉の衰退にはほぼ一致する。

一方、装飾石皿の両側縁に抉りのあるや耳状の突起のつくもの(I類)については、時期がある程度推定できるものは、長野県井戸尻遺跡(長野県1988)の中葉、群馬県三原田遺跡の中葉、福島県桑名郡遺跡の中期、同じく下平石遺跡(中山1989)の中葉後葉の4遺跡4点のみであり、すべて中期の時期幅に含まれている。また、コブ状の突起を持つもの(J類)は、長野県有明山社遺跡(長野県1983)、女大原遺跡の前期中~後葉、同じく梨久保遺跡(山田・樋口1986)の中葉、富山県古沢A遺跡(古川1983)の晩期の4遺跡4点のみである。しかし、古沢A遺跡では中期前葉の土器も若干出土しており、中期の可能性も推定される。この推定が可能ならば、I・J類もA~H類の彫刻石皿の時期幅に含まれる。いずれにしても、類例が少なく、I・J類については検討を要する。

性格 可塑性のない石に非実用的な彫刻があることから、呪術的性格が指摘されている。もしそうであるならば可塑性の有無の問題もあるが、土器の文様の多少、単純か複雑で呪術的性格を考えなければならない。呪術的性格もあるかもしれないが、むしろ前述のように、土器文様が前期中葉以降から中期末葉までの立体化・複雑化の時期幅にほぼ一致することから、彫刻石皿もそのような流れの中での産物と考え方が妥当と考える。なぜならば、彫刻石皿の分布域における彫刻の石製品(石棒・石剣など)は後・晩期に多いのに対し、中期では極めて少ないと、つまり、彫刻を施す石器・石製品は中期では石皿しかなかったと考えられ、中期の彫刻石皿と後・晩期の彫刻の石製品とは、性格が異なると考えられるからである。

4) 器種と石材選択

表96参照。本遺跡で出土した石器の石材は多種類である。しかし、器種ごとにある程度石材は限定され、これらはいくつかのグループに分けられる。

A群 器種 石鎌・石錐・石匙・ビニスエスキュー・不定形石器

石器の特徴 小型削片石器で鋭い刃部や尖頭部からなる。

主な石材 真岩I・真岩II・硬質真岩・珪質真岩(C群に比べ硬質真岩・珪質真岩の占める割合が高く、

真岩I・真岩IIが低い)變灰岩・硬砂岩・他に出土数は少ないが他群にみとめられない他の地域からの搬入石材と考えられる鉄石英・チャート・黒曜石・黒色緻密安山岩メノウ

表96 石器類器種別・石材別出土表

器種名 石材	石			石			ビエス・エヌ・エヌ・ターニー			不			三			板			打			礫			磨			石			砥			台			石			分類不明			石			器			計		
	硬	軟	鉄	石	英	石	器	石	器	形	脚	石	器	状	板	石	斧	礫	器	石	斧	磨	石	器	石	砥	石	石	鍛	合																					
黒 鹿 石	2	1					2																															5													
黒 鹿 英	1	1					1	1																													4														
鉄 石																																						1													
チ ャ ー ト																																						11													
黒色巖密安山岩	2																																					3													
メ ノ ウ	3																																					1													
石																																						2													
流 紋 岩																																						2													
硬 砂 岩	3						1	38		1	23																									66															
粘 板 岩									2	43		32	52	2																					131																
頁 岩 I	1	1	5	4	9	157			1	333	16																							539																	
頁 岩 II	3	32	9	13	749	3	21	458	47	3	4																						1,346																		
硬 質 頁 岩	6	20	7	40	529				14	7	1																							624																	
硬 質 頁 岩	2	6	1	2	117				2																										130																
無 灰 岩	2						1	24		7																										45															
泥 板 岩								1		962	1																									966															
砂 岩								3	8	3																										508															
安 山 岩																																						133													
花 岩 岩																																						144													
微 細 透 横 岩									2	1	3																									586															
微 灰 角 横 岩																																						46													
ひ ん 岩																																						9													
硬 岩																																						3													
閃 畳 岩																																						2													
蛇 紋 岩																																						26													
混 混 千枚 岩																																						5													
混 混 片 岩																																						5													
不 明								1																													13														
合 計	22	68	21	69	1,677	12,081	3	1,034	887	77	37	1,111	56	234	(241)	34	6	4																						5,340											

合計()内の数は総出土数

石材の種類 硬質で緻密な石質であり、剥離は貝殻状の断口が著しい。

B群 器種 板状石器

石器の特徴 板状の平坦面の裏面と急角度の周縁からなるが、刃部はそれほど鋭くならない。

主な石材 泥板岩・粘板岩

石材の特徴 やや軟質の石質で、剥離は板状剥離や段階状剥離になりやすい。

C群 器種 打製石斧・礫器類

石器の特徴 大型剥片石器または礫石器であるが、刃部はそれほど鋭くならない。

主な石材 頁岩I・頁岩II・粘板岩・硬砂岩

石材の特徴 やや硬質の石質で、剥離は貝殻状の断口である。しかし、A群の石材に比べるとやや軟質である。

D群 器種 磨製石斧

石器の特徴 一般に木材伐採用の斧、木材加工用のノミに使用されたといわれ、刃部にかかる衝撃は大きい。また、製作に研磨が加えられ完成まで時間を要する。

主な石材 蛇紋岩・縞模岩片岩(千板岩)

石材の特徴 縞維を束ねたような石材で、折れにくい。

E群 器種 磨石類

石器の特徴 中型の礫石器で磨りと蔽きに使用される。

主な石材 微細縞模岩・砂岩・花崗岩・安山岩・凝灰角砾岩

石材の特徴 岩石を構成する粒子は比較的粗粒から細粒まで、礫のやや凹凸のあるものから、凹凸

の比較的少ないものまであるが、A～D群とは、粒子の粗さや器面の粗さから明らかに区別される。

F群 器種 石皿・砥石・台石

石器の特徴 大型の砾石器で磨りと戴きに使用される。

主な石材 砂岩

石材の特徴 岩石を構成する粒子は比較的粗く、器面の凹凸も比較的ある。しかし、砥石には細粒質のものも少なからず存在する。

G群 器種 石製品（中期前葉に伴うかどうか不明なものが多い）

石器の特徴 多くは非実用品と考えられ、刃部や使用面を持たない。

主な石材 滑石

石材の特徴 軟質で加工しやすい。光沢ある。

これらの器種の中には、用途が必ずしもはっきりしないものもあるが、群ごとに石材はある程度共通性を持つ。これは機能・形状・製作技法等と石材には密接な関係があるため、多くの石材の中から最も適したものを選んだ結果といえよう。

ところで、多くの石材は地元に産するものを使用したと考えられ、具体的には眼前に流れる魚野川で採集したと推定される。したがって、その採集は遺跡から近いことから容易であったと思われる。また、打製石斧のように、その素材となる頁岩I・頁岩IIの大型砾や大型剣片や未完成品が少ないとから、採集地で完成品に加工された可能性が高い器種もある。一方、出土数は多くないが、磨製石斧の蛇紋岩・千板岩・小型剣片石器の黒曜石・鉄石英・チャート・黒色級密安山岩（ヘリ質安山岩）・メノウ等は他地域からの搬入品と考えられる。新潟県地質図・同説明書等（新潟県1989）によれば、鉄石英・チャート・メノウ・千板岩は魚沼地方の北部から、黒色級密安山岩は信濃川流域（高橋1990）、黒曜石は長野県から、蛇紋岩は糸魚川地方から搬入されたものと推定される。黒曜石は石核が数点出土していることから、原石・荒削り礫の状態で搬入され、数は少ないが主に石錐・石錐・不定形石器の小型剣片石器に用いられ、蛇紋岩は剣片・破片・原石・未完成品がないことから、完成品または完成品に近い状態で搬入された可能性が高い。糸魚川地方では中期前半から蛇紋岩性磨製石斧が大量に生産され、供給地と考えられていること（阿部1987）から、本遺跡遺跡の磨製石斧の蛇紋岩が70%を占めることを可能にさせたといえよう。

5) 石器組成——魚沼地方の中期前葉から

後期前葉を中心に

新潟県南部に位置する魚沼地方は、近年、諸開発による発掘調査及び整理報告の増加に伴い、縄文時代の石器様相が明らかになりつつある。しかし、石器組成等については、いくつかの報告（渡辺1984・高橋1990・藤巻1991）があるものの、まだその研究は総についたばかりで、土器研究に比べると、進んではいない。ここでは、同地方の10遺跡（第144図参照）を対象とし、比較的に資料がまとまっている中期前葉から後期前葉までの石器組成、器種別変遷の概要を述べ、本遺跡の位置づけを行いたい。



第144図 分析遺跡の位置図

表97 各遺跡の石器組成

表97は魚沼地方の歴期の遺跡の石器組成表である。遺跡は遺構・遺物の検出から多くは大規模集落と推定される。組成の百分率は、定形石器及び比較的共通に器種認定できる石器種で行った。

器種別変遷 石鎌 各遺跡で一定量認められ、普遍的に出土する石器である。時期別に見ると若干のばらつきがあるものの、中期前葉（大木7b・8a式）では比率は低く、中期後葉（大木9・10式）、後期前葉（三十福場・堀之内I式）を含む遺跡では比率が若干高くなり、八反田遺跡の後期地区（堀之内I・加曾利B1式）では23%の比率を占め、後期中葉には主要な位置を占める石器になるものと考えられる。魚沼地方を含めた新潟県中部（中越地方）では、石鎌は後期以降に増加する（藤巻1991）と指摘されているが、中期後・末葉（大木9・10式）にその始まりは求められる。同じく新潟県中部では石鎌の形状から見ると、中期前葉から後葉までは、基部の抉りの深い凹基無茎鎌が主体で、大型のものがやや多いのに対し、後期初頭には平基無茎鎌が現れ、小型のものがやや多く後期中葉以降は有茎鎌が定着することが指摘（田中1991）されており、魚沼地方もほぼ同様の傾向である。

尖頭器（石槍） 多くの遺跡の比率は1%以下で、出土しない遺跡も見られる。報告者の器種認定の共通性はなく検討を要する。時期別の比率は不明である。

石錐 各遺跡で認められ、普遍的に出土する石器である。しかし、比率は6%から1%以下まで著しいばらつきがある。このばらつきは時期的なものではなく、報告者の抽出によるものと考えられる。したがって、時期別の比率の変化は不明である。形状については、中期前葉では、素材の形状を変えることなく、簡単な二次加工を施したもののがほとんどであるのに対し、中期後葉・後期前葉では、二次加工が全面に及ぶものや錐部とつまみ部が明確になるものがある程度占めるようになる。棒状錐や錐部が細く長いものは後期中葉以降と考えられる。

石匙 多くの遺跡の比率は1%以下で、出土しない遺跡も見られる。時期別の比率の変化は不明である。前期までのものと比べ、粗雑なつくりである。

三脚石器 清水上遺跡を除き、1%以下の比率で、出土しない遺跡も見られる。三脚石器の出現は清水上遺跡の例から、中期前葉（大木7b式）までさかのぼれる。その存続については不明であるが、中期の遺跡からは、数は少ないが比較的多くの遺跡で認められ、城之腰遺跡の例から中期末葉または後期前葉まで存続するようである。しかし、これ以降存続しない可能性が高いと推定される。ちなみに清水上遺跡の出土数は、他地域と比べても数が報告された中では最も多い¹⁾。

板状石器 清水上遺跡の6%、本遺跡の27%のように、石器組成の主要な石器となる反面、これ以外では1%以下の比率で、出土しない遺跡も見られる。まとめの1)で述べたように中期前葉に出現し晩期まで続く、また、遺跡間で出土数の多少が極めて著しい石器で、板状石器を必要とする遺跡と必要としない遺跡がある。したがって、時期別の比率の変化は不明である。

打製石斧 八反田遺跡の中期地区（大木7b～9式）の62%から城之腰遺跡の7%まで比率に大きな差はあるが、いずれも出土数は多く中期前葉から後期前葉まで、主要な石器である。地域別に見ると、魚沼地方南西部にあたる信濃川流域では、比率がやや高く、時期別に見ると後期前葉・中葉を含んだ遺跡では、比率がやや低くなる。打製石斧の形状を見ると、厚手の片刃打製石斧はまとめ2)で述べたように魚沼地方の南部・西部の魚野川中流部・信濃川上流部から多くの遺跡で認められ、北部では少ないようである。

片刃打製石斧は、中期前葉に出土し、本遺跡のように打製石斧の半数以上を占める遺跡もあり、後期前葉

1) 山形県島遺跡では、「無数の出土」（山形県1969）といわれているが、数は明記されていない。

には少なくなるようである。また、分銅形打製石斧は中期前葉に同地方南部の本遺跡では少數認められるのに対し、北部の清水上遺跡では存在しない。中期末葉・後期前葉にはどの地域にも認められるようであるが、南部では増加傾向にあり、後期前葉の柳古新田下原A遺跡（池田1987）では、打製石斧の半数以上を占めるようになる。分銅形打製石斧は群馬県方面ひいては関東地方からの影響と考えられる。

磨製石斧 八反田遺跡の後期地区（掘之内I・加曾利B1式）の12%から本遺跡の1%まで比率の高低はあるものの、各遺跡で一定の出土があり、普遍的に出土する石器である。時期別に見ると、万條寺林遺跡（池田1988）を除き、中期前葉から中期後葉・後期前葉になるにつれ、少しづつ比率は高くなる。形状は大型・中型・小型があるものの、実測図・写真を見る限りほとんどが尖角式磨製石斧で、乳棒状磨製石斧は清水上遺跡・五丁歩遺跡・沖ノ原遺跡で1~2点が認められる程度である。石材は半数前後が蛇紋岩¹¹で占められ、小型磨製石斧ほどその傾向が強い。蛇紋岩製磨製石斧のすべては糸魚川地方及びその周辺からの搬入品であろう。

磨石類 器面に磨痕や凹痕・敲打痕のある砾石器であり、器種認定が難しく観察者の抽出が反映される。八反田遺跡の19%から宮下原遺跡（池田1981）の83%まで比率の高低がある。いずれにしても各遺跡の比率の高さから主要な石器であることは事実である。時期別の比率の変化は不明である。

石皿 各遺跡で認められ、普遍的に出土する石器である。宮下原遺跡の0.2%から沖ノ原遺跡の10%までばらつきが見られるが、これは平板状の無縁石皿の抽出の有無、破片で多く出土するなど実際の数の出にくい石器のためと考えられる。時期別の比率の変化は不明である。形状別では、まとめ3)で述べたように彫刻石皿は数は多くないが中期前葉から中期後葉まで存在するが後期前葉では検出されていない。

台石 城之腰遺跡の14%を除き、多くの遺跡では1%以下で、出土しない遺跡もある。石皿と兼用されるものが多く、検討を要する。時期別の比率の変化は不明である。

砥石 各遺跡で認められ、普遍的に出土する石器である。本遺跡の6%から他遺跡の1%以下の遺跡までばらつきがある。石皿との区別が難しいものが一部存在し、検討を要する。時期別の比率の変化は不明である。

石錘 城之腰遺跡の12%、柳古新田下原A遺跡4%・万條寺林遺跡の2%を除くと1%以下の遺跡が多く、出土しない遺跡もある。信濃川上流域の南西部では、笹山遺跡・八反田遺跡で各1点と時期を問わずほとんど出土しない。魚野川流域と北部では上記の遺跡のように後期前葉以降やや増加すると考えられるが、比率の高低が見られる。

以上、百分率を求めた石器に対し、次に百分率に含めない石器について若干述べる。

不定形石器類 素材の形状を変えないものが多く、不定形を呈し、器種認定が難しいため、遺跡間に出土数の大きなばらつきが見られる。北海道聖山遺跡の不定形石器の分析（阿子島1979）以来の類例を見れば、繩文時代の各時期を通じ、出土数は多く、主要な石器であることはほぼ事実である。比較的共通な理解により分析した、清水上遺跡・城之腰遺跡・本遺跡を見る限り、城之腰遺跡の報告でも指摘された（田中1991）ように中期前葉から中期末葉・後期前葉までは不定形石器の内容に系統的なつながりが認められるが、出土比率（不定形石器を含めた百分率）は中期前葉が高く、中期末葉・後期前葉になると低くなる。また、石器の大きさも、相対的に小型化の傾向がある。

ピエス・エスキュー は器種の設定が比較的新しいため、出土しない遺跡が多い。しかし、時期を問わず

1) 万條寺林遺跡・宮下原遺跡の報告では、蛇紋岩が0~1点であるが、写真を見る限りかなりのものは蛇紋岩と推定される。

一定の出土があると推定される。同じく礫器類は定義が明確でなく、抽出に困難な面もあるが、時期を問わざる一定の出土があると推定される。三角錐形石器は早期後半期に伴うものと推定（石坂・岩崎1988）されている。石製品は時期を問わざる極めて少ないが、中期前葉以来の玉類の他に中期末葉・後期前葉には石棒・石劍などが現れてくるものと推定される。

石器組成の変化 前述の器種別変遷の変化を総合すると、中期前葉の石器組成は次のようになる。

- ①比率が高く、主要な石器であるもの……打製石斧・磨石類・不定形石器類
- ②比率は低いが、一定量の出土があるもの……石鎌・石錐・磨製石斧・石皿類・ビニスエスキーニ・礫器類？
- ③比率が極めて低く、出土しない遺跡もあるもの……尖頭器・石匙・石製品・三脚石器・板状石器・砥石・石鍬

通常、上記のようなあり方を示すが、③の石器には清水上遺跡の三脚石器や木遺跡の板状石器や砥石のように比率が高く、遺跡によっては①の主要な石器またはそれに近い比率を示すものがある。

このような組成は、中期中葉に限られる資料がなく、不明確であるが、基本的には前葉の組成を継続するものと考えられる。また、③の石器で突出する遺跡は存在しない。しかし、中期後・末葉には若干の組成変化が始まる。①の主要な石器では不定形石器類の減少？が推定され、②の石器では石鎌・磨製石斧の増加傾向が始まるとある。さらにこれらの変化に合わせ、不定形石器類の小型化、石錐の形状の多様化、彫刻石皿の衰退などの変化も推定される。

後期前葉には、中期後・末葉の変化をさらに大きくしたと考えられ、新たに打製石斧の減少、石鎌・石製品の微増が推定される。③の石器では城之腰遺跡の石鎌、隣接する長岡市三十番場遺跡や岩野原遺跡の板状石器のように出土数が多く、遺跡によっては主要な石器になるものがある。また、これらの変化に合わせ、厚手の片刃打製石斧の衰退、分銅型打製石斧の増加、石錐のいわゆる定形化、彫刻石皿の消滅、石棒・石劍の微増などがあらわれてくるようである。なお、石鎌は後期中葉以降、主要な石器になる。

以上、中期前葉から後期前葉までの石器組成の変化を概観したが、変化的面は中期後葉から後期前葉に求められよう。さらに時期を限定しようとすれば中期末葉（大木10式）から後期初頭（三十番場式）にあると考えられるが、この時期に限定された遺跡は存在せず、推定の域を出ない。

また、多くの遺跡で極めて少ないと出土する器種（三脚石器・板状石器・砥石・石鍬）が、一部の遺跡で大量に存在することは、その器種を必要とする遺跡とそうでない遺跡として理解したい。言いかえれば生業の違いである。当時の社会ではそれぞれの集落（遺跡）が独立し、それぞれ自立的に生業を営んでいたとは考えられず、相互に集落同士が補完しあっていたと考えられるからである。

五丁歩遺跡の石器組成 本遺跡の石器はそのほとんどが中期前葉に所属すると推定される。しかし、集落外のものは他時期のものの可能性が高い。そこで、ここで扱う資料は集落跡及びその周辺のもの、つまり26~37列グリッドから出土した石器を対象とした。また、明らかに对象グリッド出土土器でも他時期に所属すると考えられるものは除外した。集落跡から出土した土器のほとんどが、大木7b・8a式に比定できることから、石器もほとんどが同時期と推定される。

前述したことの重複もあるが、本遺跡の石器組成は、魚沼地方の中期前葉の組成のあり方に近似する反面、板状石器と砥石が突出するという大きな違いが認められる。つまり、前述のような生業の違いであり他の遺跡と同じような生業を営んでいたのと同時に、他の遺跡ではあまり生産されない何かを大量に生産していたものと考えられる。板状石器は、器種の分析で述べたように、使用痕や他器種と同じような出土

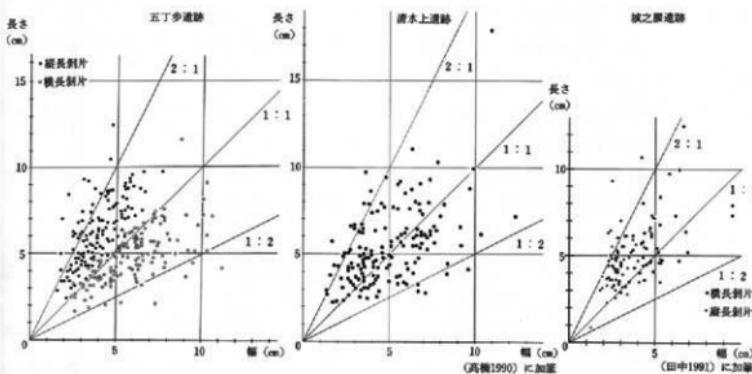
状況等から実用品と推定され、しかも、出土分布から集落内で消費された石器で、他遺跡へ供給されたり、集落外で使用された石器とは考えられない。しかし、具体的な生産品名は不明である。一方、砥石は、板状石器ほど高い比率ではないが他遺跡と比べれば出土数と比率は特筆される。砥石の分析で述べたように、大型品・小型品の他、剝片の縁辺を利用した内磨砥石に近似したものも出土していることから細部加工を施した成品が推定される。砥石を使用する成品は、磨製石斧と石製品がある。しかし、本遺跡の出土は多くなく、出土比率は他遺跡のそれと変わらない。このように考へると、砥石を使用した成品は骨角器と推定され、それもかなり大量に生産していたものと考えられる。

以上、本遺跡の石器組成から他遺跡と同じような生業以外に、板状石器を使用し、大量生産された何かと、砥石を使用しかなり大量に生産された骨角器を生産した遺跡であることが推定される。これらの生産品は、周辺の遺跡に供給されたものと考えられる。

6) 清水上遺跡・城之腰遺跡との比較

新潟県教育委員会は、昭和54年から昭和59年にかけて、魚沼地方で3つの縄文時代の集落の発掘調査の機会を得た。いずれも広場を持つ環状集落で、清水上遺跡は集落の約半分¹⁾を、城之腰遺跡と本遺跡は、集落のほぼ全面を発掘調査した。時期は清水上遺跡と本遺跡が中期前葉（大木7b・8a式）、城之腰遺跡は中期末葉（大木10式）から後期前葉（三十稻場・堀之内I式）である。これらの整理報告は清水上遺跡が平成元年度に、城之腰遺跡が平成二年度に終了した。ここでは、比較的共通の認識で整理した石器について、相互比較を行ってみたい。なお、前述のまとめと重複することが多いため、特に必要な事柄やまだ述べていない事柄について簡単にふれる。

石器組成 本遺跡と清水上遺跡では、時期が同じため、多くの器種で比率はほぼ共通する反面、本遺跡の板状石器・砥石の突出、清水上遺跡の三脚石器の突出で異なる。三脚石器・板状石器の用途は不明であるが、仮に用途が異なるとしたら、それは、生業の違いに求められよう。また、打製石斧の形態差があるが、これは、既に述べたように地域差と考えられるが、使用石材の差の可能性もある。一方、城之腰遺跡とは、時期的な組成の違いのほか、城之腰遺跡だけの台石・石鍤の突出と、ビエス・エスキューの出土の多さがある。台石の突出は、磨石類の比率の高さに関係する可能性がある。いずれにしても、これらの追



第145図 使用痕のある剥片長幅分布図

1) 残り部分については、平成2年度から県教委で発掘調査、現在継続中。

いは生葉の違いに求められると推定される。

剝片石器の形状 素材の形状を最も変形しない「使用痕のある剝片」¹⁾で剝片の大きさを比べると第145図のようになる。清水上遺跡と本遺跡の石器は、ほぼ同じ大きさで大型、城之腰遺跡は相対的に小型である。この他、城之腰遺跡は、石鎚・剝片などにおいても相対的に小型である。一方素材の形状では、清水上遺跡や本遺跡では、不定形石器・剝片を見る限り、清水上遺跡や本遺跡では縦長剝片と横長剝片が同数または若干横長剝片が多い程度に対し、城之腰遺跡では横長剝片が圧倒的²⁾である。

このように、剝片石器や剝片の大きさや形状に大きな違いが認められるのは、剝片剝離技術の違い³⁾と考えられるが、城之腰遺跡では黒色緻密安山岩⁴⁾が多いという石材選択の可能性もある。

石器と剝片の出土比率 石器・石製品・剝片・石核のうち剝片の占める比率は、本遺跡68%、清水上遺跡77%、城之腰遺跡38%である。清水上遺跡の比率が最も高いが、これは剝片の約1/3を占める安山岩が風化のためほとんど石器として認定されず、剝片になったためで、実際は本遺跡と比率は大差ないものと思われる。いずれにしても、城之腰遺跡とは大きく異なる。これは、城之腰遺跡の剝片石器の小型化によるものと考えられ、剝片石器自体が大きい遺跡では大きさで適さない剝片が多くなり、剝片石器自体が小さい遺跡では、剝片のロスが少なくなるものといえる。

石材選択 例えば、剝片石器で最も出土の多い不定形石器では、本遺跡の4分した頁岩(93%)、清水上遺跡の2分した頁岩(40%)・鉄石英(26%)、城之腰遺跡の黒色緻密安山岩(46%)・2分した頁岩(28%)である。遺跡の立地から見ると本遺跡は頁岩が多く採集できる魚野川上流域にあり、清水上遺跡は魚野川と鉄石英を多く採集できる破間川の合流点の下流にあり、城之腰遺跡はさらに魚野川と黒色緻密安山岩の多く採集できる信濃川⁵⁾の合流点の下流に位置する。これらの石材の産出地は各遺跡から離れていることから、遺跡近くを流れる河川から採集したものと判断できよう。したがって、河川の上流で石材の選択の幅の狭い本遺跡では、頁岩に集中し、河川の下流で多く支流を集めた。清水上遺跡や城之腰遺跡では、多種類の石材の中から、最も石器に都合のよい石材を選択したのである。

一方、搬入石材と推定される、磨製石斧の蛇紋岩は、本遺跡の74%、清水上遺跡の54%⁶⁾、城之腰遺跡の43%である。ここにも前述の石材選択の幅の広さがあると考えられ、蛇紋岩に替わる石材の乏しい本遺跡では高く、石材の種類の多い清水上遺跡や城之腰遺跡では低くなる。しかし、それでも三遺跡の蛇紋岩の比率の高さは特筆され、それだけ他の石材に比べ蛇紋岩が磨製石斧に適した石材であったといえよう。三遺跡とも蛇紋岩の原石・剝片は出土せず、成品または成品に近い状態⁷⁾で搬入されたものといえる。蛇紋岩製磨製石斧は糸魚川地方とほぼ推定され、同地方では中期前葉より大量に生産されていた(藤田ほか1964・阿部1987・山本1990など)ことが明かである。しかも、蛇紋岩製磨製石斧の比率の高さは、上記の3遺

1) 本遺跡の不定形石器J 1・J 2類、清水上遺跡のJ類、城之腰遺跡の使用痕のある剝片がこれに相当する。

2) なお、城之腰遺跡では、石器の置き方、剝片の計測方法が異なるため、長軸分布図には、素材の形状は反映されていない。

3) 城之腰遺跡では、石核・剝片の石材は黒色緻密安山岩が圧倒的である。この石核を観察すると、扁平状の石核で、平坦面を打面とし、一方向(同一打面)からの剥離が圧倒的である。つまり、打面を上にした場合長さが規制され、幅が規制されない石核からの剥離である。したがって、得られる剝片は長さに対し、幅が広い横長剝片が多くなる。しかも、長さが規制されている石核は、規制されていない石核より、得られる剝片の幅の広さにはより限界がある。したがって、得られる剝片は、小型化する。

4) 報告ではガラス質安山岩という名称を使用している。

5) 信濃川でも頁岩は採集できる。

6) 同じ糸魚川地方から搬入したと推定されるヒスイも加えると56%になる。

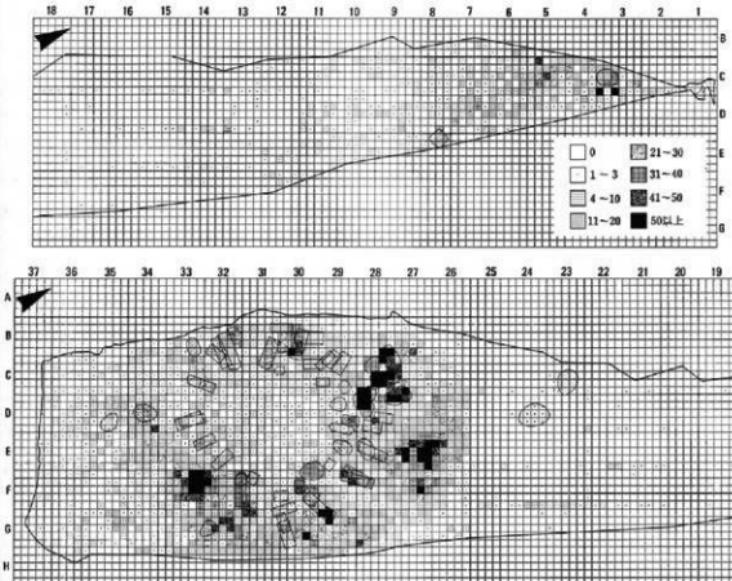
7) 研磨を残す程度の未完成という意味。

跡に限らず他の多く遺跡で認められる。したがって、中期前業以降、蛇紋岩製磨製石斧の大量生産と流通・消費が行われ、それ相応の交流が行われていたと理解される。

同じく、搬入石材である黒曜石については、各遺跡ともほとんど石鎚に使用され、他器種に使用されることは少ない。しかも、石鎚に占める黒曜石の割合は、本遺跡で9%（2点）、清水上遺跡で8%（3点）、城之腰遺跡で7%（9点）と高くない。このように黒曜石の出土比率が少ないので、黒曜石産出地に遠いこと¹⁾や黒曜石にかわる石材²⁾が手軽に採集できたからと考える。

7) 石器の出土分布状況と遺跡のありかた

出土石器の分析で述べたように、各器種の多くは、環状集落の住居跡及びその外側から出土し、器種毎に際立った分布の片寄りはみられない。また、特殊な出土状況を示すものはほとんどなく、廃棄されたものと推定される。それらの石器・石製品・剝片類・石核の出土分布をまとめたのが第146図である。第146図を見ると、調査区の北東部（2列～11列グリッド）にも、いくらか分布するが、伴出土器から集落跡とは違う時期と考えられるため、除外する。



第146図 石器器種・石製品・剝片・石核出土分布図

1) 黒曜石の搬入先については、産地同定していないので、明確でないが、長野県方面のものと推定している。

遺跡近くでは、入広瀬村大白川・新津市金津丘陵に産出地がある。しかし、小粒で石鎚に素材になるものは極めて少なく、産出量も少ない。

2) 本遺跡の頁岩・清水上遺跡の流紋岩・鉄石英・城之腰遺跡のチャート・黒色緻密安山岩などである。

出土分布は、径約28mのいわゆる広場・土坑群の存在したところからは、極めて少なく、それ以上の径約60m前後までの住居跡群を含むかたちで、約80×100mの範囲からほとんど出土している。当然、住居跡外側の西から北にかけての段丘崖部分¹⁾と、同じく調査区外の南東部分にも石器は廃棄されたものと推定される。土器も石器と同様な出土状況であることから、遺物の廃棄してならない広場と墓域、遺物の廃棄される居住城とその外側とは、厳然と区別されていたと考えられる。また、土坑等に石器・石製品を埋納するなどの行為は認められない。さらに分布を細かく見ると住居跡集中部分とその外側からが多い。当然といえば当然であるが、住居跡近くの集落外側や廃絶された住居跡の窪地に廃棄したのである。また、廃絶された住居跡は、遺物が廃棄される窪地以外に何ら意味を持たなかったと考えられる。

一方、第92図の自然礫の出土分布を見ると、石器に比べ、広場・土坑群からの出土が多いことは明らかである。さらに自然礫としたものの中には、炉石・柱穴の根固め石・焼石等も含まれるため、これらを除外すれば、なお一層、多いことが明らかである。また、第93図の重量別の自然礫出土分布図を見ると、重さ40kg以上の大礫はさらに広場・墓域に集中するのである。つまり、広場・墓域には調査時には黒色土中のため明確に確認し得なかったが、自然石でつくられた集石・配石・立石等の何らかの施設があったものと推定される。

以上、石器について、若干のまとめを記述した。石器のみについて述べただけで、遺構・土器との検討が不充分であった。また、他遺跡・他地域との検討・諸文献の引用・参考等も不充分で、論拠・明確さを欠く、まとめになってしまった。報告で明らかになった問題点・課題をさらに今後追求して行きたい。

D 五丁歩遺跡の性格と位置付け

今まで遺構、遺物について説明、若干の検討、考察を加えてきたが、果たしてこの集落は具体的にどのような集落であったのであろうか。まず、具体的にどのような人達がこの五丁歩集落を作ったのか。土器の項で述べたように、五丁歩遺跡の土器様相はあまりにも複雑である。これは何を意味しているのであろうか。胎土分析結果等からは、他地域から持ち運ばれた土器はないであろうということである。文様のみで言うならば、純粹に他地域の土器とができるのは関東の勝坂式、阿玉台式土器で、他の土器はすべて土器の中に在地色を残している。勝坂、阿玉台は、地理的に言って北関東から三国越えで五丁歩に入ってきた人達が五丁歩遺跡において製作、使用したものと考えられる。またその他の土器については、何らかの他地域の要素を取り入れたものが多い。この情報は、どこから入ったのか。もし他地域の人が五丁歩遺跡にやって来て土器を作ったなら、おそらくその地域の土器を製作したはずである。そうでないと言ふことは、五丁歩の人が何らかの目的で旅行して(移動)、見てきた土器を模倣して製作したと考えた方が素直であろう。何でも新しい情報があれば取れるという積極的な姿勢がうかがえる。土器全体では信州、上州、東北に関連する土器はかなり認められるにもかかわらず北陸系統、いわゆる新崎式土器の出土がほとんど見られないことは、彼等の行動範囲が、下流部の平野にはおりていかなかつたことを意味するのではないかと考えられる。中期初頭段階においては、湯沢町岩原遺跡にみるように新保系の土器が確実に入っている。しかし、五丁歩遺跡では次の段階の新崎式土器は認められず、下流域の清水上遺跡では、新崎式土器が主体を占めているということからも窺う事ができる。そうすると、生活、生業活動の根本は

1) 当時(集落が営まれていた繩文中期前半)から段丘崖であったか不明である。段丘崖の有無にかかわらず廃棄されたと推定される。

6 まとめ

山間地にあったとができる。つまり、平野部の文化とは違った生活様式を持っていたのではない、かと考えられるのである。このことは石器組成を見たときにも差を見出すことができる。まず、片刃石斧である。この片刃石斧はかなり特徴的なもので、この五丁歩遺跡をはじめとして魚沼地方の山間部に多く認められる。しかし、清水上遺跡ではほとんど認められていない。また、分鋼形石斧の存在は、関東との関連を示唆している。このように、石器においても越後の平野部と異なる要素があることからすると、五丁歩遺跡の人たちの目は、平野部には向かず、むしろ山に向いていたことが窺えるのである。また土偶・石棒等がほとんど見られないことは何を意味するであろうか。

次に、当時の人達はどの程度の定住性を持っていたのであろうか。つまり五丁歩遺跡は連続的に住居が営まれ、環状を形成していったのか、または移動を繰り返しながら環状集落が形成されていったのか、あるいは個々別々の集団がやってきて、結果的に環状集落となったのかである。構築された住居跡の類似共通性からみて、同一集団が集落を形成していった確立が高い。しかし、どの程度の連続性があったのかは明確でない。土器および石器を見ているかぎり他地域の情報を多く採用していることが分かる。このことは、持ち運ばれた土器でないかぎり、五丁歩遺跡の人達がある程度の期間、他地域を移動し、再び五丁歩遺跡の戻った時にその情報を土器に採用した結果と考えられる。もちろん、他地域から五丁歩にやってきた人たちの土器作り、文様を採用したこともあるだろう。また、婚姻等も十分に考えられるところである。土器の文様等で言われている“範型論”的な強い規制がある一方で、新しい情報にも敏感に反応していたことも事実である。

環状集落自体は、当時かなり一般的な集落のあり方を示していると考えられ、縄文社会の基本であり、決して特別視されるものでない。石器の中で特徴的な「板状石器」及び長方形住居跡の必要性、これが五丁歩集落の性格を反映しているものと考えられる。「板状石器」が植物纖維を取るための加工工具であるとすれば、編み物が生産されていたことになる。「板状石器」の出土する遺跡を見ると先述のように出土量に極端な差が見られる。つまり、極端に多い遺跡は植物纖維の加工場であった可能性が高い。「塩沢臼」の里はかららずも縄文時代から“織物”的な産地であったのであろうか。

第V章 十二木遺跡

1 遺跡の概要

十二木遺跡は五丁歩遺跡とは、谷を二つ挟んだ南側に位置する。遺物は数地点で確認されており、早期から後期に至るまで長期にわたったと認められる(家田ほか1990)。発掘調査は、丘陵斜面の最先端部約930m²が調査対象となった。出土遺物は早期、前期、中期にわたっている。遺構は、土坑が主で、住居跡等は確認されなかった。

2 層序

十二木遺跡の今回発掘調査を行なった区域は、遺跡の先端部で、北側に向かって緩やかな傾斜を示している。地山ローム層までは3層に分かれる。I層は10~30cmの厚さで、表土層と腐植土である。II層は黒色のいわゆる包含層で、全般的に炭片が認められる。厚さは20cm前後である。このII層は全面に認められず、部分的に切れている。III層は、地山漸移層で20~30cmと比較的厚い堆積を示している。



第147図 南壁セクション図

3 遺構

確認された遺構は、そのほとんどがピット¹⁾である。住居跡は確認されていない。

ピット 2

調査区の一番南側にある。南側は境界線にあたるため完掘できていない。平面形は、ほぼ円形に近くなると思われる。径約150cm、深さ約80cm、で掘り方は垂直に近い。埋土は暗褐色土を中心としたものであるが、ロームブロックや炭を多く含んでいる層が多くあり、おそらく人為的に埋められた可能性が高い。

ピット 3

調査区の南側、ピット2の北西側に位置している。長径360cm、短径260cmの不整規円形で、深さは20cmと浅く、北に向かって緩やかな傾斜を示す。埋土は暗褐色土が主体で、ロームブロックを混入する。底面

1) すべての穴についてピットという呼び方をしている。発掘調査時にピットNoとしてそのように付しているため、報告においてもそのまま用いることとした。したがって本来土坑、フラスコ状土坑となるのも便宜上ピットとして扱った。

3 造 構

は安定せず、凸凹が多く見られる。土坑の北側には方形の石組みがある。土坑の底面に作られていることからこの土坑に付随する石組みとすることができる。石組みは長さ60cmほどの細長い川原石を方形に組んでいる。大きさは80×70cmくらいである。石組みの上面及び内部には、焼土、炭等が見られることから、炉として使用されたものと考えられる。この他にも39、45の土器が出土している。

ピット11

調査区の中央よりやや南側に位置する小形の土坑である。長軸90cm、短軸約50cmの不整形で、深さも約10cmと浅い。底面は水平でなく傾斜をもっている。覆土内には木炭が少し見られる。

ピット19

ピット11の隣に位置する。長軸110cm、短軸50cmの橢円形を呈し、深さは約15cmを測る。ピット11と同様に底面はやや傾斜をもっている。埋土には木炭をわずかに含んでいる。

ピット20、21

調査区の中央よりやや北側に位置する。ピット20は、いわゆるフ拉斯コ状土坑である。ピット21は浅い土坑で、ピット20がピット21を切っており、ピット20の方が新しいことがわかる。ピット20は上面平面形は円形に近く長軸190cm、短軸170cmを測る。底面は不整円形で径260cm前後である。また深さは約150cmと深い。埋土は、最上面に焼土があり、8層までがV字状の堆積を示し、以下は水平堆積をしている。8層以下の水平堆積埋土は、ローム層と暗褐色土の互層で崩落土である。したがって、当初、上面の口は、かなり小さかったものと思われる。ピット21は不整形の土坑で、長軸の南側はピット21により切られて、大きさは不明であるが、短軸は約2mを測る。

ピット22

ピット20の東隣に位置する。平面形は円形に近く径約90cmを測る。深さは約15cmと浅く、埋土は木炭を含む暗褐色土である。

ピット23

ピット22の東隣に位置する。橢円形に近い土坑である。長軸100cm、短軸70cmを測る。埋土はほとんどが地山土で木炭を若干含む。60、62の土器が出土している。

ピット25

調査区のほぼ中央よりやや北側に位置する円形の土坑である。直径約120cmを測る。深さは約20cmで、掘り込みは垂直に近い。埋土は地山土と黒色土がブロック状に混入している。

ピット30

調査区の中央よりやや北西よりに位置する円形に近い土坑である。径約80cmを測る。掘り方はほぼ垂直であるが、南側がややオーバーハングしている。深さは約60cmである。埋土は暗褐色土に木炭片を含んでいる。

ピット31

調査区の中央西側に位置する。不整形の土坑で、東側及び西側には擾乱と思われる張り出しがある。この張り出し部を除くと、長径約200cm、短径約150cmで、深さは約40cmを測る。埋土は、木炭をわずかに含む暗褐色土である。5～9、14、42の土器が出土している。

ピット32

ピット31のすぐ南側にある小ピットである。平面形は隅丸方形に近く、掘り込みは垂直に近く、深さは約25cmを測る。埋土は暗褐色土である。ピット内南東側に小ピットがある。

ピット41

調査区の北側に位置する。隅丸長方形に近い土坑である。長径約180cm、短径約120cmを測る。深さは約30cmで、底面は東側に向かって緩やかに傾斜する。埋土は黒色～暗褐色土で炭片を少し含む。

ピット42

調査区の東側に位置する不整形の土坑である。長径約150cm、短径90cmで西側が三角形状に細くなっている。深さは約20cmで底面は東側に向かって緩やかに傾斜している。埋土は暗褐色から黒色で木炭を少量含んでいる。

以上の他、ピットや風倒木があるが、明確な遺構は認められない。

4 遺 物

A 土 器

出土した土器は小破片が多く、復元できたものはない。多くが包含層出土で、遺構出土の土器は少ない。
遺構出土土器

ピット3出土土器（1）

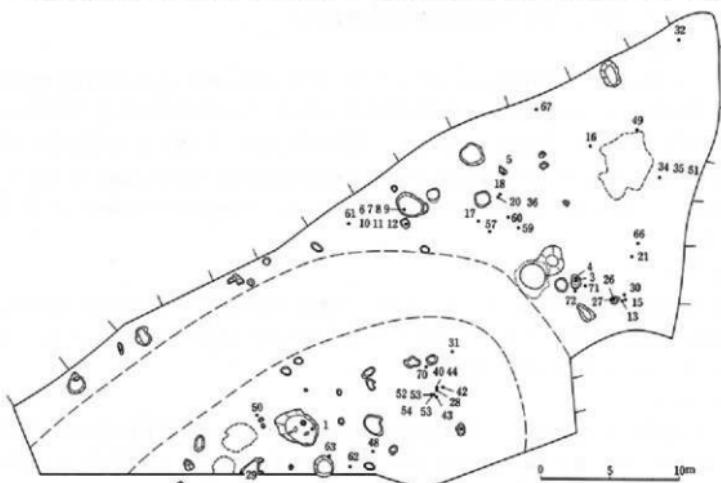
底部である。底径約7cmを測る。底部やや凸状の丸みをもつ。胎土内にパミス状の白色粒を含む。胸部繩文が施文されるが原体は不明。時期不明。

ピット16出土土器（2）

深鉢の胸部破片であるが全体を知ることはできない。灰褐色で胎土内に纖維を含む。外面繩文が施文されているが、原体は不明。早期から前期の土器と思われるが明確ではない。

ピット23出土土器（3、4）

3は深鉢胸部破片。茶褐色を呈し、胎土内に多量の纖維を含む。内面はなめらか。繩文R.L. 4も3と



第148図 十二木遺跡土器出土分布図

4 遺物

ほぼ同様の色調、胎土である。内面炭化物付着。縄文原体は不明。3と同一個体の可能性がある。前期前半の土器であろう。

ピット26出土土器（5）

深鉢の胴部破片。灰褐色を呈し、胎土内に小砂利を多く含む。また繊維も認められる。外面横ハケ状の擦痕があり、また左下がりに条痕様の文様も認められる。内面はあれている。外面スヌ付着。早期後半の土器と考えられる。

ピット31出土土器（6～12）

6は底部破片である。推定底径10cm。茶褐色を呈し、胎土内に小砂利を多く含む。7は深鉢胴部破片。茶褐色を呈し、胎土内に雲母、石英粒を含む。細い半截竹管による区画で、区画内に同一工具による平行線束を充填している。8～10は同一工具と考えられる。茶褐色を呈し、やや厚手である。縦に波状条線が認められる。11は深鉢口縁部破片である。茶褐色で胎土内に繊維が目立つ。外面は縄文R L。12はやや厚手で暗茶褐色。胎土内に多くの繊維を含み断面黒色。縄文R L。7は中期初頭、8は中期末～後期初頭、11、12は前期初頭の土器と考えられる。

包含層出土土器

I類（13～16）

胎土内に多くの繊維を含み、沈線により文様を描いているものである。三点共暗茶褐色で断面は黒色。13は口縁部破片である。細い沈線で横、斜方向が認められる。14はかなり太い沈線である。外面にスヌがこびりつく。15も細い沈線である。13と同一個体か。また18もやや太めの沈線によっている。このうち、16は沈線の感じから田戸下層式に、また14は、早期後半の鶴ヶ島台式に比定できると考えられる。13、15は明確でない。

II類（17～20）

やはり胎土内に繊維を含むがI類よりやや厚手で、色調も明るく灰茶褐色である。胎土内には白色の小砂利が目立つ。擦痕が認められる程度である。時期は明確でない。

III類（21～35）

胎土内に繊維を含み、全面縄文のみの土器である。21～24は同一個体と考えられる。21は口縁部破片で外面多縄文R Lが施文され、または口唇部にも施文が見られる。25は丸底の底部破片である。縄文はL R。26、27は同一個体である。縄文R L？。28、29も同一個体と考えられる。縄文R L？。32は他に比べて明るく外面黄褐色である。縄文R Lで縦の条である。33は茶褐色で焼成堅緻。外面横羽状縄文で、原体は、多縄文R L、L Rである。58、59はやや厚手である。縄文は不明。このIII類はおよそ前期前半のものと思われる。

IV類（36、37）

胎土内に繊維を含み、文様に刺突文を用いているものである。36は口縁部破片、37は底部破片である。外方向に直線的に開く深鉢と考えられる。底部はやや上げ底風となる。刺突はヘラ状工具によるもので底部にも見られる。前期前半の土器であろう。

V類（38～46）

胎土内に繊維を含み、縄文地上に爪形文を有するものである。38～45は同一個体と考えられる。38、39は口縁部破片である。縄文はR Lで、口縁にそって2列の爪形文がめぐる。43～45は頸部破片で、頸部にそって爪形文がめぐっている。46は無文で、一条の爪形文が認められる。前期前半の土器と考えられる。

VI類 (47、48)

胎土内に織維が目立たず、縄文のみのものである。47は厚手の土器で太い原体であるが燃りは不明。48は縄文LRである。時期は不明。

VII類 (49)

爪形文を多用する土器である。胎土内に織維を多く含む。全体の器形は明確でない。口縁は波状口縁であるが、小波状の突起も認められる。復元図が正しいかどうかは明確でない。口縁部にそっては三条の爪形文がめぐらしく、その下に山形に三条の爪形文が配される。また横方向の二条の爪形文がめぐらしくある。縄文は不明。いわゆる有尾式土器に近いであろうか。

VIII類 (50)

胎土内に織維を含まず、幅広の爪を用いている土器である。縄文はRL。幅広の爪を使用していることから、あるいは西日本系の土器であろうか。

IX類 (50)

胎土内に織維を含まず、平行沈線により文様を描いているものである。口縁部にそって3本一組の櫛状工具により、平行線文、波状文をくり返している。縄文はRLである。また、円形竹管刺突が見られる。諸縦a式であろうか。

X類 (52~56)

半截竹管による平行線文及び爪形文を多用する土器である。52、53は同一文様構成をとる。52は胴部破片である。隆帯にそって沈線がめぐらしくある。隆帯上には太いキザミが付される。隆帯にそっては逆C字状の爪形文がめぐらしくある。上部には、木葉文を変形させたような入組状の弧状平行文が見られる。縄文はRLで下半部は継ぐり文である。54、56は52、53どちらかの同一個体である。56も同様の文様であるが、爪形文がC字状となる。54は口縁部破片である。口縁部は継ぐり文で外反する。半截竹管による平行波状文が不規則に走っている。諸縦b式に比定できる。

XI類 (57~62)

細い半截竹管による半隆起線束及び格子目文の土器を一括した。57には縄文RLが見られる。中期初頭の土器である。

XII類 (63、64)

63は胴部破片で、頸部に半隆起線文が二条めぐらしく、その上に三角印刻が見られる。64はX字状の把手である。いわゆる五領ヶ台式土器である。

XIII類 (65、66)

隆帯による渦巻文をもつ土器である。いずれも縄文はRLである。中期後半の大木8b式~9式土器であろう。

XIV類 (67)

旋沈線の間に刺突を充填している。時期は明確でないが後期に入るであろうか。

XV類 (68~71)

底部及び胴下半の土器を一括する。68は底部が外に張り出している。沈線が見られる。70は高台付である。71は胴下半部で無文である。

耳栓 (72)

無文である。推定径2.7cm、厚さ1.2cmを測る。黒色に近く、赤彩が一部認められる。

B 石 器

出土した石器は表98に示すようにいわゆる狭義の石器170点、この他石核20点、剝片類551点、板状石器の素材（原石・薙素・剝片）19点である。これ以外に搬入石材と考えられる自然礫類415点が出土している。なお石器の99%は遺構外から出土している。

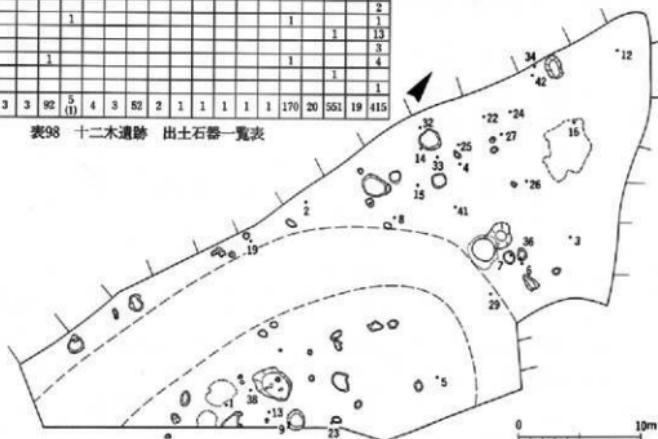
これらの石器の所属時期については、ナイフ型石器・石刃は旧石器時代、三角錐形石器は早期の所属と考えられる。これ以外は、判然としないが、伴出土器から縄文時代早期・前期・中期のいずれかに所属するものと思われる。

石器の資料提示については、実測図・観察表によった。実測図の表現、観察表の記載項目等は五丁歩道跡とはほぼ同様であるが、出土地点については註記Noを記入してある。また、掲載したものについては、出土地点を第149図に示した。

以下、特徴的な器種について説明を加える。

21は偏形長大砾を素材とする大型の打製石斧である。二次加工は粗雑ながら、両側縁にツブシの加工が見られる。基部の形状から未完成品の可能性もある。25は、棒状で基部横断面形が楕円形、刃部は円刃で両凸刃のいわゆる乳棒状磨製石斧である。基部の一部は欠損し、刃部には使用痕が認められる。39は極めて小型の石皿で、両側縁が抉られる。裏面には敲打状の凹痕が認められる。40は绳文時代早期に多出する三角錐形石器である。41は石刃で、旧石器時代の所産と推定される。両側縁に使用の結果と推定される微細剥離が認められる。42は綫長削片の基部に極厚型細部調整の施されたナイフ形石器である。細部調整は裏面には施されず、全て正面に施され、左右均等に行なわれるが、打面は除去されていない。先端部は欠損するが、尖頭状と考えられ、長さが約10.5cm程度の大型品と推定される。両側縁には刃こぼれ状の微細剥離が観察される。形状から、「杉久保型ナイフ形石器」と推定される。

卷98 十二木道跡 出土石器一覽表



第149図 十二木遺跡出土石器分布図

要 約

- 1 五丁歩遺跡は新潟県の南西部、南魚沼郡塩沢町大字舞子字五丁歩に所在する。遺跡は坂土山の形成した扇状地端部、魚の川右岸標高約260mにある。
- 2 調査は関越自動車道の建設にともない、昭和58~59年にわたって発掘調査を実施した。調査面積は、約18000m²である。
- 3 調査の結果、遺跡は縄文中期前半の環状集落であることが判明した。発掘により環状集落の全容が明らかにされたことは、全国的にも例が少なく、貴重な資料となった。検出された遺構には、住居跡65基、小型フ拉斯コ状土坑38基、大型フ拉斯コ状土坑9基、Tピット48基、土坑56基、配石等がある。このうち中期前半の環状集落と関連する遺構は、住居跡59基、小型・大型フ拉斯コ状土坑、土坑、配石である他の住居跡は、中期後葉が5基、その他が1基あり、Tピットは集落形成以降と考えられる。
- 4 環状集落を形成している住居跡には、掘り込みの明確な竪穴住居跡(A類)、長方形の柱穴配列をとり、地床炉をもつ住居跡(B)、同じく長方形の柱穴配列をとり、石畳炉をもつものの3種類がある。床面積は長方形の方が大きい傾向にあるが、30m²を越えるものではなく、いわゆる「大型住居」は存在しない。
- 5 環状集落の内側には、墓と思われる土坑がめぐらし、中央部は広場となっている。また、集落に接して外側には、大、小フ拉斯コ状土坑があり、外周部は廻楽場となっている。
- 6 遺物も中期を中心として大量に出土している。土器では、いわゆる「新巻類型」「鏡町類型」と呼ばれる一群に類似する土器をはじめとして、各地の文様要素を取り入れた在地色の強い土器が多く出土している。信濃川流域では、いわゆる火焰型土器の出現期にあたるが、隆帶系の土器でも火焰型土器らしい要素は全く認められない。また、北陸系土器も非常に少なく、大木系、北陸系土器の目立った堀之内町清水上遺跡とは全く異なる様相を呈している。また地理的に関東地方に近いこともあって、勝坂式阿玉台式が越後としてはかなりまとまって出土している。
- 7 石器では、縄文集落で一般的に認められる器種が出揃っているが、その中で特徴的なものは、片刃打製石斧、彫刻石皿、砥石、板状石器等である。片刃打製石斧は、背面に主要剝離面を大きく残しているもので、厚みのある石斧である。分布の中心は魚沼地方にあり、鐵様の使用方が考えられる。彫刻石皿は7点出土しており、1遺跡の出土量としては他を圧倒している。また、砥石が多いことも一つの特徴としてあげられる。もっとも注目されるのが板状石器である。約800点の出土があり、この集落の性格を考えるうえで重要な器種である。裏面が光沢を持つほど磨れており、その使用法が注目されるが、植物繊維の加工に関係があるのでないかと考えられる。
- 8 この五丁部集落の存続期間はそれほど長くなく、大木7b~8a式段階であり、堀之内町清水上遺跡とはほぼ同様である。信濃川流域の平野部とは土器様相等にかなりの違いがあり、山間部の集落として区別することができる。
- 9 この五丁歩遺跡の隣台地にある十二木遺跡も一部調査された。ここでは集落跡は確認されなかったが、フ拉斯コ状土坑、土坑、ピットがあり、土器では縄文早期から後期まで断続的に認められた。また、旧石器時代の所産と考えられるナイフ、石刃各1点が出土している。

引用 参考文献

- 会田 進はか 1972 「聚久保遺跡」 岡谷市教育委員会
- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 1980 「日本の旧石器」 立風書房
- 赤山容三・小宮俊久 1990 「三原田遺跡第2巻」 群馬県企業局
- 阿子島香 1979 「不定形石器」「北海道亀田郡七飯町下繩文時代遺跡出土資料」 聖山 『考古学資料別冊一』
2 東北大学文学部考古学研究会
- 安達厚三 1983 「石皿」「縄文時代の研究」 7 雄山閣
- 阿部朝衛 1979 「ビニス・エスキーユ(楔形石器)」「北海道亀田郡七飯町下繩文時代遺跡出土資料」 聖山
『考古学資料別冊一』 2 東北大学文学部考古学研究会
- 阿部朝衛 1985 「縄文時代石器研究の視点と方法」「法政考古学」第10集 法政考古学会
- 阿部朝衛 1987 「磨製石斧生産の様相」「史跡守地遺跡」 新潟県青森町
- 我孫子昭二 1988 「勝坂式土器様式」「縄文土器大観2 中期I」 小学館
- 阿部恭平・鳥島靖久ほか 1976 「十日町市広域バイロット地域内遺跡群調査報告書2」 十日町市教育委員会
新井順二ほか 1986 「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第6集 下佐野遺跡」 群馬県教育委員会
- 家田順一郎・小林義広 1988 「十二木遺跡 塩沢町文化財調査報告書第8集」 塩沢町教育委員会
- 池田 宇 1981 「六日町文化財調査報告書第3輯 宮下原遺跡」 六日町教育委員会
- 池田 宇 1987 「大和町文化財調査報告第2号 柳古新田下原A遺跡」 新潟県大和町教育委員会
- 池田 宇 1988 「塙沢町文化財調査報告書第7輯 万條寺林遺跡」 新潟県塙沢町教育委員会
- 石坂茂・岩崎泰一 1988 「越糸文土器文化における石器群の一様相ースタジオ形石器と三角錐形石器を中心
としてー」「研究紀要ー5ー」 団体法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石沢寅二 1976 「堂尻遺跡」「苗場山麓地域開拓総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書」 新潟県津南町教育
委員会
- 石本 弘・大平好一ほか 1990 「国営総合農地開発事業 矢吹地区遺跡調査報告書6 桑名邸遺跡(第2次)
福島県文化財調査報告書226集」 福島県教育委員会
- 石山周藏 1982 「長野県中央道埋蔵文化財埋蔵地発掘調査報告書—原村その5— 阿久遺跡」 日本道路公
團名古屋建設局 長野県教育委員会
- 今村啓爾 1985 「五個ヶ台式土器の編年」「東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第4号」
- 植田 真 1988 「洛沢式土器様式」「縄文土器大観2 中期I」 小学館
- 上原甲子郎 1963 「大蔵遺跡」 五泉市教育委員会
- 江坂輝秀 1977 「沖ノ原遺跡」 津南町文化財調査報告書No.12 中魚沼郡津南町教育委員会
- 江坂輝秀・渡辺 誠ほか 1977 「新潟県沖ノ原遺跡発掘調査報告書」「津南町文化財調査報告書」12 新潟県
津南町教育委員会
- 海老沢稔 1982 「茨城県内における縄文中期前半の土器様相(1)」「婆良岐考古」第4号
- 海老沢稔 1984 「茨城県内における縄文中期前半の土器様相(2)」「婆良岐考古」第6号
- 遠藤 佐はか 1987 「日本国有鉄道小千谷第二発電所予定地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書鹿右門山遺
跡中道遺跡、中道東遺跡」 小千谷市教育委員会
- 大久保知巳ほか 1981 「松本市内田雨掘遺跡—緊急発掘調査報告書—松本市文化財調査報告No.20」 松本市
教育委員会
- 大島村史編纂委員会 1991 「大島村史」 大島村
- 大塚昌彦ほか 1987 「行幸田山遺跡」 津川市教育委員会
- 大山 柏 1927 「打製石斧」「論集日本文化の起源第1巻 考古学(1971)」 所収

- 岡本勇・中川成夫 1967 「大貝遺跡の調査」 立教大学考古学研究会
- 小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における縦条体圧痕文土器の一様相」『信濃』第41巻第4号 信濃史学会
- 可児弘明ほか 1962 「津南町文化財調査報告4 上野遺跡」 津南町教育委員会
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980 「石器の記録と計測」「圓錐石器の基礎知識」II 柏書房
- 加藤三千雄 1986 「第6章縄文時代の遺物、第一節土器、第8群土器」「真脇遺跡」 石川県能登町教育委員会
- 金子拓男・寺崎裕助・齐藤基生・高橋恭子ほか 1974 「森上遺跡調査概報」 中魚沼郡中里村教育委員会
- 金子拓男ほか 1975 「苗場山麓地域農業開発事業区域内遺跡発掘調査報告書」 中魚沼郡中里村教育委員会
- 金子拓男 1981 「火焔土器」「縄文文化の研究4」 有山閣
- 金子拓男・寺崎裕助ほか 1982 「羽黒遺跡」 見附市教育委員会
- 金子拓男ほか 1982 「柏崎市史資料集・考古篇2」 柏崎市史編さん室
- 金子拓男 1986 「中期の文化」「新潟県史 通史編I 原始・古代」 新潟県
- 金子拓男ほか 1987 「柏崎市史資料集・考古篇1」 柏崎市史編さん室
- 唐木孝雄ほか 1988 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」塩尻市内その1-1 長野県教育委員会
- 川西町史編纂委員会 1986 「川西町史資料編上巻」 川西町
- 神沢昌二郎ほか 1983 「松本市内田雨堀遺跡」 松本市教育委員会
- 菊地 実ほか 1986 「三後沢遺跡 十二原II遺跡」 群馬県教育委員会
- 北村 売・佐藤俊幸・高橋 保・藤巻正信 1990 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩野I遺跡・上林塚遺跡」 新潟県教育委員会
- 木下平八郎・松永満夫ほか 1975 「本城遺跡」「荒神山遺跡」「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一諏訪市その3-昭和49年度」 長野県教育委員会
- 工藤利幸 1982 「岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書(蔵内遺跡)」(財)岩手県埋蔵文化財センター
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 「十二原遺跡 大原遺跡 前中原遺跡」
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 「下佐野遺跡II地区(I)縄文時代・古墳時代編」
- 群馬県企業局 1980 「三原田遺跡(住居編)」
- 群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史資料編I」 -原始古代1-
- 小瀬一夫・小島正裕・丹野雅人 1987 「馬高系土器群の系譜—土器型式の伝播と情報の流れ—」東京都埋蔵文化財センター研究論集V 東京都埋蔵文化財センター
- 小島俊彰ほか 1981 「長者ヶ原遺跡範囲確認調査板査」 条魚川市教育委員会
- 小島俊彰 1986 「7 第7群土器 朝日下層式期」「真脇遺跡」 能登町教育委員会 真脇遺跡発掘調査団
- 小島俊彰 1974 「不動堂遺跡」 富山県朝日町教育委員会
- 小島幸雄・田辺早苗 1978 「山形敷I遺跡」「岩木地区遺跡群発掘調査概報」 上越市教育委員会
- 後藤秀一 1979 「敲石・凹石・磨石」「北海道亀田郡七飯町下戸糸文時代遺跡出土資料 聖山 一考古学資料別冊一」2 東北大学文学部考古学研究会
- 後藤秀一 1985 「縄文時代における剣状生産について—接合資料を中心として—」「太平台史窓第四号」
- 小堀 崑 1988 「秋田県文化財調査報告書第173集 国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 上ノ山I遺跡」 秋田県教育委員会
- 小林達雄 1977 「縄文土器」「日本原始美術大系I」 講談社
- 小林達雄 1980 「縄文時代の集落」「国史学第110・111合併号」
- 小林達雄ほか 1981~1984 「長者ヶ平遺跡」 I~IV 佐渡郡小木町教育委員会

- 小林達雄 1983 「縄文時代の居住空間」『國學院大學大學院文學研究第19輯』
- 小林達雄 1986 「原始集落」『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』 岩波書店
- 小林達雄 1989 「火炎土器様式」『縄文土器大觀3 中期II』 小学館
- 小林眞寿はか 1986 「不動坂遺跡群II・古屋敷遺跡群II」 長野県東部町教育委員会
- 小林康一 1990 「縄文時代中期勝坂式・河玉台式土器成立期における堅穴住居の分析」『信濃42巻第10号』 信濃史学会
- 小林康男 1974~1975 「縄文時代生産活動のあり方」(1)・(2)・(3)・(4)『信濃』第26巻第12号 第27巻第2号・4号・5号 信濃史学会
- 小林康男 1983 「組成論」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 小林康男はか 1988 「縄文時代の道具」『長野県史考古資料編全一巻(四)遺構・遺物』 社団法人長野県史刊行会
- 駒形敏朗・寺崎裕助 1977 「藤橋遺跡」 新潟県長岡市教育委員会
- 駒形敏朗・寺崎裕助 1981 「岩野原遺跡」 新潟県長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1990 「長岡市内遺跡群発掘調査報告書 山下遺跡、青木遺跡、小越山遺跡」 長岡市教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1976 「新版標準土色帖」 日本色研事業株式会社
- 酒井重洋・橋本正春 1977 「富山県宇奈月山蒲山寺遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 佐々木勝はか 1980 「北部地区」『岩手県文化財調査報告書第51集 西田遺跡』 岩手県教育委員会
- 佐々木嘉直 1986 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書106集 手代森遺跡発掘調査報告書(時)」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木嘉直 1988 「岩手県内出土の石製円盤・土製円盤について」『紀要VII』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐原 真 1977 「石斧論—横斧から縱斧へ—」『考古論集—慶祝松崎壽和先生六十三歳記念論文集』
- 佐藤達夫 1969 「ナイフ形石器の誕生の一考察」『東京国立博物館紀要第五号』東京国立博物館
- 佐藤雅一 1985 「堀ノ内町文化財調査報告書第3輯 布場平D遺跡」 新潟県堀ノ内町教育委員会
- 佐藤雅一 1986 「湯沢町埋蔵文化財報告第5輯 川久保遺跡」 新潟県湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1988 「塙沢町埋蔵文化財報告書第9輯 大原遺跡」 塙沢町教育委員会
- 佐藤光義・長尾 修 1985 「上小島A遺跡調査概要」 福島県西会津町教育委員会
- 佐藤光義 1990 「石生前遺跡の火炎土器様式」「火炎土器様式文化圏の成立と展開」 火炎土器研究会
- 柴田秀賢・須藤俊男 1964 「原色寫物岩石岩検索図鑑」 北陸館
- 島田靖久 1977 「津南町文化財調査 報告書No.13 反里口遺跡発掘調査報告書」 津南町教育委員会
- 島田靖久はか 1974 「十日町市苗場山麓地域農業開発事業予定区域内遺跡分布調査(第1次)概報」 十日町市教育委員会
- 島田靖久はか 1975 「十日町市広域バイロット地域内遺跡群調査概報」 十日町市教育委員会
- 新藤康雄はか 1982 「神谷原II」 八王子市門田遺跡調査会
- 神保孝造 1977 「縄文時代の土器」『砺波市嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
- 親跡 喬 1988 「圓錐 南田遺跡」 中郷村教育委員会
- 鈴鹿良一ほか 1984 「上ノ台A遺跡(第1次)」「真野ダム関連遺跡発掘調査報告書V」
- 鈴木次郎 1977 「縄文時代の直刃式片刃打製石斧について—神奈川県尾崎遺跡出土例を中心として—」『神奈川考古第2号』 神奈川考古同人会
- 鈴木次郎 1977 「尾崎遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告書13』神奈川県教育委員会
- 鈴木道之助 1981 「四錐石器の基礎知識」III 柏書房
- 鈴木道之助 1983 「石錐」『縄文文化の研究』7 雄山閣

- 関沢 聰 1990 「松本市文化財調査報告 No.80 松本市坪ノ内遺跡一緊急発掘調査報告書」 松本市教育委員会
- 関根真二 1986 「糸井宮前遺跡II一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集」 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保・小池義人 1986 「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書I一中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡I」 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集」 新潟県教育委員会
- 高橋 学 1989 「秋田県文化財調査報告書第181集 八木遺跡発掘調査報告書」 秋田県教育委員会
- 高柳町史編纂委員会 1988 「高柳町史」 高柳町
- 谷井 魁 1986 「阿玉台式から見た東北南部大木式の変遷」『古代80号』
- 谷藤保彦・関根慎二 1985 「群馬県における浮島式・奥津式土器の研究(前)」「研究紀要」2 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦・関根慎二編 1989 「第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題」
- 茅原一也編 1977 「新潟県地質図」 新潟県
- 塙田 光 1964 「群馬県・新巻遺跡の中期縄文土器」 「下総考古学」1 下総考古学研究会
- 塙本節也 1990 「北関東・東南北における中期前半の土器様相」『古代89号』
- 堤 隆 1991 「川原田・城之原遺跡発掘調査概要報告書」 御代田町教育委員会
- 坪井清足ほか 1959 「国解考古学事典」 東京創元社
- 津南町史編さん委員会 1984 「津南町史 資料編上巻」 津南町役場
- 寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』7
- 寺内隆夫 1986 「V章1第土器4中期中葉土器の分類と検討」「梨久保遺跡」 長野県岡谷市教育委員会
- 寺内隆夫 1987 「勝坂式土器成立期に見られる差異の顕在化」『下総考古学』9
- 寺内隆夫 1987 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ—型式変遷における一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 寺内隆夫 1988 「俎原遺跡出土土器の検討」「平出遺跡考古博物館、歴史民俗資料館紀要」第5集 塩尻市立博物館
- 寺内隆夫 1988 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ」「長野県埋蔵文化財センター紀要1」 長野県埋蔵文化財センター
- 寺内隆夫 1991 「長野県上水内郡三水村・上赤塚遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61.62号 長野県考古学会
- 寺内隆夫・野村一寿 1989 「『縄文土器大観』の勝坂式土器関連解説を読んで—「勝坂式土器研究」「下総考古学』8号との違いを通して—」『下総考古学』11
- 寺崎裕助 1988 「新潟県長者が原遺跡出土の縄文土器」「新潟考古学談話会会報」第2号
- 寺崎裕助 1990 「火炎土器様式の出現の展開」「火炎土器様式文化圏の成立と展開」 火炎土器研究会
- 寺村光晴ほか 1987 「史跡寺地遺跡」 新潟県青森町
- 田庭義正・高橋保・高橋保雄ほか 1990 「新潟県埋蔵文化財報告書第55集 清水上遺跡」 新潟県教育委員会
- 富樫雅彦・佐藤雅一 1985 「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相について(上)」「三条考古学研究会機関誌」第3号
- 直井雅直 1985 「赤木山遺跡群I」 松本市教育委員会
- 中川成夫・岡本勇・加藤晋平ほか 1961 「小坂遺跡」 十日町市教育委員会
- 長野県 1983 「長野県史 考古資料編 全一巻(3) 主要遺跡(中信)」 社団法人長野県史刊行会
- 長野県 1988 「長野県史 考古資料編 全一巻(4) 遺構・遺物」 社団法人長野県史刊行会

- 中里村史専門委員会 1985 「中里村史 資料編上巻」 中里村史編さん委員会
- 中島庄一 1983 「使用痕」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 中村孝三郎 1966 「長岡市立科学博物館研究調査報告第8冊 先史時代と長岡の遺跡」 新潟県長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1970 「越路町文化財調査報告第3冊 朝日百塚・並松遺跡」新潟県越路町教育委員会
- 中村孝三郎・小林達雄 1973 「千石原」 新潟県長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1978 「越後の石器」 学生社
- 中村孝三郎 1980 「柿の木平遺跡」 『下田村文化財調査報告書第12 向山段丘～遺跡の緊急調査報告書』 下田村教育委員会
- 中山雅弘 1989 「いわき市埋蔵文化財調査報告第22冊 下平石遺跡～縄文時代集落跡の調査」 福島県いわき建設事務所・福島県いわき市教育委員会
- 西村正衛 1972 「阿玉台式土器縄年の研究概要」 早稲田大学文学研究科紀要18
- 新潟県教育委員会 1979 「火焔型土器」 新潟県埋蔵文化財図録集1
- 新潟県 1983 「新潟県史 資料編」 原始・古代・考古編
- 西沢隆治 1982 「深沢遺跡」長野県史 考古資料編 全1巻(2)主要遺跡(北・東部) 長野県史刊行会
- 野村一寿 1984 「塩尻市鏡町遺跡第1号住居跡出土土器とその類例の位置づけ」中部高地の考古学 III
- 野村一寿 1988 「II時代と縄年(5)縄文中期の土器」『長野県史考古資料編全1巻(4)遺構・遺物』長野県史刊行会
- 芳賀英一・高橋信一 1987 「国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告V-1清水上遺跡・中江聖の宮遺跡」『福島県文化財調査報告書』117 福島県教育委員会
- 伴 信夫 1974 「荒神山遺跡」 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査包蔵報告書一諏訪市内その1・その2』 長野県教育委員会
- 伴 信夫ほか 1976 「大石遺跡」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告一原村その3
- 樋口誠司 1989 「母胎としての住居」『IDOLMEN』 再刊1号 ヴィジュアルフォーラム
- 樋口清之 1940 「重玉考」『考古学雑誌第30巻第六号』 日本考古学会
- 広神村史編纂委員会 1980 「広神村史」 広神村
- 廣野耕造 1990 「馬高式土器の再検討」『新潟史学』第25号 新潟史学会
- 福島邦男 1983 「後沖遺跡」 望月町教育委員会
- 藤田亮策・寺田兼方・寺村光晴 1961 「柄倉」 柄尾市教育委員会
- 藤田亮策ほか 1964 「民者ヶ原」 糸魚川市教育委員会
- 藤田富士夫ほか 1975 「杉谷(A・G・H)遺跡」 富山市教育委員会
- 藤巻正信・國島聰・北村亮・田辺早苗・田中靖 1991 「新潟県埋蔵文化財調査報告第29集 城之原遺跡」新潟県教育委員会
- 古川知明 1983 「古沢A遺跡発掘調査概要」 富山市教育委員会
- 松代町史編纂委員会 1989 「松代町史」 松代町
- 松本茂 1990 「福島県の火炎土器様式」「火炎土器様式文化圏の成立と展開」 火炎土器研究会
- 松本茂ほか 1991 「東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡」福島県文化財調査報告書第243集 福島県教育委員会
- 松本市教育委員会 1980 「松本市笠賀牛の川遺跡」
- 真山悟・伊藤裕・今野隆ほか 1987 「小深川遺跡」 宮城県教育委員会
- 三上徹也 1985 「梨久保式土器 再考」 『長野県埋蔵文化財センター紀要 1』

- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51号 長野県考古学会
- 浜 春はか 1972 「富山県史」 考古編 富山県
- 南 久和 1985 「北陸の縄文時代中期の編年 他9編」 一南 久和著作集第1集一転形器房
- 宮下健司 1984 「日本における研磨技術の系譜—先土器・縄文時代の砥石と研究技術を中心として—」『論集日本原史』 吉川弘文館
- 六日町教育委員会 1981 「六日町文化財調査報告書第3輯 宮下原遺跡」 六日町教育委員会
- 武藤康弘 1985 「縄文集落研究の動向」『民俗建築第89号』
- 室岡 博・関 雅之ほか 1984 「長峰遺跡II」 中頸城郡吉川町教育委員会
- 目黒吉明他 1982 「七郎内C遺跡」「母畑地区遺跡発掘調査X」 福島文化センター
- 八木光則 1976 「いわゆる『特殊磨石』について」『信濃』第28巻第4号 信濃史学会
- 矢島國雄・前山精男 1983 「石錐」「縄文文化の研究」7 雄山閣
- 山岡はか 1973 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那飯島町(その3)駒ヶ根市内」長野県教育委員会
- 山口透弘ほか 1989 「房谷戸遺跡I」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山口透弘 1990 「群馬県における阿玉台式の諸様相」『研究紀要7』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山田見弘ほか 1986 「一括資料の分析—定量的分析の可能な資料について」『槇久保遺跡』 長野県岡谷市教育委員会
- 山田芳和 1986 「第6章縄文時代の遺物、第一節土器、第9群土器」「真鍋遺跡」石川県能郷町教育委員会
- 山本典幸 1988 「五領ヶ台式土器様式」「縄文土器大観3 中期II」 小学館
- 山本正敏 1990 「北陸自動車道遺跡調査報告 境A遺跡」 富山県教育委員会
- 渡辺 誠・齊藤基生ほか 1984 「八反田遺跡発掘調査報告書」『津南町文化財調査報告書』14 新潟県津南町教育委員会

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集
関越自動車道関係発掘調査報告書
五丁歩遺跡（本文編）
十二木

平成4年1月25日印刷 発行 新潟県教育委員会
平成4年2月1日発行 新潟市新光町4番地1
印刷 株式会社第一印刷所 電話 (025) 285-5511
新潟市和合町2丁目4番18号
電話 (025) 285-7161㈹